

大阪府埋蔵文化財調査報告2009-11

招提中町遺跡・Ⅲ

—府営牧野東住宅建て替え工事に伴う発掘調査—

大阪府教育委員会

大阪府埋蔵文化財調査報告2009-11

招提中町遺跡・Ⅲ

—府営牧野東住宅建て替え工事に伴う発掘調査—

大阪府教育委員会

序 文

招提中町遺跡は、枚方市東牧野町に所在する弥生時代から中世にいたる遺跡です。遺跡の所在する枚方市は大阪府の北部に位置しており、古くから淀川の水上交通などにより発展してきた地域です。

招提中町遺跡は、枚方台地の中央を流れる穂谷側下流の右岸に位置しています。府営枚方牧野東住宅の建て替え工事に伴い本格的に発掘調査が行われるようになり、府営住宅関連の調査としては今回も含めて3次にわたって実施されました。

今までの発掘調査では、弥生時代前期から中期にかけての住居の跡、中期前半の方形周溝墓が30基以上も発見され、この地の弥生のムラの様子が明らかになっています。今回の発掘調査でもムラの周辺に広がる空間利用の様相が一層はっきりすることとなりました。

調査に際しましては、地元の皆さん、枚方市教育委員会、大阪府住宅まちづくり部住宅経営室住宅整備課並びに関係各位に多くのご協力いただきました。深く感謝申し上げます。引き続き、皆様方のご理解とご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

平成22年3月

大阪府教育委員会事務局

文化財保護課長 野口 雅昭

例　　言

1. 本書は、大阪府教育委員会が、住宅まちづくり部住宅経営室住宅整備課より依頼を受け、府営牧野東住宅建て替え工事に先立って実施した枚方市東牧野町所在に所在する招提中町遺跡の発掘調査報告書・Ⅲである。
2. 現地調査は、平成17年度は調査第1グループ 副主査 横田明、平成18年度は調査第1グループ 技師 奥 和之が担当した。遺物整理は現地作業と平行して実施し、平成17年度は調査管理グループ 副主査 林日佐子、藤田道子、平成18年度は調査管理グループ 主査 三宅正浩、副主査 藤田道子が行った。
なお平成19～21年度には、報告書刊行作業を各担当者とともに三宅、藤田が担当している。
3. 本調査の写真測量は、株式会社GIS関西に委託した。なお、写真撮影フィルムについては、受託会社において保管している。
4. 本書に掲載した遺物写真の撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
5. 出土遺物および記録資料は、大阪府教育委員会で保管している
6. 本書の編集は奥が担当し、執筆は奥、横田の他に、第2章を富田卓見が行った。なお執筆者名は、奥執筆以外の部分について文末に記載した。
7. 府営牧野東住宅建替工事に伴う発掘調査・遺物整理および本書作成に要した経費は、全額大阪府住宅まちづくり部住宅経営室住宅整備課が負担した。
8. 現地での発掘調査、遺物整理および本書作成にあたっては、枚方市教育委員会、(財)枚方市文化財研究調査会、地元自治会をはじめ、多くの方々にご指導、ご助言いただいた。ここに厚く感謝する次第である。
9. 本報告書は300部作成し、一部あたりの単価は987円である。

凡　　例

1. 座標については、当遺跡の以前の調査で用いられた座標が、日本測地系平面直角座標（第VI系）であった。そのため調査区内の座標との結合をはかるために、日本測地系による地区割りを踏襲した。

現在用いている世界測地系平面直角座標（第VI系）との数値の違いについて、一例として下記に記す。

$$\begin{array}{ll} X = -129,500 & Y = -38,100 \text{ (日本測地系平面直角座標 (第VI系))} \\ \rightarrow X = -129,153.3463 & Y = -38,360.9061 \text{ (世界測地系平面直角座標 (第VI系))} \end{array}$$

2. 方位については、座標北で記し、標高については東京湾平均海面面 (T.P.) を基準とした。

3. 土色については、小山正忠・竹原秀夫編『新版土色帳』日本色彩研究所 1992年版に準拠した、

4. 遺構番号については検出順に通し番号をつけた。遺構番号、遺構の種類の順をつけた。また住居跡、建物のように複数の遺構でひとつの遺構を形成するものについては、「住居 1」のように先に遺構の種類、その後ろに通し番号をつけた。

5. 遺物については、挿図、図版の番号を一致させた。

本文目次

序文

例言

凡例

目次

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	4

第2章 位置と環境

第1節 位置的環境	5
第2節 歴史的環境	5

第3章 調査の成果

第1節 基本層序	9
第2節 既往の調査の成果	13
第3節 古墳時代前期の遺構と遺物	14
第4節 平安時代の遺構と遺物	46
第5節 中世の遺構と遺物	51

第4章 調査成果の検討

第1節 招提中町遺跡で検出した平安時代の建物について	54
第2節 招提中町遺跡で検出した古墳時代前期の竪穴住居跡について	59

第5章 まとめ

抄録

挿図目次

第1図 大阪府と調査地点	1	第9図 住居1 平面・断面図	14
第2図 調査区位置図	2	第10図 住居1 383住居平面・断面図	15
第3図 調査区地区概念図	3	第11図 住居1 383住居壁溝内板材痕跡図	16
第4図 現地公開風景	4	第12図 住居1 388土器群遺物出土状況	17
第5図 周辺の遺跡図	7	第13図 住居1 388土器群出土遺物	17
第6図 基本層序柱状図	10	第14図 住居1 383住居北西側遺物出土状況	
第7図 遺構全体図	11~12		18
第8図 包含層出土遺物	13		

第15図 住居 1 383住居北東側遺物出土状況	35
.....	18
第16図 住居 1 383住居内出土遺物	18
第17図 住居 1 384外周溝遺物出土状況	19
第18図 住居 1 384外周溝出土遺物	19
第19図 住居 2 平面図	21
第20図 住居 2 545排水溝出土遺物	21
第21図 住居 2 542住居平面・断面図	22
第22図 住居 2 545排水溝遺物出土状況	23
第23図 住居 2 516外周土坑平面・断面図	23
第24図 住居 2 512外周土坑平面・断面図	23
第25図 住居 3 平面・断面図	24
第26図 住居 3 820住居平面・断面図	25
第27図 住居 3 820住居838中央土坑遺物出土状況	26
.....	26
第28図 住居 3 820住居 838中央土坑出土遺物	26
.....	26
第29図 住居 3 820住居南西側遺物出土状況	26
.....	26
第30図 住居 3 820住居南東側遺物出土状況	26
.....	26
第31図 住居 3 820住居北西側遺物出土状況	26
.....	26
第32図 住居 3 住居内出土遺物	26
第33図 住居 3 822外周溝遺物出土状況	27
.....	27
第34図 住居 3 822外周溝出土遺物	27
第35図 住居 3 823外周溝出土遺物	27
第36図 住居 3 823外周溝遺物出土状況	28
.....	28
第37図 住居 4 平面・断面図	29
第38図 住居 4 1063住居平面・断面図	29
第39図 住居 5 平面・断面図	30
第40図 住居 5 828土坑出土遺物	30
第41図 住居 5 815住居平面・断面図	31
第42図 住居 5 811外周土坑出土遺物	31
第43図 住居 6 平面・断面図	34
第44図 住居 6 806住居808壁際土坑出土遺物	35
.....	35
第45図 住居 6 806住居平面・断面図	35
.....	35
第46図 住居 6 809外周土坑遺物出土状況	36
.....	36
第47図 住居 6 外周土坑出土遺物	37
.....	37
第48図 住居 7 平面断面図	37
.....	37
第49図 住居 I - 8 829排水溝平面・断面図	38
.....	38
第50図 4 土坑平面・断面図	39
.....	39
第51図 4 土坑出土遺物	39
.....	39
第52図 8 土坑平面・断面図	39
.....	39
第53図 20 土坑平面・断面図	39
.....	39
第54図 34 土坑平面・断面図	40
.....	40
第55図 37 土坑平面・断面図	40
.....	40
第56図 37 土坑出土遺物	40
.....	40
第57図 81 土坑平面・断面図	41
.....	41
第58図 256 土坑平面・断面図	41
.....	41
第59図 256 土坑出土遺物	41
.....	41
第60図 264 土坑平面・断面図	41
.....	41
第61図 391 土坑平面・断面図	42
.....	42
第62図 391 土坑出土遺物	42
.....	42
第63図 399 土坑平面・断面図	42
.....	42
第64図 508 土坑平面・断面図	42
.....	42
第65図 508 土坑出土遺物	42
.....	42
第66図 538 土坑平面・断面図	43
.....	43
第67図 806 土坑出土状況	43
.....	43
第68図 806 土坑出土遺物	43
.....	43
第69図 824 土坑遺物出土状況	44
.....	44
第70図 824 土坑出土遺物	44
.....	44
第71図 3 溝平面・断面図	45
.....	45
第72図 3 溝出土遺物	45
.....	45
第73図 333溝平面・断面図	45
.....	45
第74図 333溝出土遺物	45
.....	45
第75図 建物 2 平面・断面図	46
.....	46
第76図 建物 4 平面・断面図	47
.....	47
第77図 509焼土坑平面・断面図	48
.....	48
第78図 633焼土坑平面・断面図	48
.....	48
第79図 899焼土坑平面・断面図	79
.....	79
第80図 897焼土坑平面・断面図	49
.....	49
第81図 917焼土坑平面・断面図	50
.....	50
第82図 917焼土坑出土遺物	50
.....	50
第83図 1030・1031焼土坑平面・断面図	50
.....	50

第84図	1036焼土坑平面・断面図	50	第88図	964土坑平面・断面図	53
第85図	建物1平面・断面図	51	第89図	964土坑出土遺物	53
第86図	建物3平面・断面図	52	第90図	掘立柱建物配置図	55
第87図	964土坑内1053穴平面・断面 および遺物出土状況図	52	第91図	竪穴住居配置図	60

表 目 次

第1表 招提中町遺跡古代建物計測値表………56

第2表 招提中町遺跡古墳時代前期住居主軸表…61

図 版 目 次

表紙 調査地区周辺（北上空より）

図版1 調査区全景（空中写真）

図版2 住居1

1. 全景（空中写真）
2. 383住居全景（西より）
3. 383住居土層断面（東より）
4. 387壁際土坑土層断面（東より）
5. 383住居壁溝土層断面（東より）

図版3 住居1

1. 383住居壁溝板材痕跡状況（東より）
2. 383住居ベッド状遺構土層断面
3. 670柱穴土層断面（北より）
4. 670柱穴遺物出土状況（北より）
5. 387壁際土坑周辺遺物出土状況
6. 387壁際土坑周辺東側遺物出土状況
7. 387壁際土坑周辺西側遺物出土状況

図版4 住居1・住居2

住居1

1. 383住居北東角付近遺物出土状況
(西より)
2. 383住居北西角付近遺物出土状況
(北より)
3. 384外周溝遺物出土状況（東より）
4. 384外周溝土層断面（東より）
5. 386排水溝土層断面（南より）

住居2

6. 542住居全景（東より）
7. 518土坑土層断面（東より）
8. 542住居壁溝土層断面（南より）
9. 545溝土層断面（南より）

図版5 住居3

1. 全景（空中写真）
2. 820住居全景（北より）
3. 820住居西辺壁溝土層断面
4. 820住居東辺壁溝土層断面
5. 833土坑土層断面（東より）

図版6 住居3

1. 834柱穴土層断面（東より）
2. 835柱穴土層断面（東より）
3. 836柱穴土層断面（西より）
4. 837柱穴土層断面（西より）
5. 838中央土坑遺物出土状況（北より）
6. 838中央土坑土層断面（北より）
7. 820住居南角遺物出土状況（南より）
8. 820住居東角遺物出土状況（南より）
9. 820住居西角遺物出土状況（東より）
10. 822溝遺物出土状況（東より）
11. 822溝北側土層断面（東より）
12. 822溝東側土層断面（南より）

図版7 住居3

1. 823溝遺物出土状況（北より）
2. 823溝南側遺物出土状況（西より）
3. 823溝土層断面（南より）

- 図版8 住居4・住居5
- 住居4
1. 全景（空中写真）
 2. 1063住居土層断面（北より）
- 住居5
3. 全景（北より）
 4. 829落ち込み遺物出土状況（東より）
 5. 815住居北西角遺物出土状況
(北東より)
- 図版9 住居5・住居6
- 住居5
1. 815住居全景（北より）
 2. 826柱穴土層断面（北より）
 3. 827柱穴土層断面（北より）
- 住居6
4. 全景（空中写真）
 5. 807住居東辺壁溝土層断面（南より）
 6. 808壁際土坑土層断面（西より）
 7. 825中央土坑土層断面（南より）
- 図版10 住居6・住居7
- 住居6
1. 807住居全景（北より）
 2. 809溝遺物出土状況（東より）
 3. 809溝内高坏出土状況（南西より）
- 住居7
4. 990住居全景（南西より）
- 図版11 古墳時時代前期の土坑
1. 256土坑遺物出土状況（西より）
 2. 256土坑土層断面（東より）
 3. 399土坑遺物出土状況（東より）
 4. 399土坑土層断面（南より）
 5. 508土坑（西より）
 6. 508土坑土層断面（西より）
 7. 806土坑遺物出土状況（南西より）
 8. 806土坑土層断面（西より）
 9. 824土坑遺物出土状況（西より）
 10. 824土坑土層断面（南より）
 11. 391土坑土層断面（西より）
 12. 住居2 512外周土坑土層断面
(東より)
 13. 538土坑断面（南西より）
- 図版12 建物2
1. 全景（西より）
 2. 995柱穴土層断面（南より）
3. 1000柱穴土層断面（南より）
4. 1005柱穴土層断面（南より）
5. 996柱穴土層断面（北より）
6. 1001柱穴土層断面（南より）
7. 1006柱穴土層断面（南より）
8. 997柱穴土層断面（北より）
9. 1002柱穴土層断面（南より）
10. 1007柱穴土層断面（南より）
11. 998柱穴土層断面（北より）
12. 1003柱穴土層断面（南より）
13. 1008柱穴土層断面（南より）
- 図版13 建物4・焼土坑
- 建物4
1. 建物4全景（空中写真）
 2. 509焼土坑（南より）
 3. 509焼土坑土層断面（東より）
 4. 633焼土坑（南より）
 5. 633焼土坑土層断面（南西より）
 6. 889焼土坑（西より）
 7. 889焼土坑土層断面（南より）
 8. 897焼土坑土層断面（東より）
 9. 1030焼土坑土層断面（北より）
 10. 1031焼土坑土層断面（北より）
- 図版14 建物1・建物3・中世の遺構
- 建物1
1. 建物1全景（西より）
 2. 691柱穴土層断面（西より）
 3. 699柱穴土層断面（北より）
 4. 1031柱穴土層断面（南より）
- 建物3
5. 建物3全景（空中写真）
 6. 972柱穴土層断面（東より）
 7. 973柱穴土層断面（東より）
 8. 977柱穴土層断面（東より）
 9. 964土坑・1053ピット
 10. 964土坑・1053穴遺物出土状況
 11. 1053穴遺物出土状況（西より）
- 図版15 出土遺物1
- 図版16 出土遺物2
- 図版17 出土遺物3
- 図版18 出土遺物4
- 図版19 出土遺物5
- 図版20 出土遺物6

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯（第1・2・3図）

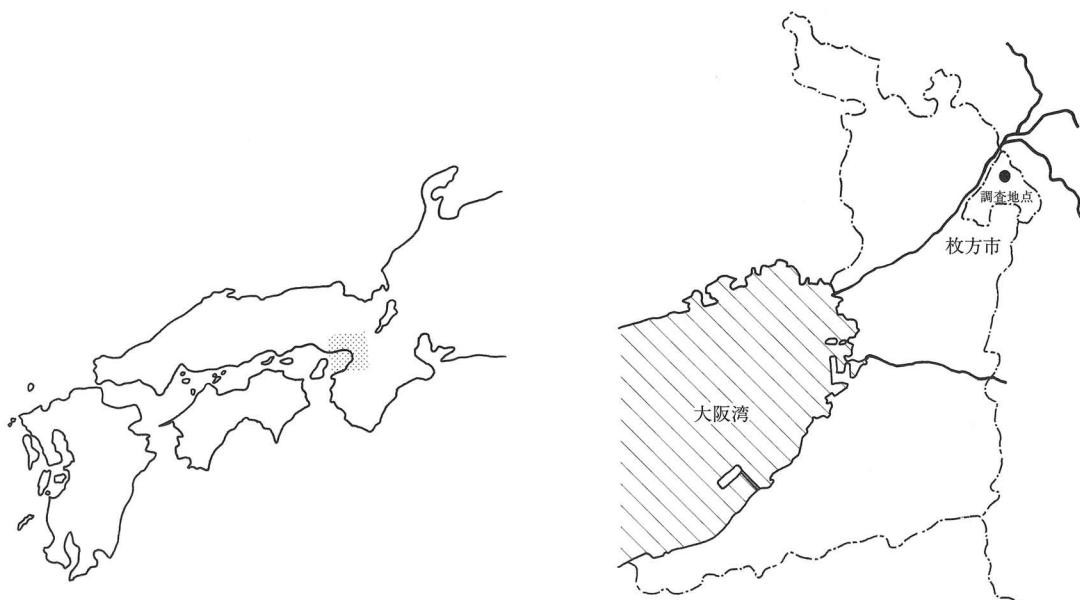
府営枚方牧野東住宅が所在する枚方市東牧野町は、招提中町遺跡の東南に一角を占めている。本府住宅まちづくり部住宅経営室住宅整備課では、老朽化した府営住宅を耐火構造の建物に建て替えを推進しているところであり、府営枚方牧野東住宅においても木造住宅及び簡易耐火住宅の建て替え工事が平成13年度より2次にわたって実施されている。

当該地周辺は、周知の遺跡である招提中町遺跡として認知されていたため、平成7年度に本府教育委員会文化財保護課は、建築部住宅建設課（当時）と建て替え工事に先立つ発掘調査の実施について協議を行なった。その結果、府営住宅建て替え予定地の遺構・遺物の有無及び調査深度の確認を目的として、試掘調査を平成7年度に実施した。その結果、弥生時代中期、奈良時代、鎌倉・室町時代の各時代にわたる包含層・遺構を検出した。この調査成果を踏まえ、工事の実施にあたっては、発掘調査について文化財保護課と事前に協議することを建築部長あてに回答した。

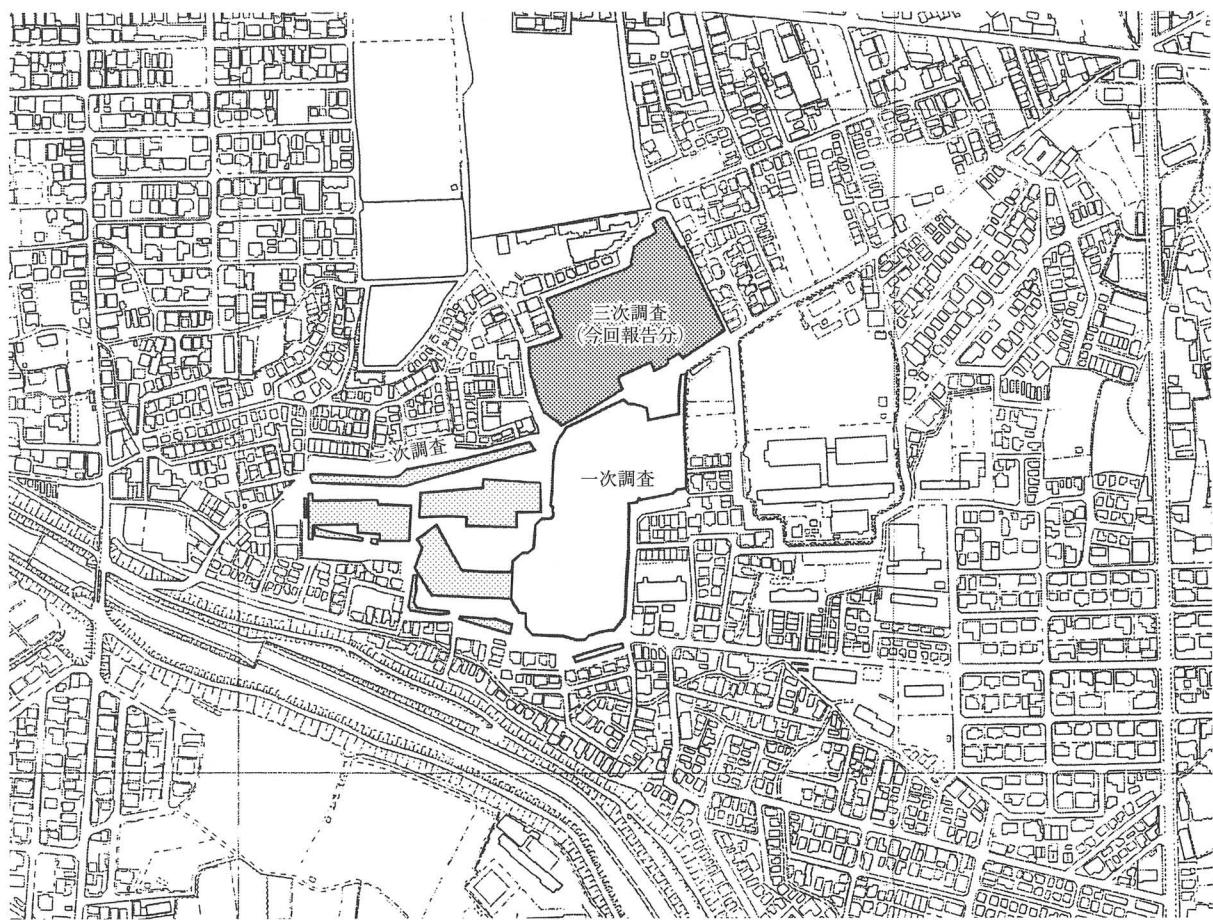
協議の結果に基づき、第1次調査は、調査第二係 技師 山上 弘を担当者とし、調査面積約18,000m²の調査を平成10年8月に着手し、平成12年3月に終了した。

遺構および出土道物の整理は、発掘調査と併行および建築都市部長（当時）の依頼により平成12・13年度の招提中町遺跡出土遺物整理事業として文化財調査事務所において実施した。その調査成果については、大阪府教育委員会『招提中町遺跡』2002が刊行されている。

第1次調査終了後、住宅整備課では、第2期の建て替え工事を計画し、文化財保護課は、遺跡の広がりを確認する目的で（第1次調査の西側に位置）、平成13年度に試掘調査を実施した。こ



第1図 大阪府と調査地点



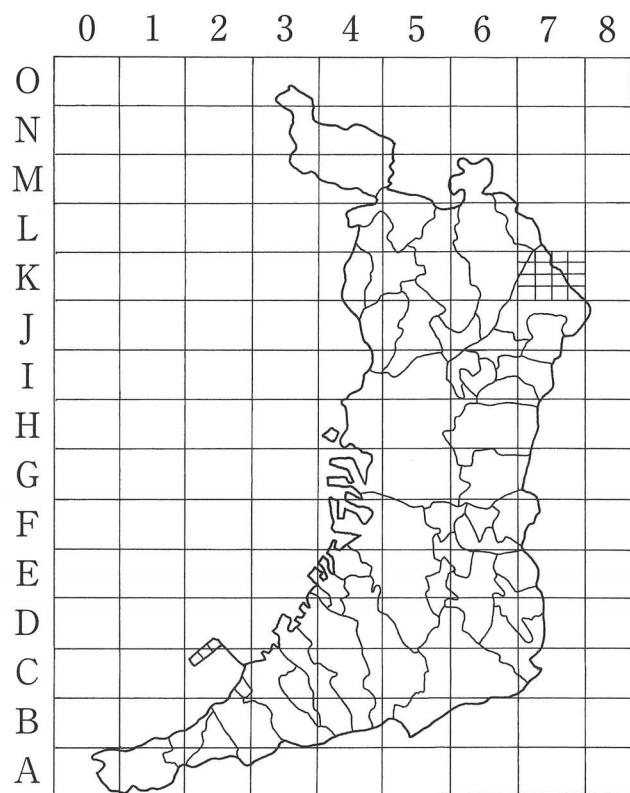
第2図 調査区位置図

の試掘調査の結果、遺跡の広がりは、第2期建て替え工事範囲全体に及ぶことが確認された。発掘調査期間と住宅整備の工事期間等の協議を重ねた結果、住宅建設用地全体を、遺構を破壊しない高さまで盛土をすることで合意し、発掘調査は、掘削深度が盛り土の範囲におさまらない、住棟部分・新設道路部分・埋管設置部分が調査の対象となった。また平成15年度は、第3次建て替え計画のある敷地内が、試掘調査の対象地となった。

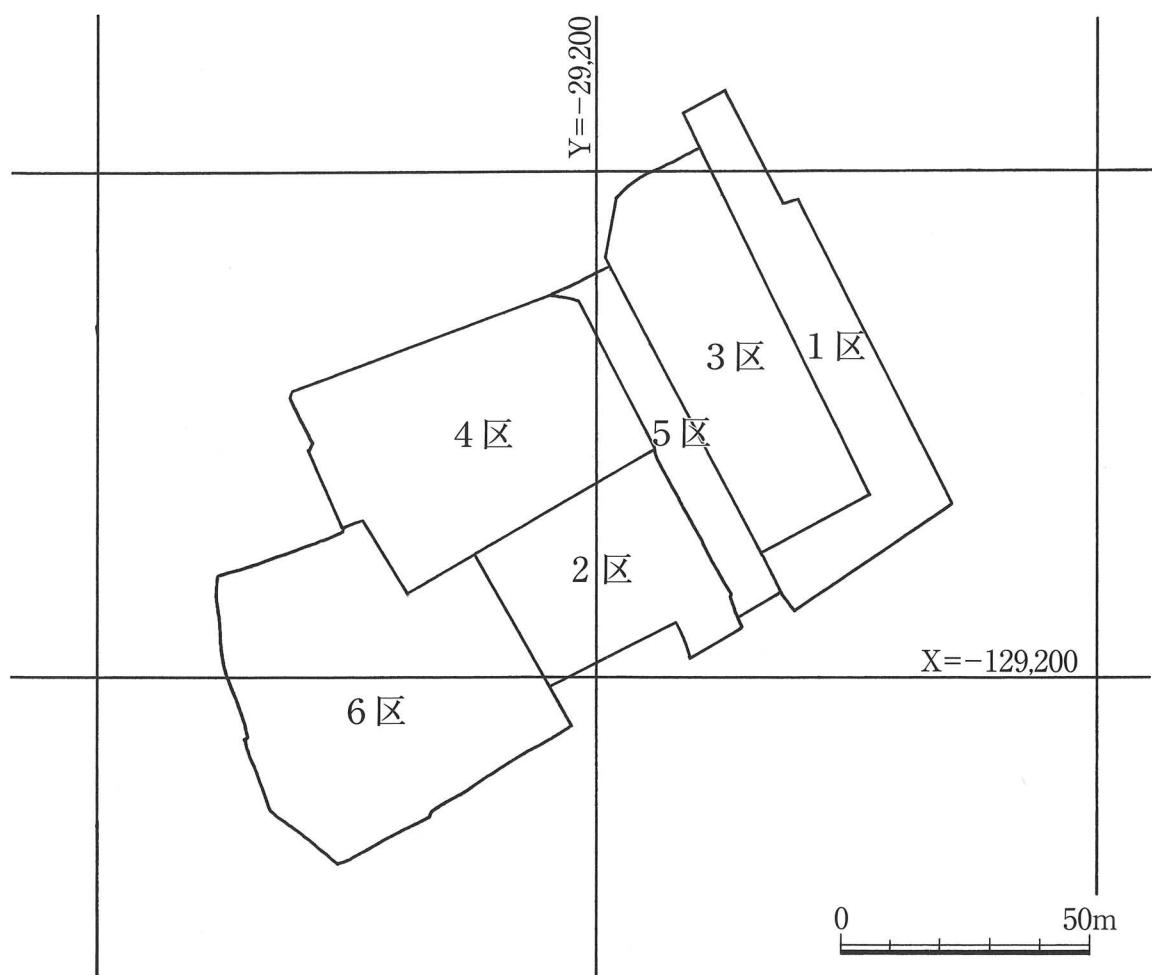
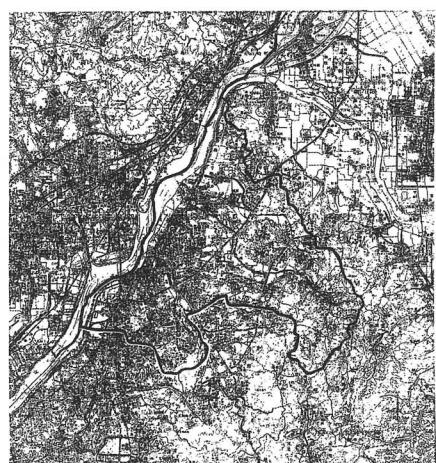
これらの協議に基づき、平成14年4月に建築都市部長から教育委員会教育長あてに埋蔵文化財調査の実施について依頼があった。この依頼に基づき、現地調査を実施し、平成14年6月に着手し平成16年3月に終了した。

遺構および出土道物の整理は、発掘調査と併行および建築都市部長の依頼により平成16年度の招提中町遺跡出土遺物整理事業として文化財調査事務所において実施した。なお、その調査成果については、大阪府教育委員会 2005『招提中町遺跡・Ⅱ』が刊行されている。

第3次調査（第1調査区の北側）は、平成15年度に実施した試掘調査の結果に基づき、協議を重ねた結果、表土からの遺構面が浅いため、敷地内全域を調査することとなった。この協議の結果に基づき、平成17年4月に建築都市部長より教育委員会教育長あてに埋蔵文化財調査の実施について依頼があった。この依頼に基づき、平成17年8月は調査第一グループ技師横田 明が担当し調査を開始した。平成18年4月からは調査第一グループ技師奥 和之が担当し、平成19年2月



13	14	15	16
9	10	11	12
5	6	7	8
1	2	3	4



第3図 調査地区概念図

までの期間、調査面積約11,066m²の調査を実施した。

出土道物の整理および報告書刊行作業は、発掘調査と併行および住宅まちづくり部の依頼により、平成20・21年度に渡って文化財調査事務所で行い、報告書刊行は平成21年度に行った。

なお、平成18年12月23日には、地元住民を対象に招提中町遺跡発掘調査の遺跡公開（第4図）を開催し、約80名の参加を得た。

第2節 調査の方法

牧野東住宅の住替えに伴う発掘調査は多年度にわたって行われているため、各年度との調査の混乱を防ぎ、また調査を円滑に進めるため、当初は、発掘調査地域全域を網羅する地区割を行っていた。しかし、平成14年度に座標の表記の仕方が日本測地系平面直角座標（第VI系）であったものが世界測地系平面直角座標（第VI系）に変わったため、地区割りの方法に混乱が生じた。その混乱を防ぐために、第3期調査については、調査地区内を10m間隔で区切り、東西をa・bのように小文字で表し、南北を1・2のように数字で表して地区を示した。

そして、これらの区画に従って出土遺物を取り上げた（第3図）。

また、検出した遺構については、個々の遺構に対して、ひとつの番号を与えた。また、建物、住居跡のように集まってひとつの遺構となすものについては、住居1のように別の呼称を与えた。

調査区の名称については、発掘調査を行った6調査区に、調査順に1から6までの呼称を与えた。

発掘調査の方法は、基本的にバックホウによる機械掘削により0.3mから0.8mの盛土および耕作土層を除去した後、厚さ0.3m前後の遺物包含層および検出した遺構を、人力により掘削した。また、調査の迅速化と省力化をはかるため、基本的にヘリコプターによる写真測量を実施した。なお、遺物の出土状況、土層断面については、適宜図面を作成した。



第4図 現地公開風景

第2章 位置と環境

第1節 位置的環境

招提中町（しょだいなかまち）遺跡は、大阪府枚方市東牧野町・招提中町・招提平野町一帯に所在する、弥生時代中期から中世にかけての複合遺跡である。

当遺跡が所在する枚方市は、大阪府の北東部に位置し、北から東にかけては京都府八幡市・同京田辺市と、南は大阪府寝屋川市・同交野市・奈良県生駒市と接し、北西部は淀川を界して大阪府高槻市・同島本町と接する。

当遺跡が所在する地域周辺の地形的特徴を巨視的にみると、山地・丘陵・台地・低地の4つに大きく区分される。東から北にかけては生駒山地とそれから派生する男山丘陵があり、南西には生駒山地から北に突出する枚方丘陵が淀川近くまで迫る。主な河川としては、北から船橋川・穂谷川・天野川の3河川があり、いずれも東部の生駒山地にその源を発し、ほぼ北西方向に流れ、淀川に注ぐ。これら山地・丘陵・河川に囲まれた中で、船橋川と穂谷川にはさまれた標高約20から30mを測る交野台地と呼ばれる台地の北西端付近、穂谷川の右岸に当遺跡は位置している。

また、当遺跡周辺の地形については、『古事記』や『日本書紀』に神武天皇東征の記事にも登場する。浪速之渡（難波之崎）から河をさかのぼって河内国の草香邑の白肩之津に上陸し、膽駒山（生駒山）を越え、長髓彦の軍と激戦した記事がある。この場合草香邑を東大阪市の日下に比定されたり、また白肩津を枚方とする説等が戦前に論議された。いずれであっても西の大坂側から生駒山地をこえて大和入りすることの困難であったことは想像にかたくない。

招提中町遺跡一帯は、近世から近代初めにかけては主として、畠地や水田などが広がる景観であったが、昭和に入り、大学の誘致や、京阪電気鉄道株式会社による大規模宅地開発などを経て、現在のような住宅や商店が建ち並ぶ景観となった。

第2節 歴史的環境

招提中町遺跡の周辺には、多くの遺跡が存在している。当遺跡で検出している弥生時代から中世にかけての時期を中心として、当遺跡周辺に所在する各遺跡を記述する（第5図）。

弥生時代 弥生時代になると、交野台地とその周辺部の開発が本格的に始まる。交野台地上での弥生集落の出現は、前期新段階で、後期後半から古墳時代前期初頭になると爆発的に増加する。周辺部の弥生集落は、船橋川以南の穂谷川流域に展開する遺跡群と、天野川流域に展開する遺跡群とに大別され、大多数が中・小河川の沿岸部の台地上や丘陵地形上に立地する。

穂谷川流域に立地する招提中町遺跡では、これまでの調査を総合すると計32基以上の中期前葉の方形周溝墓群が検出された。当遺跡と穂谷川を挟んですぐの距離にある交北城の山遺跡でもほぼ同時期の方形周溝墓が42基、8棟以上の竪穴住居群とともに検出され、両遺跡の方形周溝墓は

総数70基を超えることから、両遺跡とも、中期前葉における当地域の拠点的集落遺跡として位置づけられる。両遺跡の廃絶後、中期後半段階になると、穂谷川を約2km遡った長尾丘陵上に、田口山・長尾谷町遺跡が出現する。このことから、招提中町・交北城の山遺跡の廃絶後、田口山・長尾谷町集落への移住を指摘する見解がある。弥生時代中期の方形周溝墓は、招提中町・交北城の山遺跡などで検出されているが、穂谷川流域に立地する遺跡は第Ⅱ・Ⅲ様式で終焉する。

長尾丘陵上には田口山・長尾谷町集落の成立をきっかけに、後期には出屋敷などの遺跡が急増する。

弥生時代後期末から古墳時代 招提中町遺跡周辺では、弥生時代後期から古墳時代前期初頭の爆発的な遺跡の増加傾向を受け、養父丘遺跡などの集落が営まれる。なお、アゼクラ遺跡でも第Ⅲ様式に成立した集落が一度廃絶した後、この時期に再び営まれるようになる。

弥生時代末から古墳時代前期にかけての穂谷川流域では、首長墓の存在は明らかになっていない。古墳時代中期初頭には、招提中町遺跡と穂谷川を挟んだ南対岸に牧野車塚古墳が築造される。全長約107.5m、東に前方部を向けた前方後円墳で、周囲に空濠・外堤を備える。その周囲にもかつて古墳が存在したことが知られており、中期の古墳群を形成していたものと考えられる。また、同じ中期古墳として、穂谷川右岸に牧野阪古墳などがある。

古墳時代後期になると、牧野車塚古墳のまわりに木棺直葬を主体とする小規模墳が群集（小倉東古墳群）するほか、交野台地北縁部に養父・比丘尼塚（横穴式石室？）・宇山古墳群などが出現する。このうち、宇山1号墳は、直径約13mを測り、横穴式木室と木棺直葬が並列する稀有なもので、横穴式木室からは、各種須恵器のほか、銀象嵌鍔付大刀・鎧など豊富な副葬品が出土した。また、隣接して所在した宇山2号墳は、直径約14mを測り、二体合葬の木棺が検出されたほか、周溝内の不定形土坑から素環鏡板付轡が出土した。

古墳時代の集落としては、前期の遺跡では、九頭神・招提中町・交北城の山・出屋敷・小倉東・渚などの遺跡があり、顕著な増加傾向を示す。中期の遺跡では、小倉東・交北城の山・出屋敷遺跡などがあり、韓式系土器などが出土しているが、その集落数は多くない。交北城の山遺跡は穂谷川べりに営まれた集落で、竪穴住居13棟や自然流路などを検出した。その自然流路から初期須恵器・土師器・韓式系土器などの多量の土器とともに、ナスピ形木製品や臼・杵などの生活用品、掘立柱建物の扉材と考えられる建築部材や柱などの多くの木製品を検出した。また、馬の下頸骨や滑石製双孔円板などの祭祀を想起される遺物も出土した。

後期のものとしては、九頭神遺跡などで掘立柱建物などからなる集落が検出されている。

飛鳥時代から平安時代 律令制下、当遺跡周辺は当初、茨田郡（評）内に編成されていたが、大宝律令施行時には、茨田郡から分割設置された交野郡に属した。

飛鳥時代前半のものとしては、九頭神・招提中町遺跡などで、竪穴住居・掘立柱建物などからなる集落の存在が明らかとなっている。

飛鳥時代後半から平安時代の集落遺跡としては、船橋・九頭神・招提中町・アゼクラ・田口中島・



- 1 楠葉野田西遺跡 2 楠葉野田遺跡 3 楠葉中学校遺跡 4 鏡伝池遺跡 5 楠葉丘東遺跡
 6 楠葉丘東遺跡 7 鶴殿遺跡 8 淀川河床遺跡 9 船橋遺跡 10 楠葉南遺跡 11 墓の谷遺跡 12 養父遺跡 13 宇山遺跡
 14 宇山1・2号墳 15 牧野阪遺跡 16 牧野阪瓦窯 17 牧野阪古墳 18 養父丘遺跡 19 養父古墳 20 比丘尼
 塚古墳 21 招提寺内村遺跡 22 招提北代遺跡 23 招提今池遺跡 24 日置山遺跡 25 招提中町遺跡 26 九頭
 神遺跡 27 交北城の山遺跡 28 田口中島遺跡 29 田口氏墓 30 甲斐田新町遺跡 31 小倉東遺跡 32 牧野車
 塚古墳群 33 牧野車塚古墳 34 小倉遺跡 35 アゼクラ遺跡 36 粟倉瓦窯跡 37 渚東遺跡 38 渚遺跡 39 御
 殿山遺跡 40 禁野本町遺跡 41 中宮・池の宮古墳群 42 出屋敷西遺跡 43 出屋敷遺跡 44 山田池南方窯跡
 45 山田池窯跡 46 山田池北方窯跡 47 田口山遺跡 48 長尾谷町遺跡 49 中宮尼寺田遺跡 50 北山遺跡
 51 長尾西遺跡 52 ごんぼう山遺跡 53 藤阪遺跡 54 藤阪南遺跡

第5図 周辺の遺跡図

甲斐田新町・禁野本町などの遺跡があり、古代寺院には船橋廃寺・九頭神廃寺などがある。船橋・九頭神・招提中町・禁野本町などの遺跡では、大形柱穴からなる掘立柱建物などを確認しており、その多くが古代寺院周辺に存在することから、有力氏族の集落と推測される。九頭神遺跡は、九頭神廃寺の造営・維持氏族の居住域に比定できる可能性が高い。船橋廃寺については、飛鳥時代後期の獣面文軒丸瓦以外で寺院に伴う明確な遺構などは一切不明であり、寺院ではなく瓦窯とする見解もあったが、付近に奈良時代前半の大型掘立柱建物群などが検出され、その存在の可能性が高くなった。

アゼクラ遺跡は、西方に淀川を望む穂谷川左岸の交野台地西端部に立地する遺跡である。これまでの調査で、8世紀代を中心とする飛鳥時代後期から平安時代の遺物が多量に出土したが、当該期の遺構として掘立柱建物がわずかに検出されたにすぎない。現時点では、鎌倉時代の2基のロストル式平窯（栗倉瓦窯跡）が寺院の存在を傍証する唯一の遺構であるが、今後の調査で、寺院と寺院の周辺に広がる造営氏族の居住域が明らかとなる可能性を含む遺跡である。

禁野本町遺跡では、主に奈良時代前期から平安時代前期にかけての掘立柱建物群や井戸などが検出された。掘立柱建物の主軸はほぼ南北で、柱穴は方形を呈するものが多く、庇をもつものや倉庫と考えられる総柱の建物も存在する。近年の発掘調査で、祭祀に関係すると考えられる2重の方形区画遺構や、百済寺の北方に広がる南北・東西道路などの遺構も明らかとなった。

牧野阪瓦窯跡は、九頭神廃寺の北西約600mに所在したと考えられている瓦窯で、平安京西寺に屋瓦を供給したことで知られている。その実態は詳らかでないが、当瓦窯で生産された屋瓦が九頭神廃寺にも供給されていることがすでに判明している。

鎌倉から室町時代 中世に入ると、再び交野台地上に集落が形成され始め、交北城の山・田口中島遺跡などで、堀立柱建物・井戸などからなる集落が出現する。交北城の山遺跡などでは、館を巡る溝などが検出され、日置山遺跡では、南北朝時代から室町時代初頭にかけての大溝などの遺構が検出されている。

近世 大坂・京都間の京街道に、江戸時代枚方宿が設置され、調査により江戸時代の宿場町の様子が復元されつつある。(富田)

第3章 調査の成果

第1節 基本層序

調査地域は、船橋川と穂谷川にはさまれた標高約20mから30mを測る交野台地と呼ばれる台地の北西端付近、穂谷川の右岸に当遺跡は位置している。

調査地域周辺は、調査前には府営住宅として利用されており、標高は、20.2mから20.6mを測る比較的平坦な面を有している。

基本層序については、調査中に作成した土層断面図を参考に精査し、地点ごとの標準的な土層堆積を抽出し、模式図的に図示した（第6図、図版3-2～5）

以下、確認した遺構・遺物に基づく層序を上層から記述する（第6図）。

盛 土 府営住宅築造時の盛土で、調査地区全域に認められる。層厚0.2mから0.6mを測る。

第I層 調査地区全域にわたって認められる最上層土で、本府営住宅建設直前までの耕作土である。地点によって多少は色調が異なるが、青灰白色砂質土を基本とする。部分的に削平を受けているが、層厚は、0.1mから0.2mを測る。

第II層 明黄褐色砂質土を基本とする層で、耕作土の床土である。調査地域により若干の土質、色調の違いが認められる。部分的に複数に分層できる箇所、存在しない箇所も存在する。肩厚は、大半は0.1m前後を測るが、0.2mの地点もある。近世以降の遺物を若干含む。

第III層 灰黄褐色粘質土を基本とする層で、調査地域により若干の土質、色調の変化が認められるものの、中世を中心にそれ以前の遺物を含む。ほぼ調査地域全域に広がるが、一部存在しない地域もある。層厚0.1mから0.2mを測る。

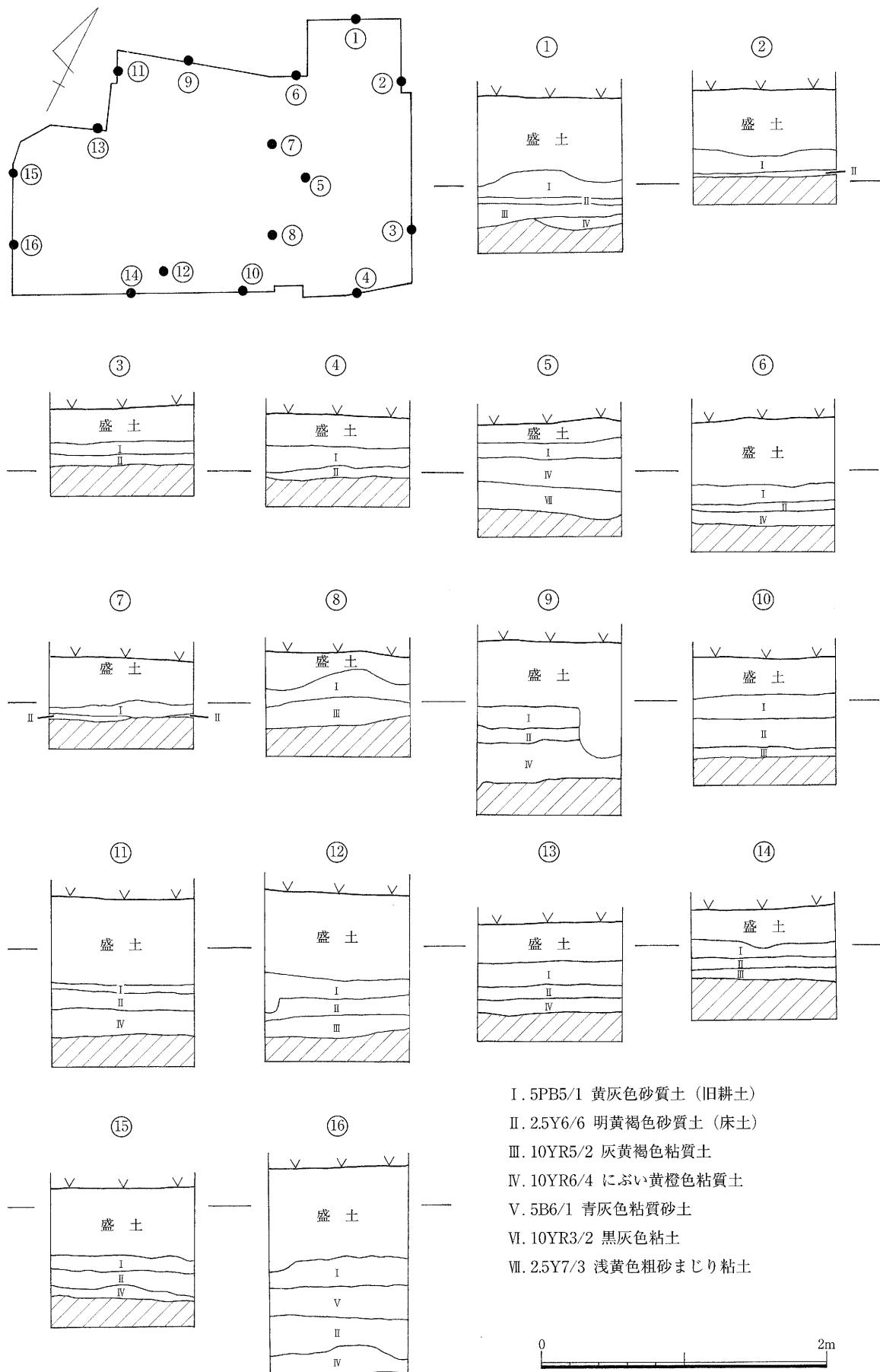
第IV層 にぶい黄褐色粘質土を基本とする層で、ほぼ調査地域全域に広がるが、一部存在しない地域もある。層厚0.1mから0.3mを測る。

第V層 褐色粘質土を基本とする層で、J地区の一部のみで認められる。弥生・古墳時代の遺物を若干含む。層厚0.3m前後を測る。

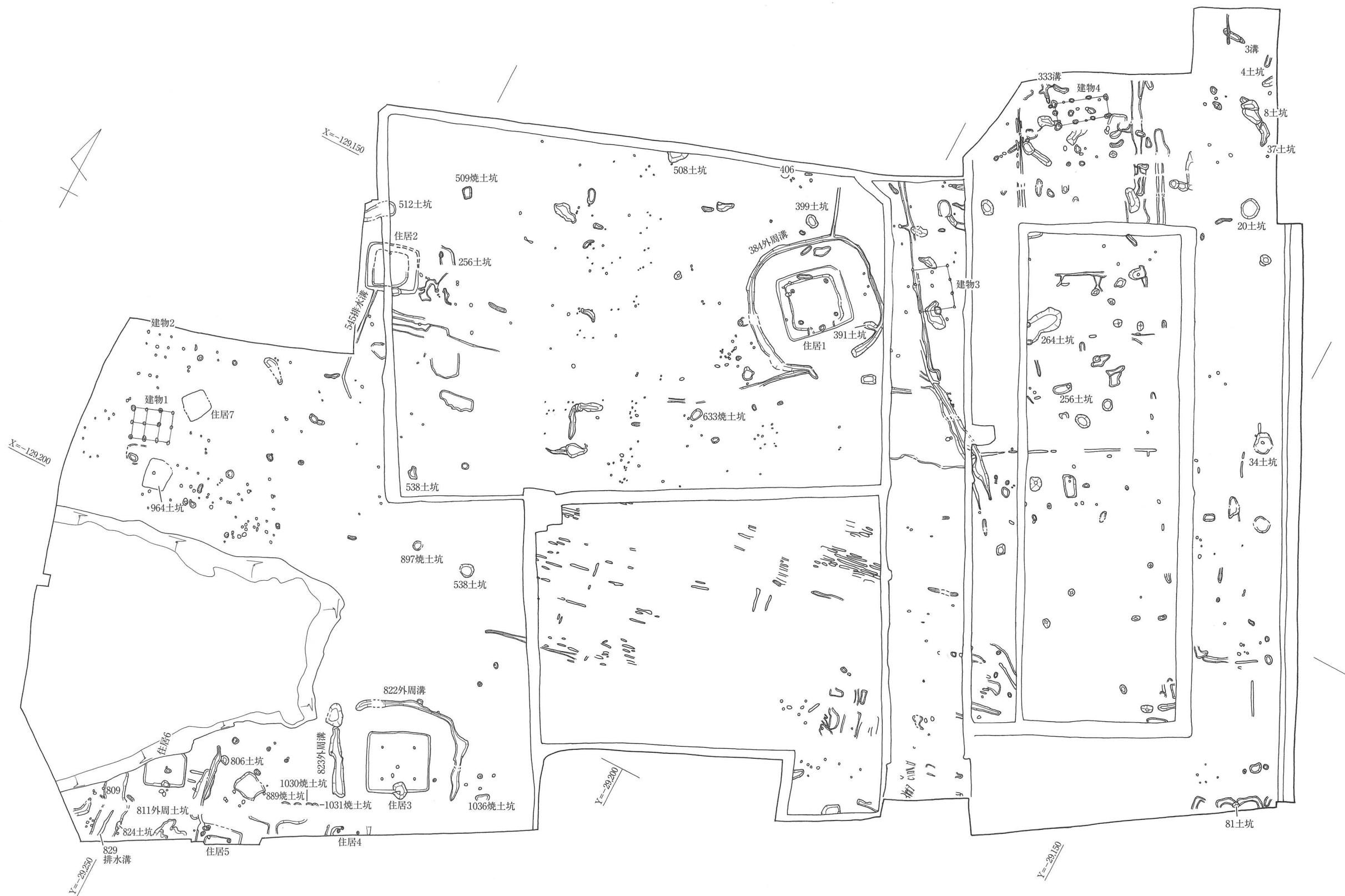
第VI層 浅黄色粗砂まじり粘質土を基本とする層で2区と5区の一部に認められる。層厚0.2m前後を測る。

第VII層 黒褐色粘土を基本とする層で、3区の一部に認められる層で、古墳時代前期の遺物を若干含むことから古墳時代前期の遺物包含層と推定される。層厚は、0.1m前後を測る。

地 山 基本的に第III層ないしはIV層の下層に存在するが、一部にはII層の下が相当層となる。それ以下の層には全く、遺構・遺物を検出しなかったことから本遺跡の地山であると判断した。基本的に地山は、赤褐色ないしは黄褐色を呈する粘質土の堆積層であるが、部分的に砂礫層が顔を覗かせている。



第6図 基本層序柱状図



第7図 遺構全体図（縮尺1:500）

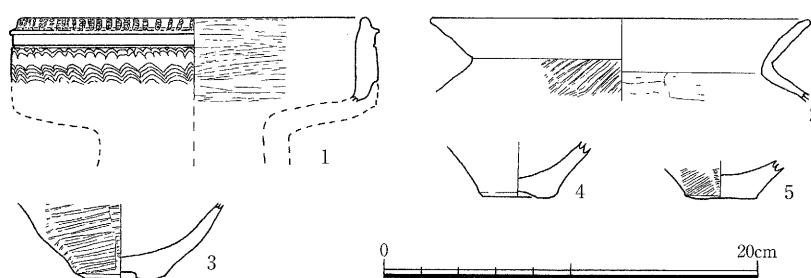
第2節 既往の調査の概要

招提中町遺跡の発掘調査は、1999年度に開始された府営牧野東住宅建て替えに伴う調査以前には、枚方市教育委員会・枚方市文化財調査研究会によって実施されてきた。今回の調査地の南東側約100mに位置する平野小学校建設に伴う調査では、古墳時代前期の竪穴住居跡5棟、奈良時代の墨書土器、線刻土器、平安時代の掘立柱建物、鋳造関連遺構などが検出されている。また、1996年度に実施された調査では、弥生時代の方形周溝墓、土器棺墓、飛鳥時代の竪穴住居跡、奈良時代から平安時代の掘立柱建物などが検出されている。

府営牧野東住宅建て替えに伴う調査は、今回の調査を含め3次にわたって実施し、数々の成果を収めている。検出した遺構の時期は弥生時代前期から始まり、それ以前ではナイフ型石器などの旧石器の遺物が出土している。弥生時代前期の遺構は、土坑が中心で第1次調査区の中央付近に広がる。弥生時代中期前半になると第1次調査区で方形周溝墓30基と竪穴住居跡5棟などが検出されている。弥生時代中期後半から弥生時代後期までは、遺構・遺物が全く検出されておらず、空白期が長く続く。再び生活の痕跡が認められるのは、古墳時代前期からで、第1・2次両調査区から0棟の竪穴住居跡などを検出している。古墳時代中期から後期初頭に再び第2次調査区北東側と南東側で竪穴住居5棟の出現をみる。古墳時代後期後半では竪穴住居跡は検出されなかつた。しかし、第2次調査区内で土坑などが検出されていることから、周辺に集落域が存在していたものと推察される。

飛鳥時代では、竪穴住居跡・掘立柱建物などが検出されている。奈良時代では、掘立柱建物1棟と遺構の数は少ないが、調査地区西側に隣接して存在する九頭神遺跡においては、多くの掘立柱建物が検出されている。平安時代になると遺跡の中心が西の九頭神遺跡から移るものと推定され、遺構の濃淡はあるものの、第1・2次両調査区のほぼ全域に広がり、48棟の建物、焼土坑などが検出されている。中世になると極めて遺構の数が少なくなり、建物4棟、土壙墓、土坑などを検出している。遺構の分布状況から散村の状況を醸し出している。

第3次調査区の遺構の密度は、少なくなる傾向を示す。古墳時代前期の竪穴住居跡7棟・土坑14基、平安時代の建物2棟・焼土坑8基、中世の建物2棟・土坑1基が検出され、時期はおおまかに3時期の遺構に分かれる。



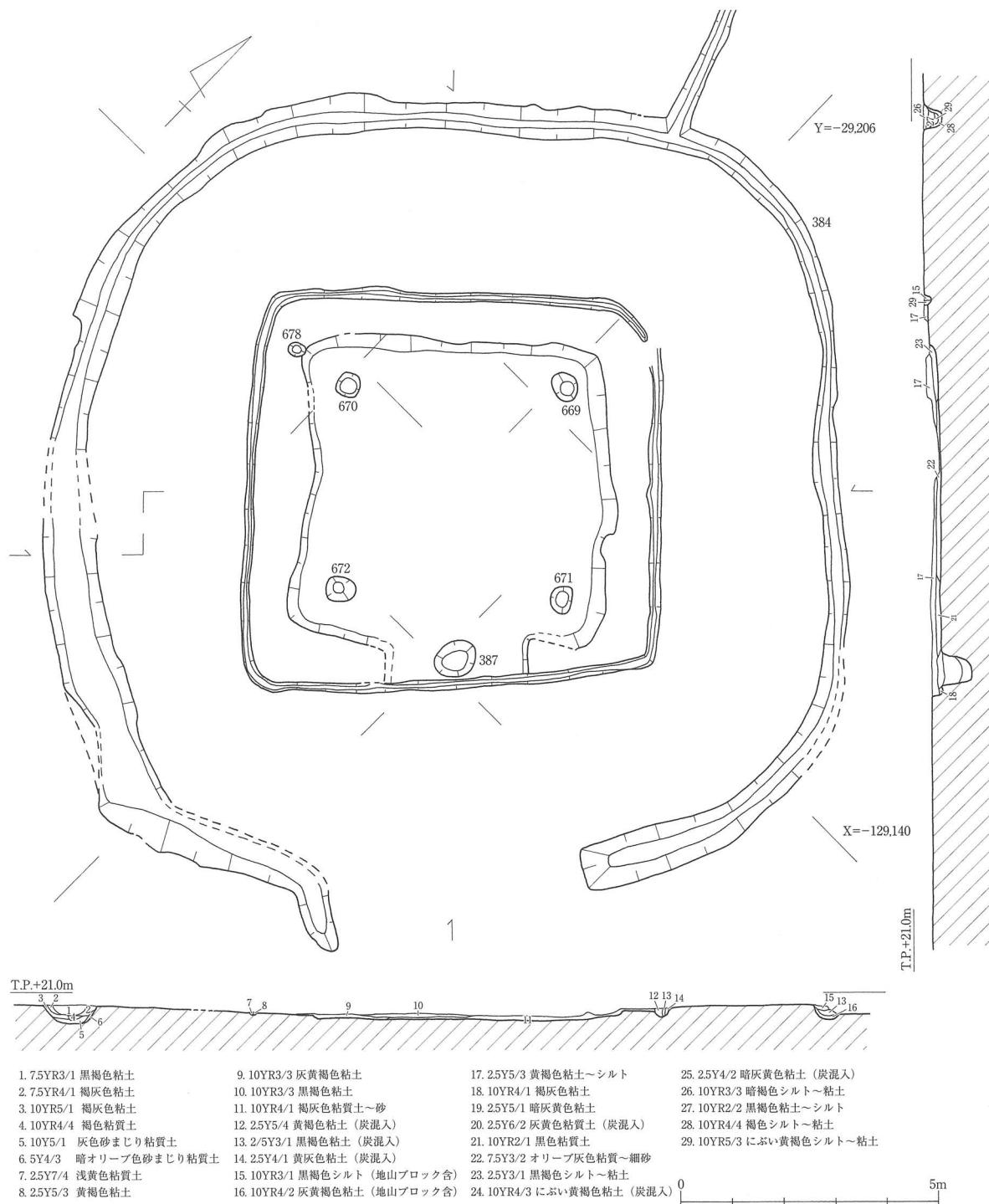
第8図 包含層出土遺物

第3節 古墳時代前期の遺構と遺物

1. 住居跡の調査

住居1（第9・10図、図版2-1）

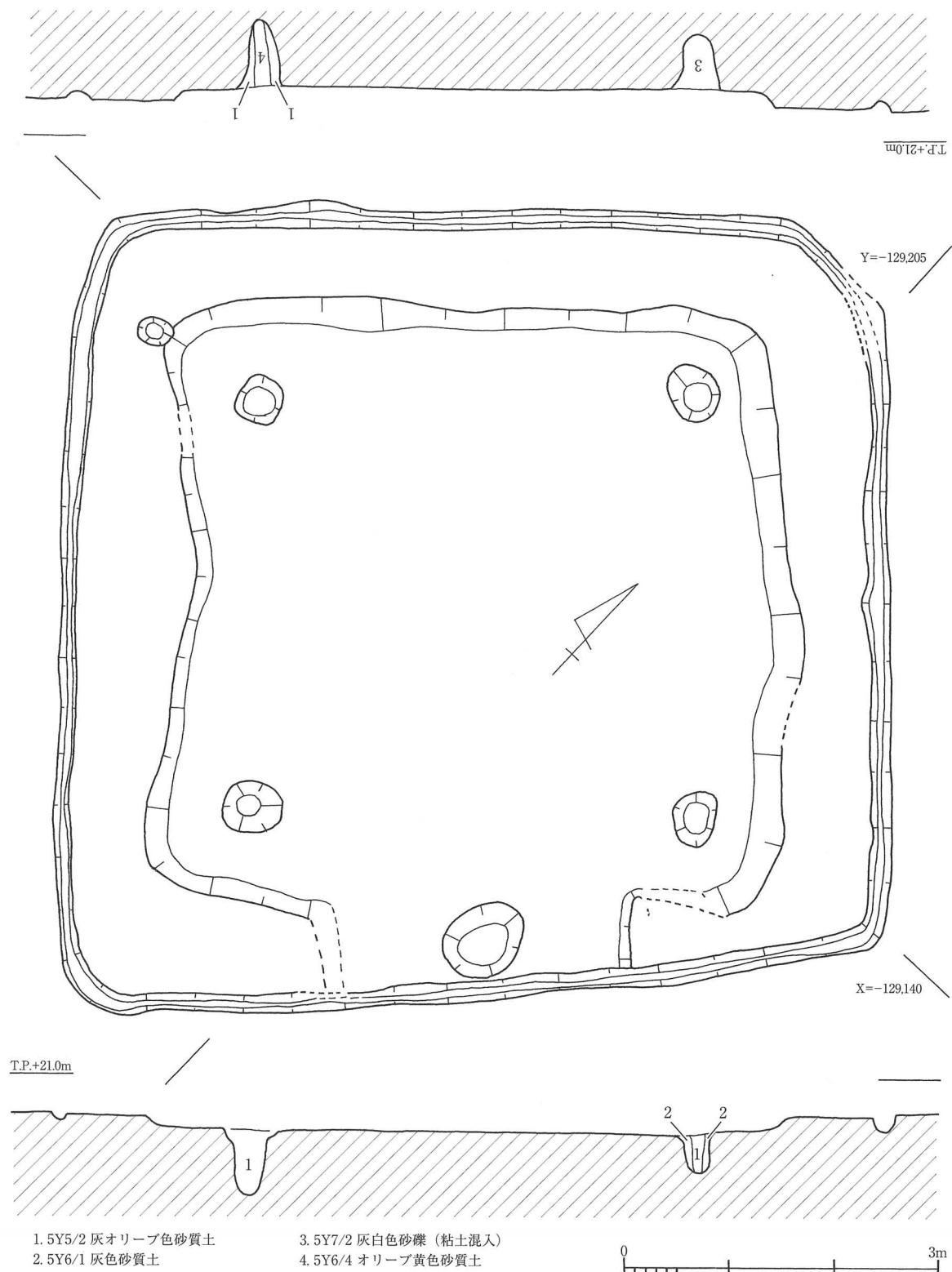
4区東北側、X = -129,140、Y = -29,206付近を中心に検出した大型の竪穴住居跡である。周辺には住居跡が確認されておらず、単独で存在し、一番近い住居2からでも西へ約50m離れている。住居1は、ベッド状遺構を伴う住居跡で、住居域、周堤部、外周溝、外周溝に伴う排水溝などによって構成されており、全体の規模は、東西約16.7m、南北約17.5mを測る。



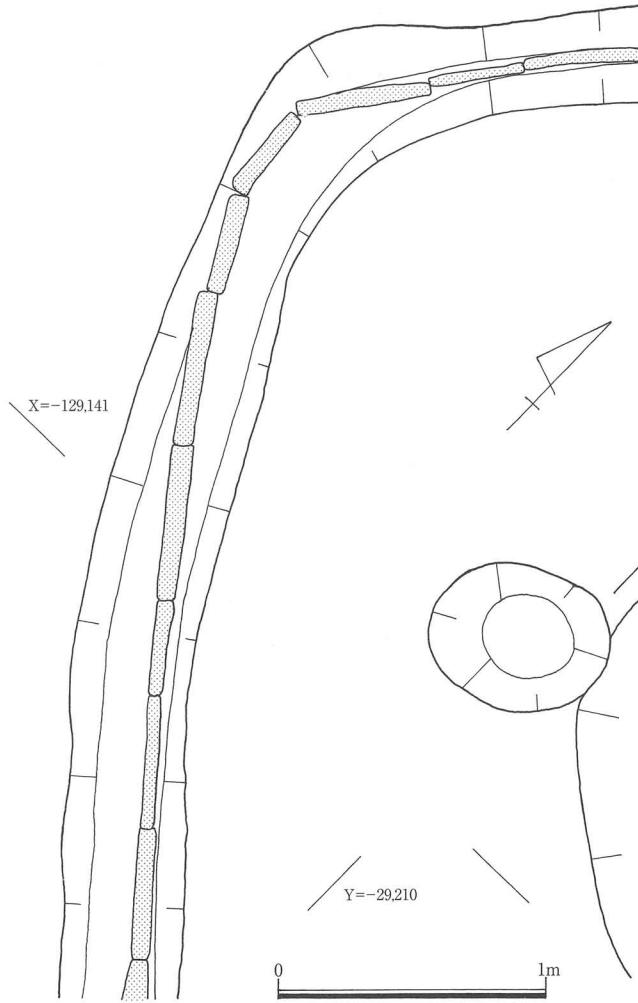
第9図 住居1 平面・断面図

住居域である383住居（図版2-2・3）は、平面形では隅方形に近い形を呈し、壁溝、ベッド状遺構、柱穴4本、土坑1基などによって構成され、規模は東西長約8.0m、南北長約7.6mを測る。

壁溝は、幅0.2m前後、深さ0.16m前後を測り、住居部内側を巡る。壁溝内の埋土上面において、板材の痕跡と推定される土色の変化が平面観察で確認された（第11図、図版2-5、3-1）。



第10図 住居1 383住居平面・断面図



第11図 住居1 383住居壁溝内板材痕跡図

床面上の四隅から、主柱穴を4本検出した。柱穴は、径0.45m前後、深さ0.65m前後を測る。670柱穴と671柱穴からは、径0.15m前後と推定される柱痕が土層断面観察により確認できた。柱穴内からの遺物は、670柱穴（図版3-3・4）より土師器甕体部片が出土したが図化出来なかった。

387壁際土坑（図版2-4）は、住居南辺部中央付近で検出した。平面形では橢円形に近い形を呈し、長径約0.7m、短径約0.55m、深さ約0.6mを測る。住居跡周辺が地下水脈に当たっているものと推定され、土坑からは當時水が湧き出していた。埋土は、基本的に黄灰色砂質土で灰と炭の小片が多量に混入している。

383住居出土遺物 387壁際土坑の周辺に存在する388土器群（第12図、図版3-5・6・7）と、北西角付近（第14図、図版4-1）、北東角にある669柱穴周辺（第15図、図版4-2）のほぼ3ヵ所に集中している。しかし、669柱穴周辺で出土した遺物の種類は土師器壺と推定されるが、体部片であったため図化出来なかった。また、住居埋土中より、土師器甕底部片（第16-16～19図）などが出土している。

387壁際土坑の周辺から出土した遺物（第13図）は、土師器壺1個体、土師器鉢5個体などである。

土師器壺（6、図版15-6）は、口縁部を欠失し、体部のみ残存する。体部の形状は橢円形に

板材の痕跡は、一部不明な箇所が存在するが、壁溝内全域に認められる。板材の痕跡は、幅0.17mから0.27m、厚さ0.03mから0.04mを測る。これらの検出状況から板材は、壁面に沿って垂直に立てられていたものと推察される。

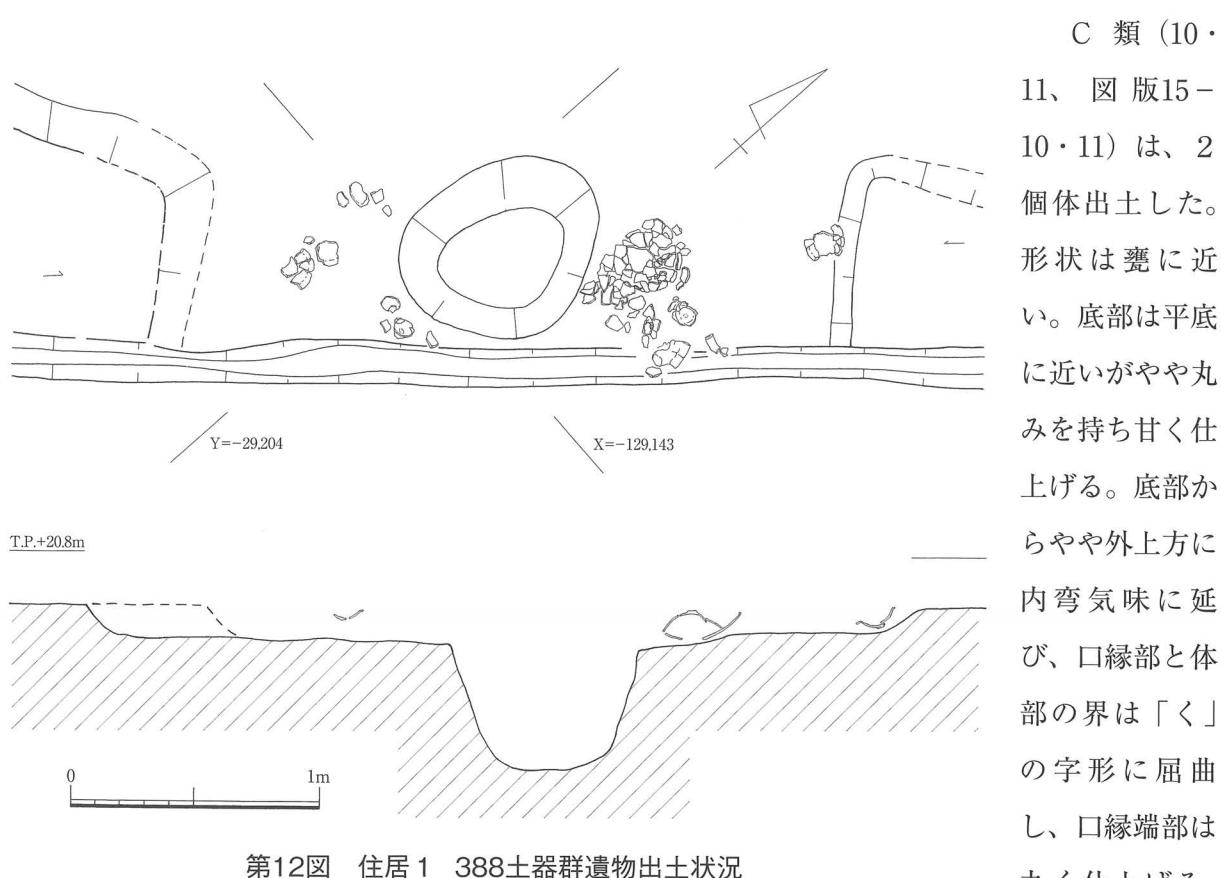
ベッド状遺構（図版3-2）は、住居の内側の東、北、西の3方向と南辺部側の一部を巡る。南辺側の一部は、床面にまで達する近世時の削平を受けているため不明な点もあるが、東隅から約2.3m、西隅から約2.5mまではベッド状遺構が認められる。しかし南辺中央部付近の幅約2.75m間は存在しない。ベッド状遺構の計測値は、床面からの高さ約0.1m前後、幅は東側が約0.7m、西側が0.7mから1.1m、北側が約0.8m、南側の東が約0.7m、南側の西が0.8mを測り、地山の削り出しによって高く仕上げている。

住居の床面は、平面形では隅丸方形に近く、東西長約5.25m、南北長約5.5mを測る。住居

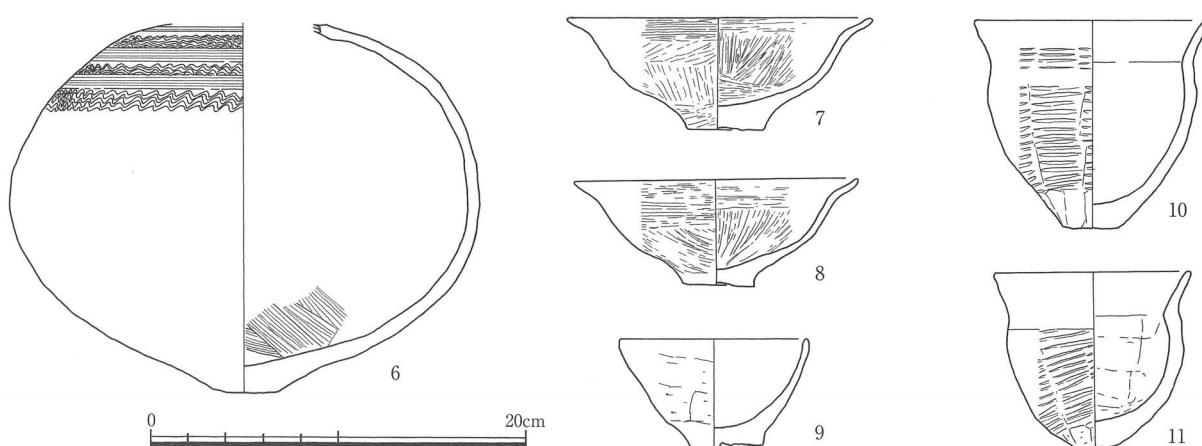
近い。底部は平底に近いがやや丸みを持ち甘く仕上げる。体部上部を3本の沈線で区切り内部に山型に近い波状文を施す。内外面のほとんどが摩滅しているため調整が不明であるが、内面底部付近にハケ目が認められる。

土師器鉢（7～11）は、出土した5個体の内、3種に分類される。A類（7・8、図版15-7・8）は2個体出土した。底部は平底に近く、そこから内弯しながら外上方に延び、口縁部付近でさらに外側に延び、端部は丸く仕上げる。調整は内外面のほとんどをヘラミガキによって仕上げる。

B類（9、図版15-9）は、底部は平底に近く、そこから内弯気味にやや外上方に延び、口縁端部に至る。体部外面のほとんどを横方向のヘラケズリ、体底部外面をナデによって仕上げる。内面はヨコナデ。



第12図 住居1 388土器群遺物出土状況



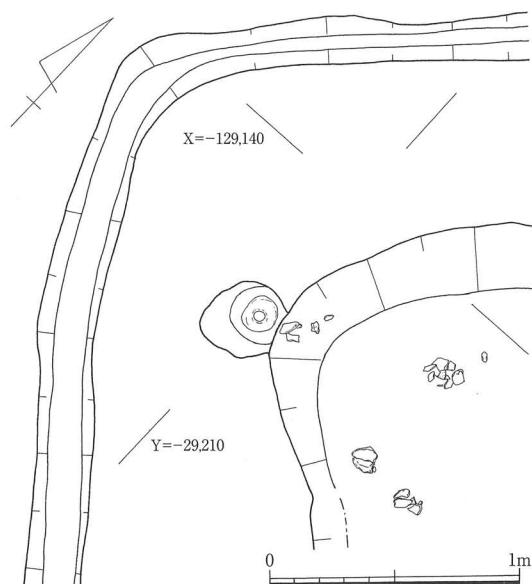
第13図 住居1 388土器群出土遺物

口縁部径と体部最大径の差は口縁部が長い。体底部付近の外面は、ナデないしはヘラ削りによって仕上げ、体部外面はタタキ、口縁部内・外面はヨコナデ、体部内面はナデによって仕上げている。

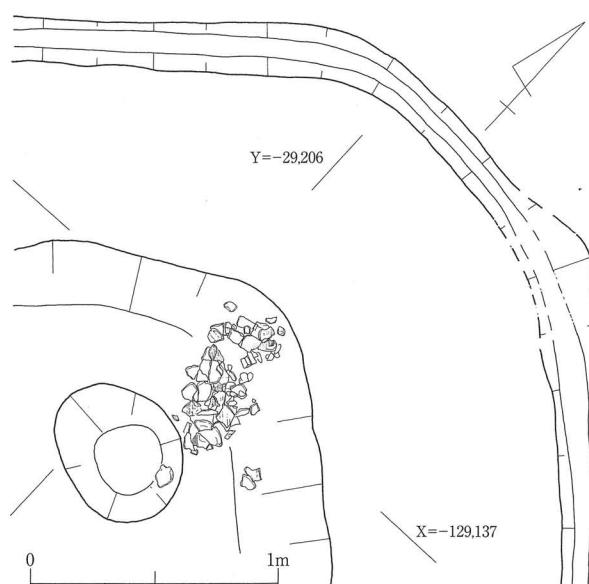
土師器甕（12）は、口縁端部は角張り、口縁部から体部上部にかけて「く」の字形に屈曲する。体部は、比較的丸味を持ち、内弯しながら底部に至る。底部は平底である。体部外面の調整は、体底部から最大径付近まで斜め方向のタタキ。最大径から口縁部の界付近まで横方向のタタキによって仕上げる。口縁部内外面、体部内面はヨコナデによって仕上げる。

土師器高坏（13）は脚裾部付近を欠失している。口縁部の形状は椀形に近く、端部は角張り凹線が巡る。脚部は、脚柱部は短く、脚柱部端から裾部にむかって外側に大きく開く。調整は場所によって方向が異なるが、ヘラミガキによって仕上げる。

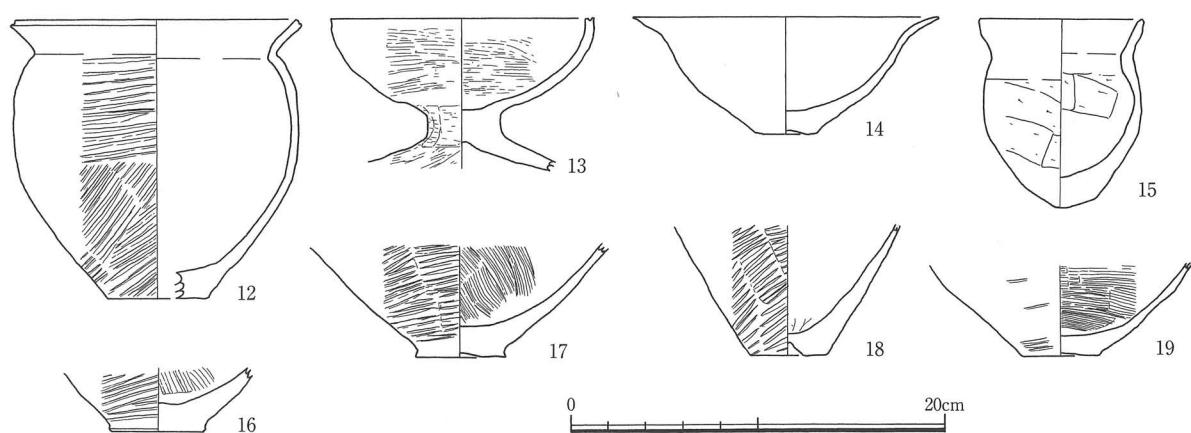
土師器鉢は、2個体出土した。14は、A類で、底部は平底に近く、そこから内弯しながら外上方に延び、口縁部付近でさらに外側に延び、端部は丸く仕上げる。調整は内外面のほとんどをヘラミガキによって仕上げているものと推定されるが、表面剥離のため不明である。15は、C



第14図 住居1 383住居北西側遺物出土状況



第15図 住居1 383住居北西側遺物出土状況



第16図 住居1 383住居内出土遺物

類で形状は甕に近い。底部は平底に近いが、やや丸みを持ち甘く仕上げる。底部からやや外上方に内弯気味に延び、口縁部と体上部の界は「く」の字形に屈曲し、口縁端部は丸く仕上げる。口縁部径と体部最大径の差は、口縁部がやや大きい。体部の外面は、ヘラ削りによって仕上げる。口縁部内・外面共にヨコナデ、体部内面はナデによって仕上げている。

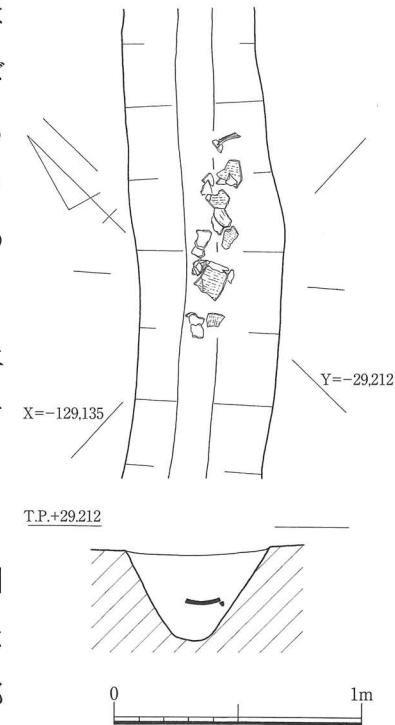
384外周溝（第9図、図版4-4）は、周堤部の外側を巡り、平面形では隅丸方形に近い形を呈する。溝は、幅1.0m前後、深さ0.35m前後を測り、断面は「V」字形ないしは「U」字形に近い。溝の南側は、住居のほぼ中央付近で長さ約4.85mにわたって溝が存在せず、途切れている。溝南辺の西端は外側に長さ約1.2m屈曲し、X = -129,140、Y = -29,148付近で収束している。これらの平面形の形状から住居の入口と推測される。

384外周溝出土遺物 溝内からは、北角付近の溝内中層より土師器甕片（第18-20図、図版4-3・16-20）が出土した。それ以外に土師器甕片（第18-21～27図）、土師器壺片（第18-28図）、土師器鉢片（第18-29図）などが出土している。

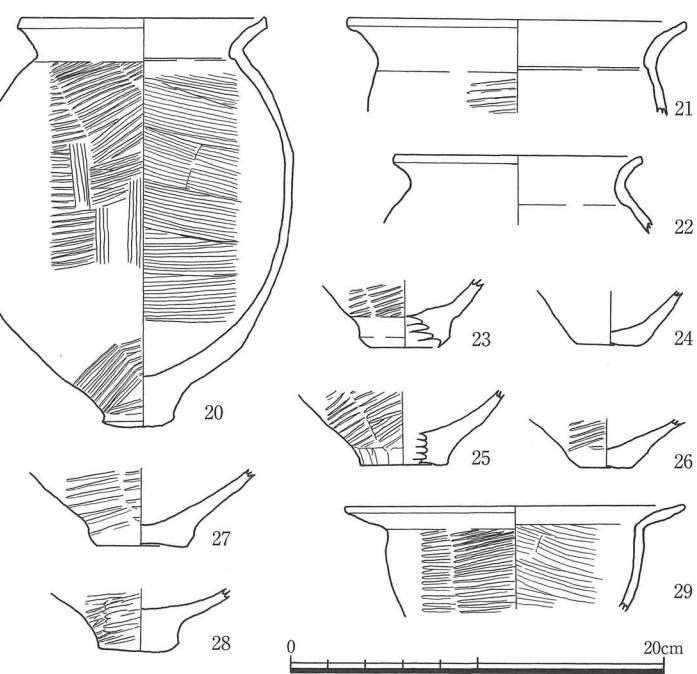
20の土師器甕は、口縁端部は角張り、口縁部と体部の界は「く」の字形に屈曲する。体部は橢円形に近く、底部は長い。底部底は丸みを持ち、甘く仕上げる。調整は、底部下部付近はナデ、底部上部から体部上部と口縁部の界までタタキによって仕上げる。しかし一部に縦方向のハケ目が認められる。口縁部内外面ともヨコナデ、体部内面のほとんどをハケ目調整によって仕上げている。

周堤部は、住居域と外周溝で囲まれており、周堤部の幅は東側が約2.95m、西側が約2.8m、北側が約3.1mを測る。周堤部の用途としては、壁溝に存在する板状の痕跡、住居の外周溝、八尾南遺跡（2008 財団法人 大阪府文化財センター）で検出された住居跡の形状などから、住居の壁を作るためにうず高く土砂を積んだ場所であったものと推測される。

386排水溝（図版4-5）は、384外周溝の北東角 X = -129,140、



第17図 住居1 384外周溝
遺物出土状況



第18図 住居1 384外周溝出土遺物

$Y = -29,206$ 付近から、北の調査区外へと延びる。溝の断面は「V」字形に近く、幅0.3m前後、深さ0.2m前後を測る。検出状況から外周溝に伴う排水溝と推定される。この先に住居跡が存在する可能性があるが、北の調査区外に延びているため不明である。遺物は、溝の南側から土師器甕の体部片が出土したが、図化出来なかった。

住居2（第19図、図版4-6）

4区西端中央、 $X = -129,160$ 、 $Y = -29,252$ 付近で検出した住居である。住居2の西側は、調査区外にあり、住居北東角と住居中央より北側周辺は、削平を受け欠失している。住居2は、住居域、周堤部と推定される空閑地、外周土坑、住居壁溝から延びる排水溝などによって構成されている。外周土坑を含めた住居全体の規模は、東西11m以上、南北約12m以上を測る。

住居域である542住居（図版4-6）は、平面形では隅方形に近い形を呈し、壁溝、ベッド状遺構、壁際土坑などにより構成されており、規模は、東西長約6.5m、南北長約5.7mを測る。

壁溝は、幅0.2m前後、深さ0.2m前後を測り、住居部内側を巡る。

ベッド状遺構（図版3-2）は、地山の削り出しによって高く仕上げており、住居の内側の東、北、西の3方向と南部側の一部を巡る。南辺側の一部が、床面にまで達する近世時の削平を受けているため不明な点もあるが、南辺中央部付近の幅約2.75m間は存在しない。計測値は、床面からの高さ約0.1m前後、幅は東側が約1.1m、西側が0.8m、北側が約0.8m、南側の東が約0.1mから0.2mを測る。

住居床面は、床面の約半分が近代に削平を受けており不明な点が多いが、東西長約5.25m、南北長約5.5mを測る。主柱穴は検出に努めたが、住居床面には主柱穴は検出できなかった。

住居部南東辺中央付近において、南東辺を切るような状況で518壁際土坑を検出した。西側の約半分を欠失している。平面形では橢円形に近い形を呈するものと推定され、長径約2.2m以上、短径約1.1m、深さ約0.4mを測る。

住居南角付近の壁溝より545排水溝（第22図、図版4-9）が、住居2からほぼ南方向へと延びる。溝は徐々に浅くなり、 $X = -129,180$ 、 $Y = -29,249$ 付近で収束する。幅0.3m前後、深さ0.3m前後を測る。溝の断面の形状は「U」字形に近い。住居南端から長さ1.0m前後は、上層の埋土が地山と同色、同系統であったことから上面からでの検出、掘削が困難を極めた。

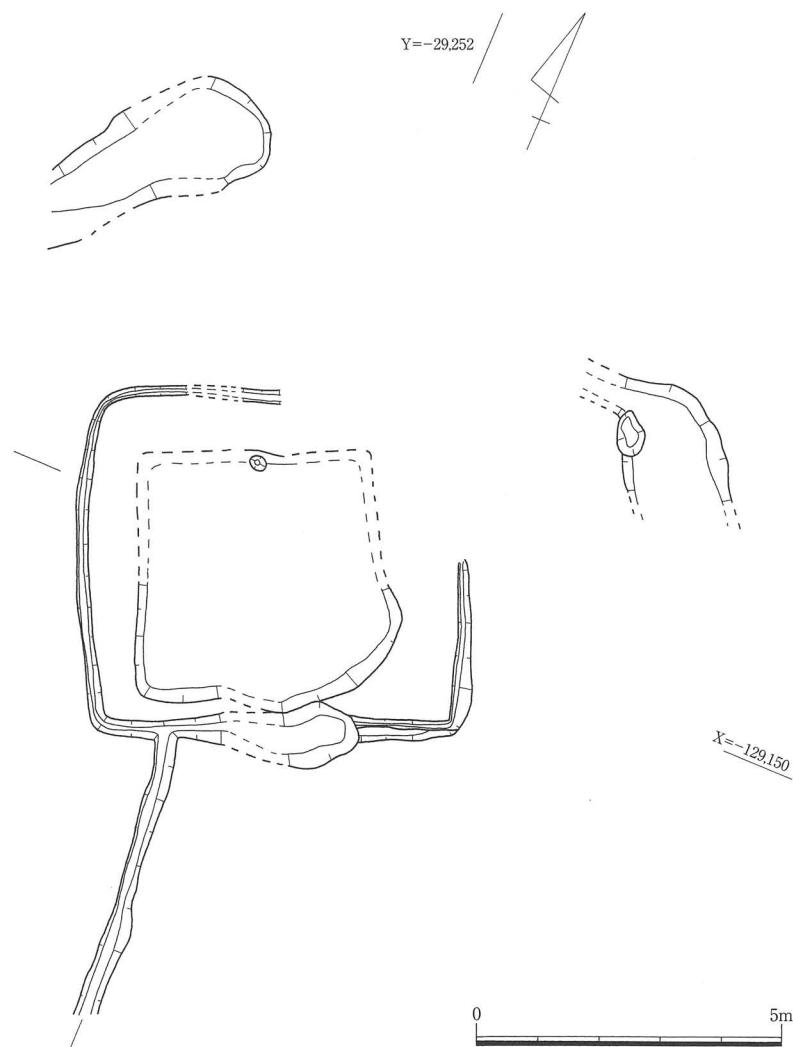
溝の用途としては、溝底の高さが壁溝を起点とし、そこから徐々に下っていることから、住居の排水溝として機能していたものと推定される。溝埋土中下層より、土師器甕、土師器高杯などの遺物が出土している（第22図）。土師器甕（第20-30図）は、口縁部および底部のみ残存し、体部は欠損している。口縁端部は丸く、口縁部から体部上部にかけて、「く」の字形に屈曲する。底部は、平底に近く、底部下から体部にかけて外側に開き気味に延びる。調整は表面摩滅のため不明である。

土師器高杯（第20-31図、図版16-31）は脚裾部付近を欠失している。口縁部の形状は椀形に近く、端部は丸味をおびる。脚部は、脚柱部は長く、杯部との界からやや開き気味に延び、脚柱

部端から裾部にむかって外側に大きく開く。調整は表面剥離のため不明箇所が多いが、ほとんどがヘラミガキによって仕上げているものと推定される。

位置関係から住居2の外周土坑と考えられる落ち込みが、住居の北西側約7.0mと東北側約7.0m付近に存在する。住居の南側は、検出に努めたが外周土坑・外周溝は存在しなかった。

512外周土坑（第24図、図版11-12）は、住居2の北西側 $X = -129,155$ 、 $Y = -29,256$ 付近を中心とする。土坑の西側は、西の調査区外へと延びる。長さ約3.8m以上、幅約1.55m、深さ約



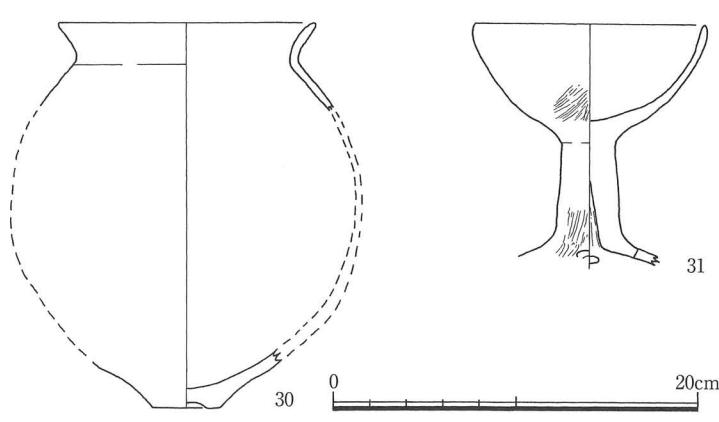
第19図 住居2 平面図

0.25mを測る、土坑内部から土師器甕片などが出土しているが、図化出来るものはなかった。512外周土坑は、現在の所、外周土坑としたが、溝状に西の調査区外へと延びることから、外周溝の一部である可能性も捨てきれない。

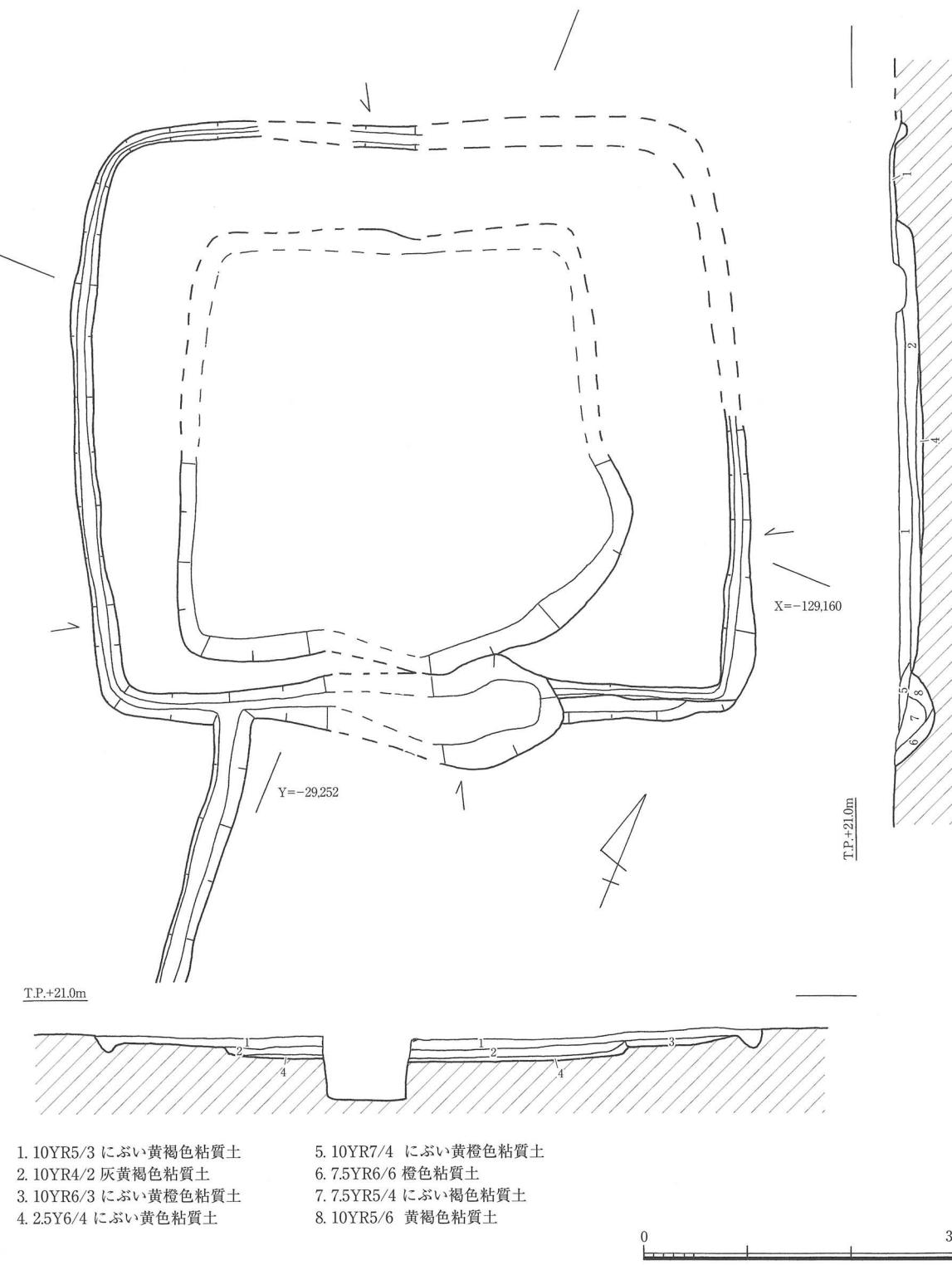
516外周土坑は、住居2の東側 $X = -129,156$ 、 $Y = -29,247$ 付近に存在する。溝の両端が近代の削平により欠失している。長さ約2.0m以上、幅約1.7m、深さ約0.15mを測る、土坑内部から土師器甕片などが出土しているが、図化出来るものはなかった。

周堤部は、住居の西側が調査区外、住居の北側から東側にかけて削平を受けていることから、不明な点が多いが、検出した住居端、外周土坑の幅などから幅3.0m前後と推定される。

検出当初、住居床面の埋土の色調が褐色を呈し、ベッド状遺構上面の埋土と壁溝の埋土が、地山とほぼ同色・同系統であったことと、住居が削平を受けて



第20図 住居2 545排水溝出土遺物



第21図 住居2 542住居平面・断面図

いる箇所が多かったため、遺構検出作業および掘削作業は困難を極めた。ベッド状遺構上面の埋土と壁溝の埋土（図版4-8）が、地山とほぼ同色・同系統を呈していた理由としては次のように考えている。周堤部に積まれていた土砂が崩れ、それが住居内部のベッド状遺構周辺にまで流入したためと推測している。また、柱穴が検出されなかったことについては、周堤部に土砂をうず高く積むことによって、壁と柱の役割を果たしていた、いわゆる「壁建ち住居」であった可能性を考えている。

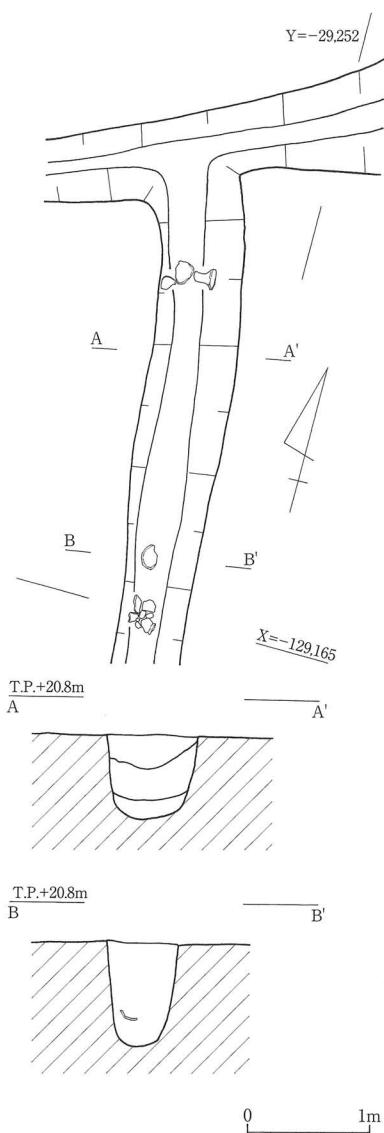
住居3（第25図、図版5-1）

6区南東部、X=-129,212、Y=-29,224付近を中心に検出した大型の竪穴住居跡である。住居南側は、住宅造成時の水道管、ガス管などによって削平を受けていたため、不明な点が多い。住居は、住居域、周堤帯、外周溝によって構成されており、全体の規模は、東西約16.7m、南北11.7mを測る。

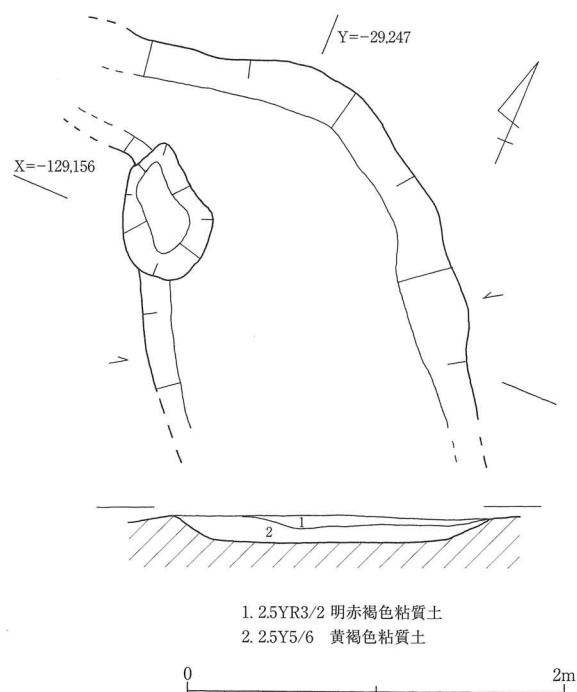
住居域である820住居（図版5-2）は、平面形で隅丸方形に近い形を呈し、壁溝、柱穴4本、中央土坑1基、壁際土坑1基などによって構成され、規模は東西長約8.2m、南北長約7.2mを測る。壁溝（図版5-3・4）は、幅0.2m前後、深さ0.2m前後を測り、住居の周囲を巡る溝の断面の形状は、「U」字形に近く、平面・断面観察の結果では、板材の痕跡などは認められなかった。

住居床面四隅の中央寄りの付近において、主柱穴（図版6-1・2・3・4）4本を検出した。平面形では円形に近い形を呈し、それぞれ径0.3m前後、深さ0.55m前後を測る。その内、836柱穴と837柱穴からは、土層断面観察の結果、径0.15m前後と推定される柱痕が確認できた。

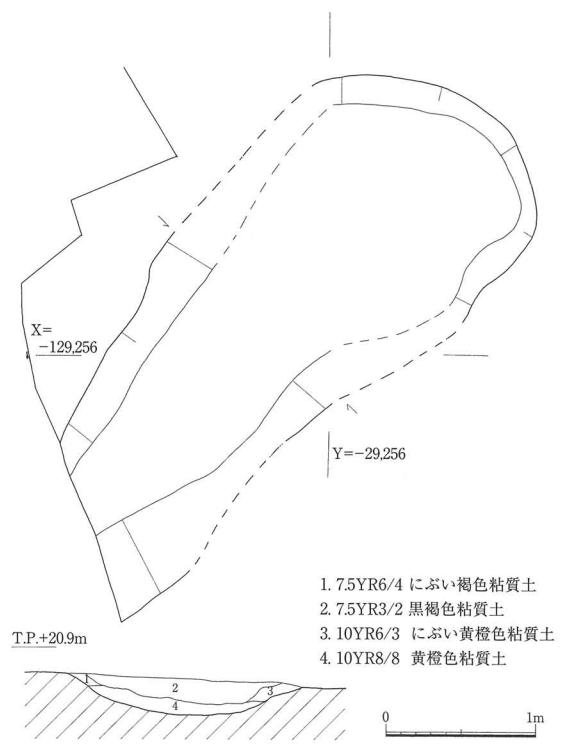
838中央土坑（第27図、図版6-5・6）は、



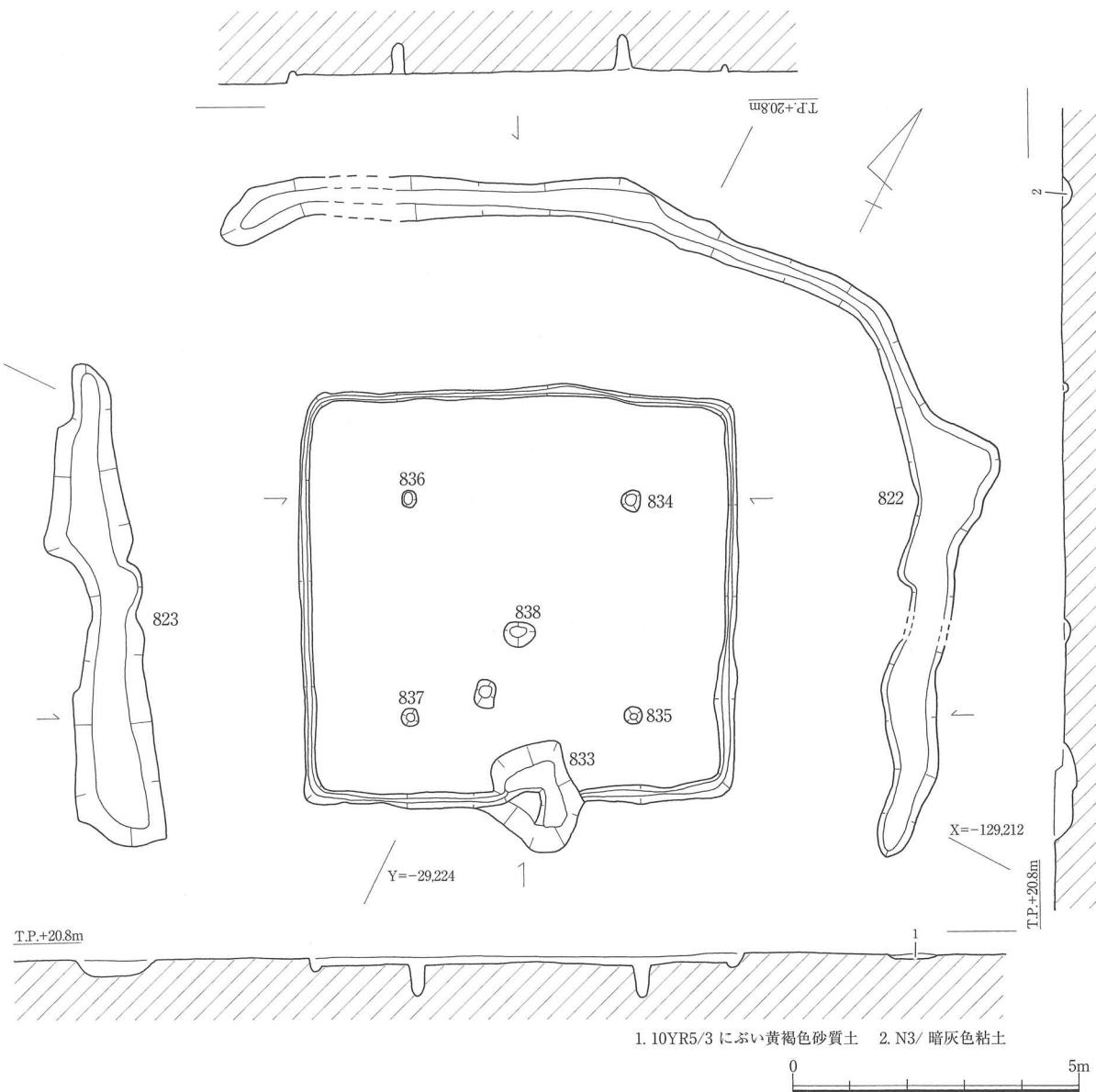
第22図 住居2 545排水溝遺物出土状況



第23図 住居2 516外周土坑平面・断面図



第24図 住居2 512外周土坑平面・断面図



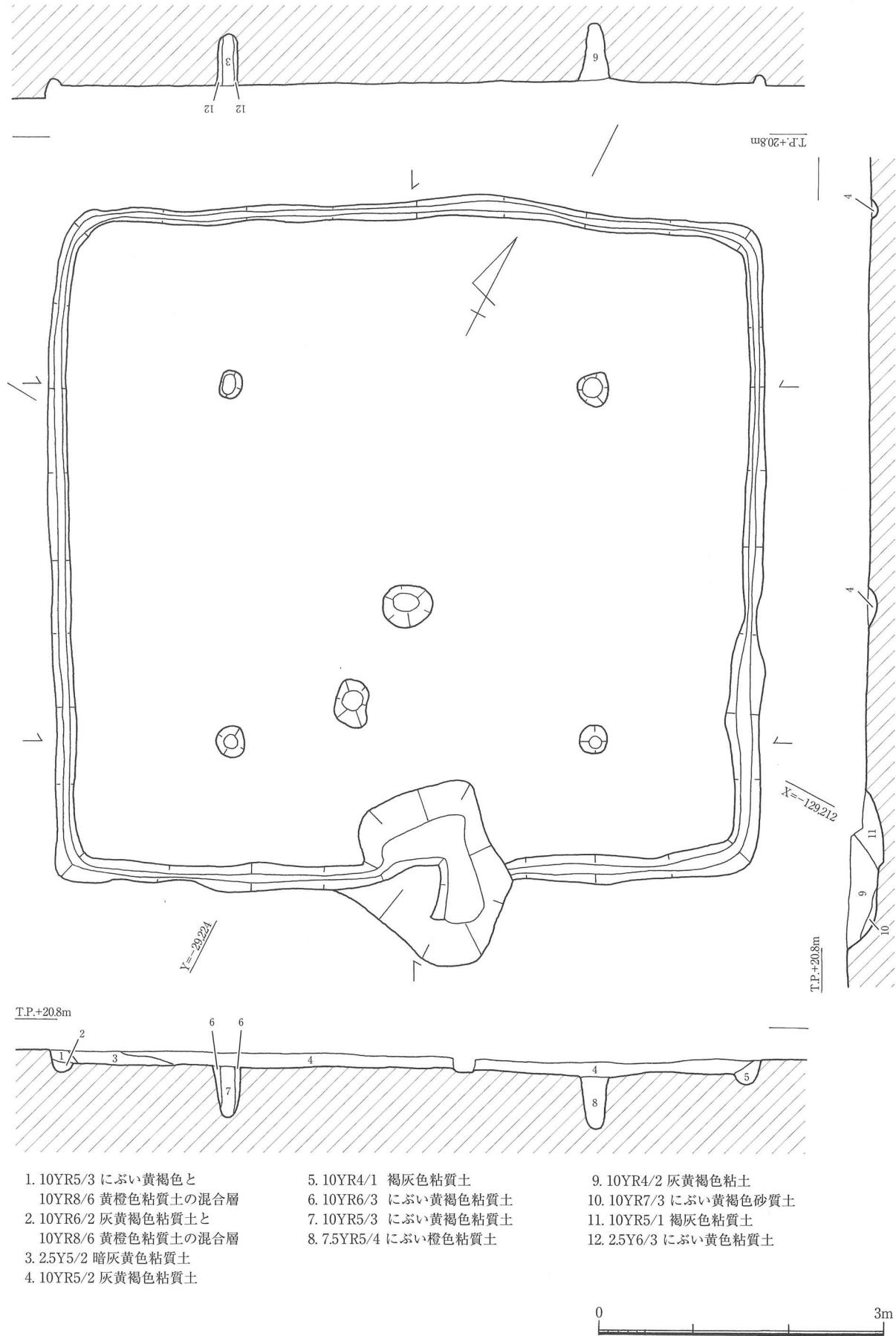
第25図 住居3 平面・断面図

住居中央よりやや南側、 $X = -129,212$ 、 $Y = -29,224$ 付近に存在する。平面形では橢円形に近い形を呈し、長径約0.55m、短径約0.45mを測り、深さは約0.1mと浅い。

遺物は、土坑上部から土師器甕片が出土した。土師器甕（第28-32図、図版19-32）は、体部最大径より下が欠失している。口縁端部は丸みを持ち、口縁端部から体部上面にかけて「く」の字形に屈曲する。口縁径と体部最大径との比率はほぼ同じである。体部外面は横方向のタタキ、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部内面は摩滅のため不明である。

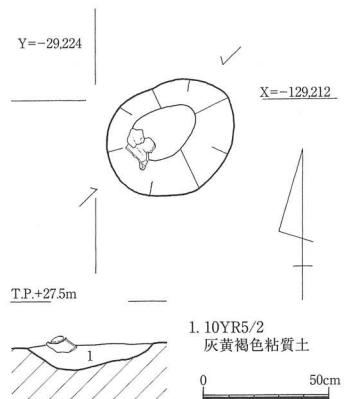
833壁際土坑（図版5-5）は、住居域南東辺中央、 $X = -129,222$ 、 $Y = -29,214$ 付近に存在する。820住居の南東辺および壁溝を切るような状況で検出され、平面形では五角形に近い形を呈する。長軸約1.95m、短軸約1.55m、最深部は約0.35mを測る。土坑底部には一部壁溝の痕跡が残る。遺物は出土しなかった。

820住居出土遺物 820住居床面付近の南東側、南西側、西北側から出土した。

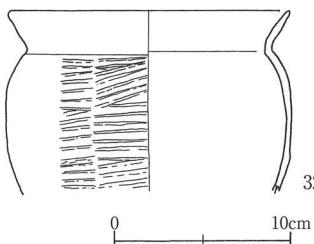


第26図 住居3 820平面・断面図

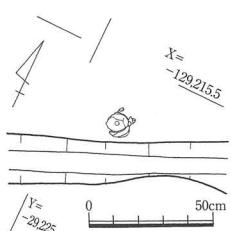
南東側のX=-129,213、Y=-29,218付近（第30図、図版6-8）で出土した土師器甕片（第32



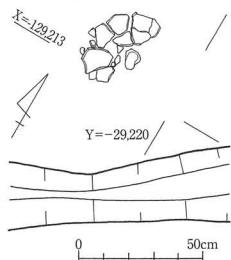
第27図 住居3 820住居
838中央土坑遺物出土状況



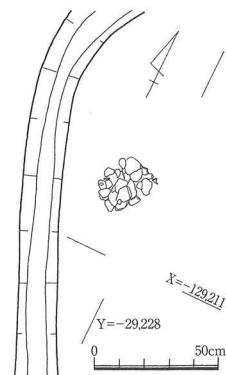
第28図 住居3 820住居
838中央土坑出土遺物



第29図 住居3
820住居南西側
遺物出土状況



第30図 住居3
820住居南東側
遺物出土状況



第31図 住居3
820住居北西側
遺物出土状況

- 33図、図版19-33) は、体底部付近から底部にかけて残存している。底部は平らに近く、外側に開きながら、やや内弯気味に延びる。調整は、底部付近が斜め方向のタタキ、そこから上部を横方向のタタキを施し、その後部分的にナデによってタタキを消している。内面はナデによって仕上げている。

南西側の X = -129,213.8、Y = -29,224.5付近 (第30図、図版6-7)

で出土した土師器鉢 (第32-34図、図版16-34) は、口縁部は短くやや開き気味に延びる。端部はやや尖る。体部最大径は、口縁径よりやや大きい。底部は平底に近いがやや甘い。外面の調整は、体部最大径から底部にかけて斜め方向のタタキ。口縁部の界から体部最大径までは、タタキの後ナデで消している。口縁内外面、体部内面ともヨコナデ。

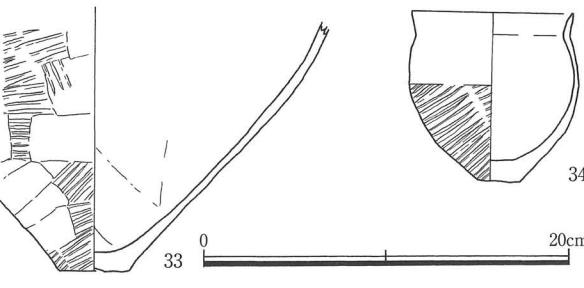
西北側の X = -129,211、Y = -29,228付近 (第31図、図版6-9) で出土した土師器甕片は体部片のため図化出来なかった。

住居3に伴う外周溝は、822・823溝の2本からなる。822外周溝と823外周溝とは北西側で幅約3.1m離れて存在し、平面形では、「コ」の字形に近い。また、住居域の南側は、水道管、ガス管などによって削平を受けており不明な点が多い。

しかし、両溝とも削平を受けているものの、南側で収束していることから、南辺側には溝が存在しない可能性が高い。

822外周溝 (第25図、図版6-11・12) は、住居3の北西側 X = -129,208、Y = -29,231付近から東に延び、X = -129,209、Y = -29,221付近で逆「L」字状に南側へ向きを変え、X = -129,212.5、Y = -29,216付近で収束する。溝は、幅約0.4mから1.0m、深さ0.1m前後を測る。断面形状は浅皿状に近い。

住居の東辺中央に近い X = -129,207.3、Y = -29,218付近の溝底より、土師

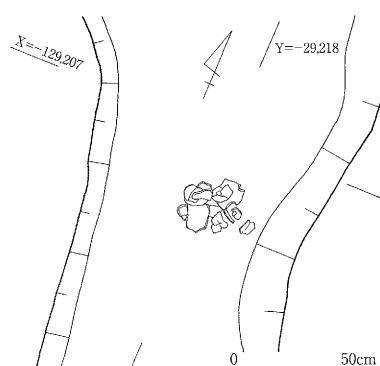


第32図 住居3 住居内出土遺物

器甕 (第33図、図版6-10) が出土している。土師器甕 (第34-35) は、体部最大径付近から底部にか

けて欠損している。口縁端部はやや角張っており、外反気味に体部上部に至っている。口縁径と体部最大径とはほぼ同じ長さである。調整は、内外面とも摩滅が進んでいることから不明である。

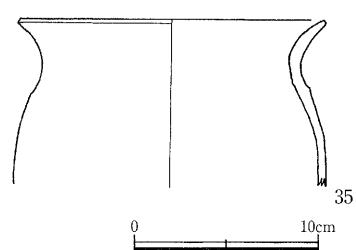
823外周溝（第36図、図版7-3）は、住居3の西南側のX=-129,218.5、Y=-29,228付近から北西のX=-129,211.5、Y=-29,233付近まで、ほぼ直線的に延びる。北側は検出面が削平を受けているものと推定され、溝が徐々に浅くなる傾向を示している。南東端付近は近代の削平により、検出面上面が欠失している。溝は、全長約8.5m、残存状況が比較的良好な中央付近で、幅約1.4m、深さ約0.3mを測る。断面の形状は、浅鉢状に近い。



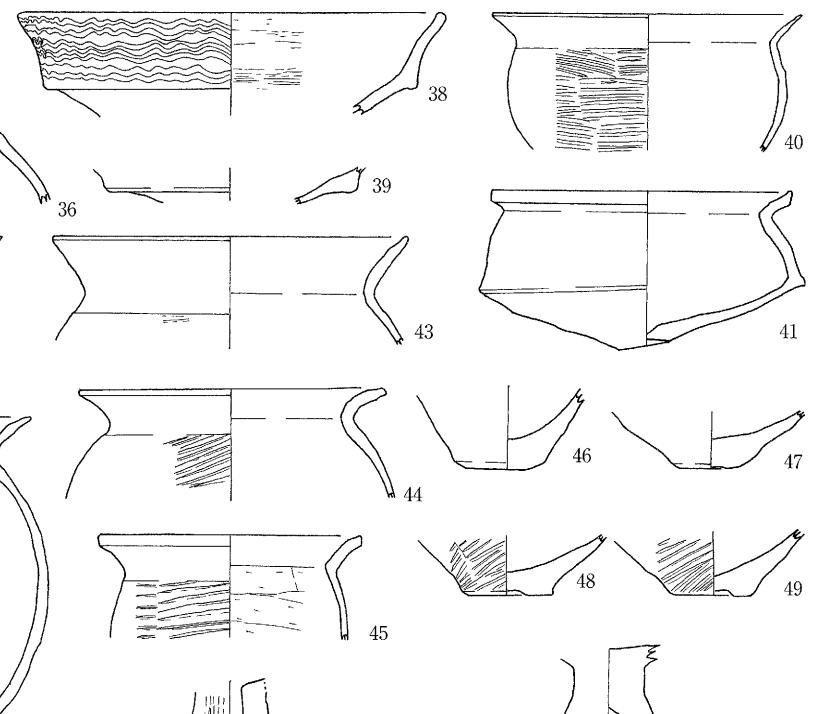
第33図 住居3 822外周溝遺物出土状況

823外周溝出土遺物 溝の中央から南側の中層付近から遺物（図版9-1・2）がまとまった状態で出土した。出土した遺物（第35図）は、土師器壺、土師器甕、土師器高坏、土師器鉢・手焙形土器などである。

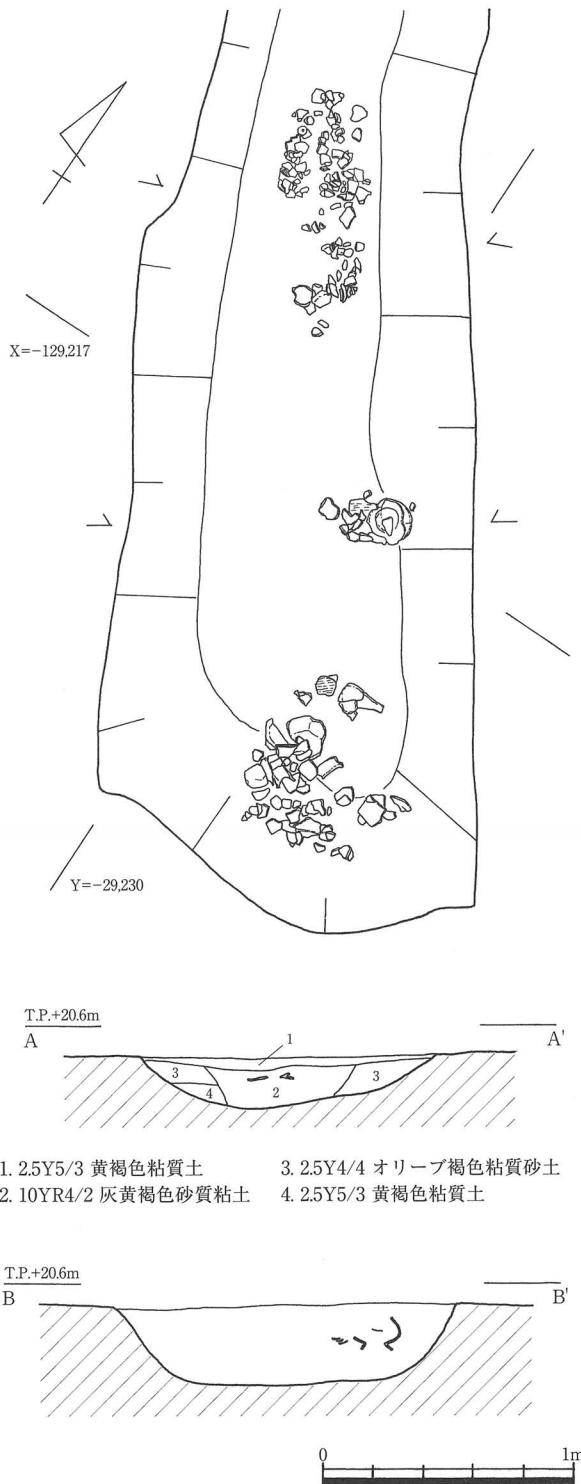
36から39は土師器壺である。36は、口縁部から体部上半が残存している。口縁部は、体部との界から外反気味に外側に延び、口縁端部付近でさらに大きく開く。端部は外側に向けて角張る。体部上半は丸味を持ち、円形に近い。調整は、外面は摩滅のため不明、体部内面はハケ目であるがほとんどが摩滅している。37は二重口縁で、口縁部のみ残存している。頸部と口縁部の界



第34図 住居3 822外周溝出土遺物



第35図 住居3 823外周溝出土遺物



第36図 住居3 823外周溝遺物出土状況

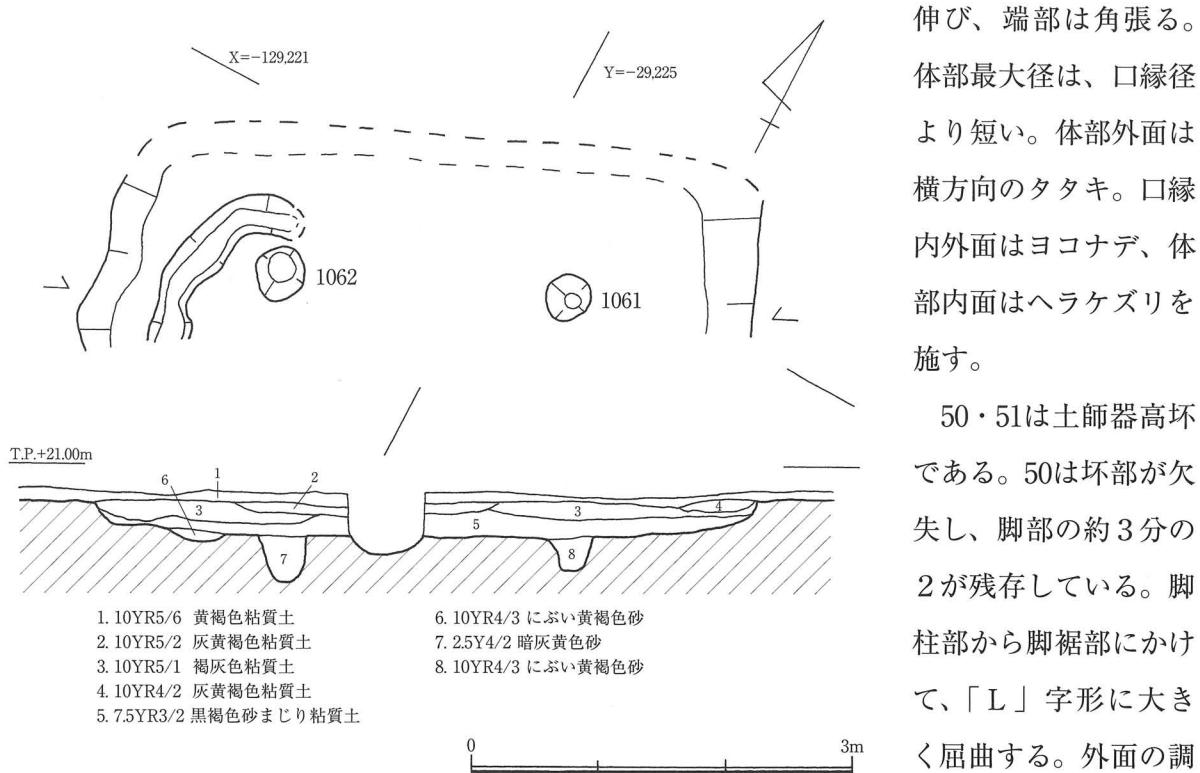
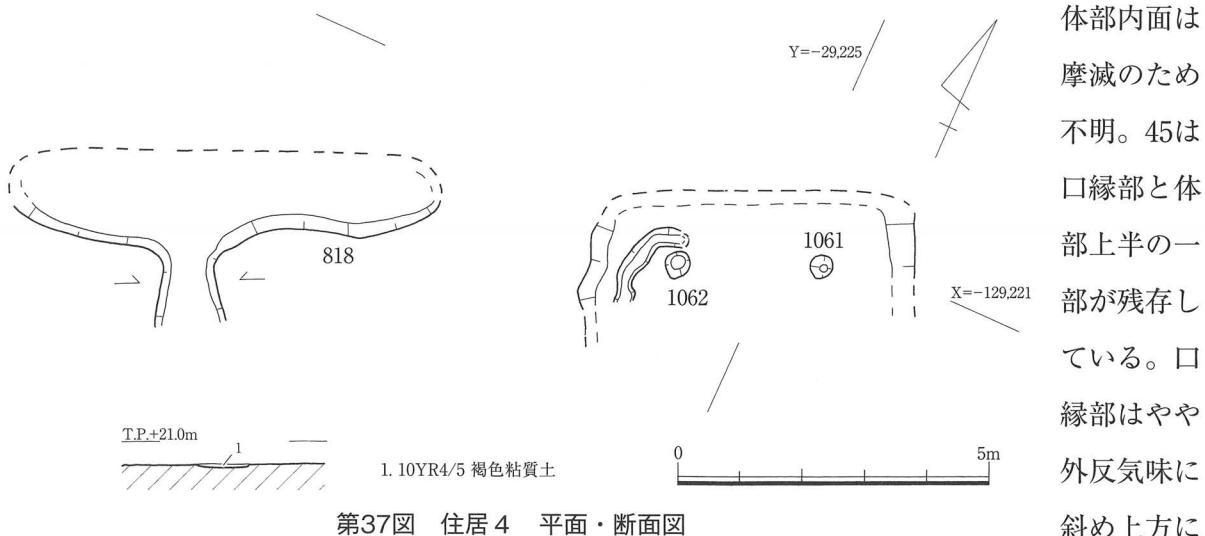
外反気味に外上方に延び、端部は丸い。体部の上半から下半にかけて丸く仕上げ。体底部から底部にかけて斜めに下る。底部は平底に近い。調整は、外面が底部から体部下半は斜め上方方向のタタキ、そこから上は斜めないしは横方向のタタキである。口縁内外面は、摩滅しているため不明。体部内面のほとんどはナデ、底部はハケ目調整である。43は口縁部と体部の一部が残存している。口縁部は「く」の字形に近く、端部はやや角張る。調整は、内外面とも摩滅のため不明であるが、体部外面の一部にタタキが認められる。44は口縁部と体部上半の一部が残存している。口縁部は外反し、端部はやや角張る。調整は、体部外面がタタキ、口縁部は内外面ともヨコナデである。

から外反気味に外側に大きく開く。そこに緩やかな段を有し、外上方に外反気味に延びる。口縁端部は、三角形に近い。頸部は「ハ」の字に開く。調整は摩滅のため不明である。38は二重口縁で、口縁部は頸部付近から斜め上方に延び、その地点に段を有し、そこからやや外反気味にやや斜め上方に延び口縁端部に至る。口縁端部は断面四角形に近い。口縁外面には波状文が三回にわたって施されている。

土師器鉢（40）は、口縁部から体底部の一部が残存している。口縁部は体部の界からやや外反気味に外上方に延び、端部はやや角張る。体部上半は円形に近く、丸く仕上げる。調整は、口縁内外面がヨコナデ、体部外面はタタキ。内面は摩滅のため不明。

土師器手焙形土器（41）は、体部についてはほぼ完存している。しかし覆部には、破片が見受けられ復元を試みたが接合面がなく、図化するには至らなかった。体部端部は、断面三角形に近く、「く」の字形に屈曲する。底部の径は短く、底部から外上方に斜めに体部中央に向かって延びる。体部上半と下半の界には緩やかな凸帯を有する。体部上半は内弯気味に内傾し、体部端部の屈曲部に至る。

42から49は土師器甕である。42は体底部付近が欠失している。口縁部は体部の界から



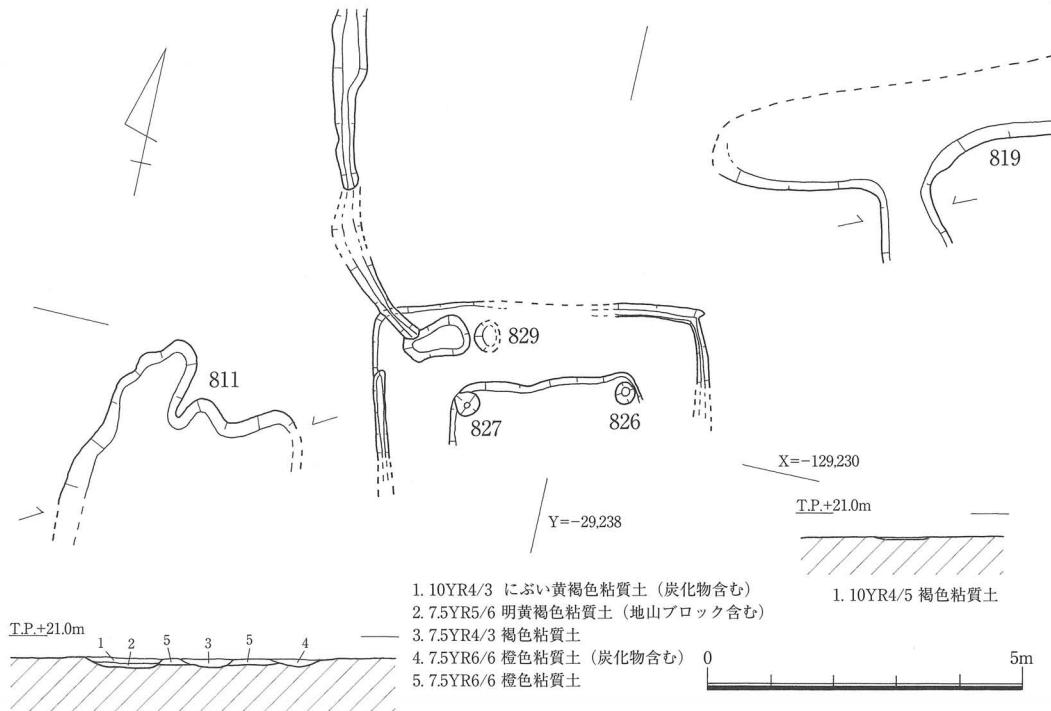
されるが、摩滅のため不明な箇所が多い。51は壊部が欠失し、脚柱部の約3分の1が残存している。脚柱部は1.5cm前後と極短く、そこからラッパ状に外反気味に開き、端部は丸い。透かし孔は脚上部の4箇所に存在するものと推定される。調整は表面摩滅のため不明である。

周堤部は、住居域と外周溝で囲まれており、周堤部の幅は、東側が2.8m前後、西側が2.5mから3.2m、北側は2.4mから3.2mを測る。周堤部の用途としては、住居の壁を作るためにうず高く土砂を積んだ場所であったものと考えている。周堤部が住居の壁として大きな役割を果たしていた、いわゆる「壁建ち住居」であった可能性を考えている。

住居3の南側は、府営住宅造成時の削平により地山上面が欠失している箇所がほとんどである。しかし、822・823外周溝の両端が南側で収束していることから、住居の入口は南側と考えている。

伸び、端部は角張る。体部最大径は、口縁径より短い。体部外面は横方向のタタキ。口縁外面はヨコナデ、体部内面はヘラケズリを施す。

50・51は土師器高坏である。50は壊部が欠失し、脚部の約3分の2が残存している。脚柱部から脚裾部にかけて、「L」字形に大きく屈曲する。外面の調整はヘラミガキと推定



第39図 住居5 平面・断面図

これ以外に、822溝の西端と823溝の北端とが長さ約3.2mに渡って途切れており、この付近にも入口が存在していた可能性が考えられる。

住居4（第37図、図版8-1）

6区南東側、X = -129,221、Y = -29,225付近で検出した住居である。住居4は、住居域と外周溝から構成されている。北辺は、府営住宅築造時の水道管、ガス管などによって削平を受け欠失している。住居南半は、調査区外にあるため不明である。

住居域である1063住居（第38図、図版8-2）は、削平を受けているため不明な点が多いが、平面形では隅丸方形に近い形を呈するものと推定される。壁溝、柱穴などからなり、規模は東西約5.2m、南北1.7m以上を測る。

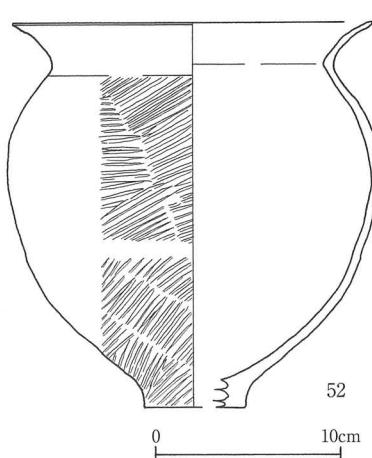
壁溝は、住居北西側で住居端との間が約0.4m離れて巡る。その理由として考えられるのは、周辺の地山が砂礫層であったため、西辺の住居肩部周辺が徐々に崩れ、住居の幅が広がったもの

と推測している。幅0.3m前後、深さ0.1m前後を測り、断面の形状は浅鉢状を呈する。

住居床面上の北側2隅付近から、柱穴を2本検出した。主柱穴は検出した柱穴の位置関係から4本と推定され、径0.4m前後、深さ0.35m前後を測る。

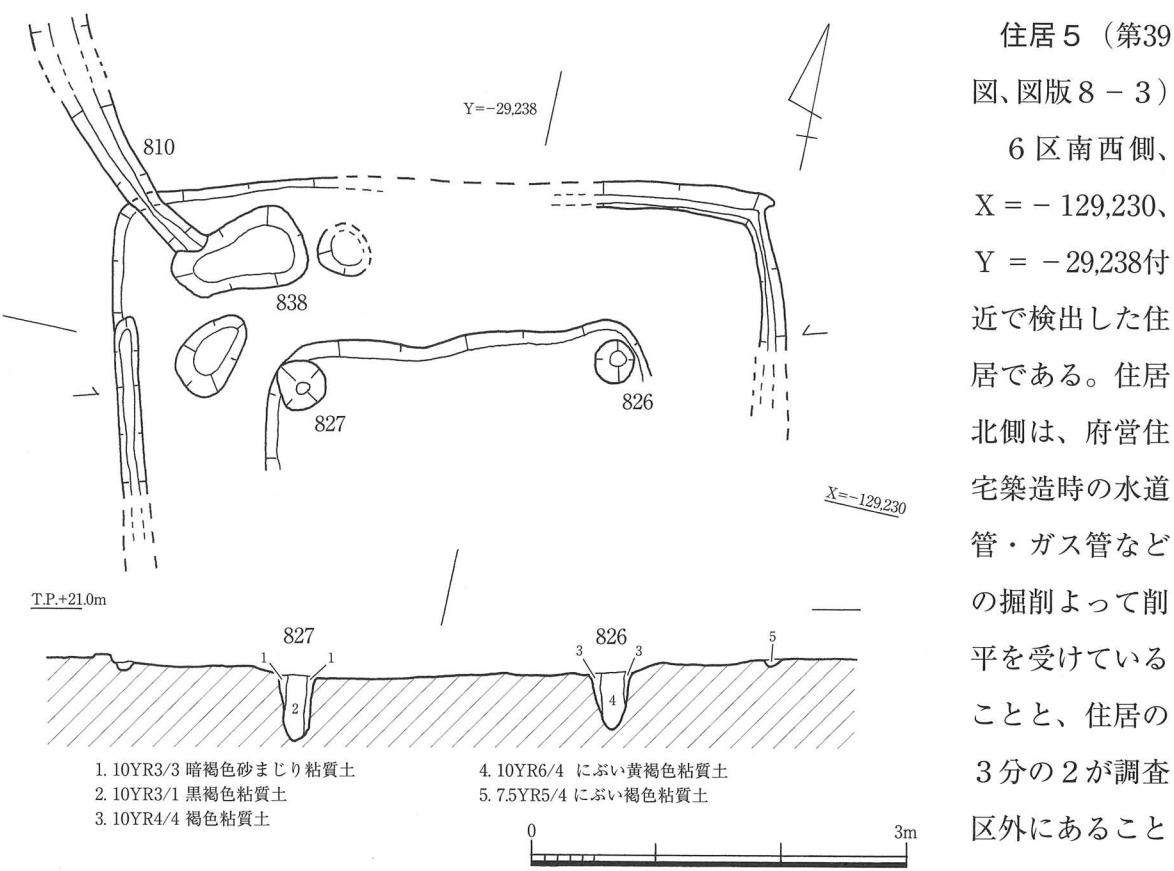
住居埋土中からは、土師器片が極少量出土したが、細片のため図化できなかった。

住居4に伴う外周溝と推定される溝は、住居から西へ約1.5mの地点に818外周溝を検出している。しかし、位置関係から、

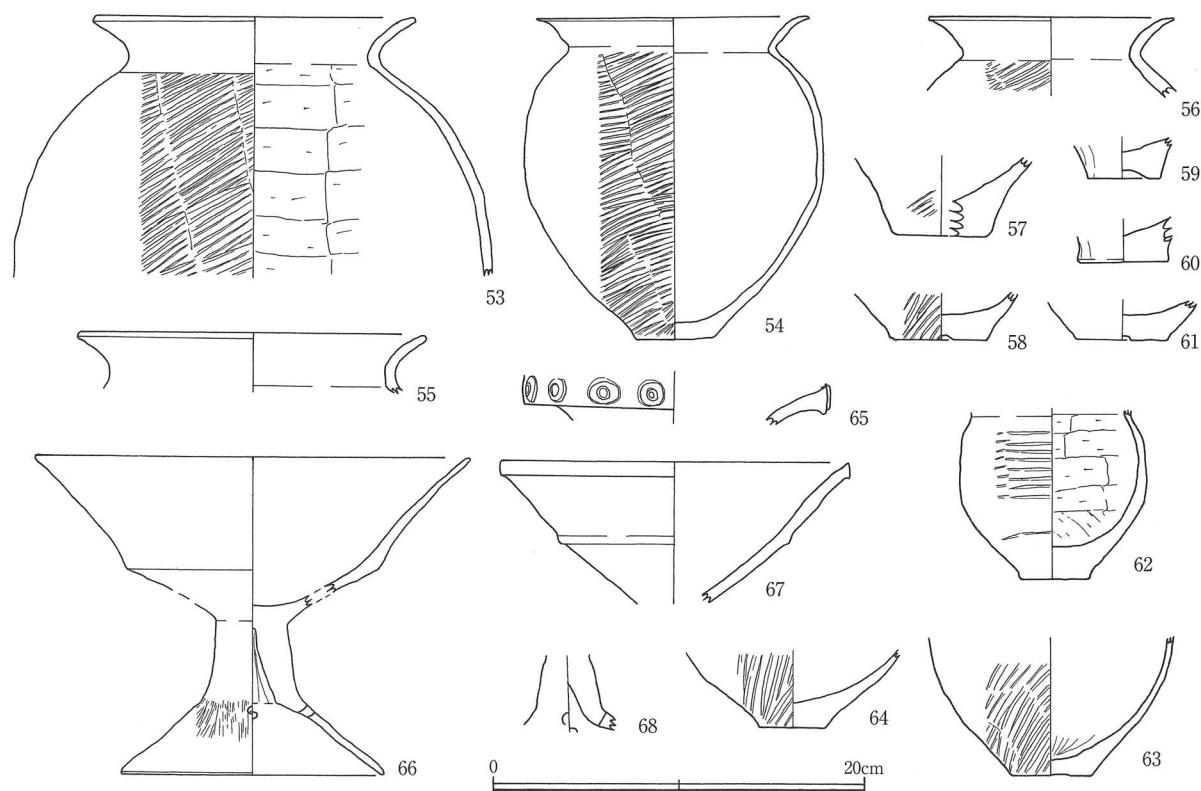


第40図 住居5 828土坑出土遺物

住居に伴うものであるかは疑問の点が残る。住居の東側は検出に努めたが存在しなかった。818外周溝は、溝の南西側、 $X = -129,225$ 、 $Y = -29,233$ 付近で、住居5の外周溝である819外周溝と溝を共有し、南の調査区外に延びる。溝は、幅0.9m前後、深さ0.05m前後を測る。



第41図 住居5 815住居平面・断面図



第42図 住居5 811外周土坑出土遺物

多い。住居5は、住居域、周堤部、外周土坑、外周溝などによって構成され、東西約15m、南北3.5m以上を測る。

住居域である815住居（第41図、図版9-1）は、平面形では隅丸方形に近いものと推定される。住居5は、壁溝、ベッド状遺構、柱穴、土坑、排水溝などから構成され、東西約5.3m、南北2.5m以上を測る。住居北辺の中央付近は、中世と推定される土坑によって削平を受け欠失している。

壁溝は、815住居の北東角付近と、西辺の一部で巡る。北西付近は欠失しているものと推定され、検出できなかった。断面の形状は浅鉢状を呈し、幅0.2m前後、深さ0.05m前後を測る。

ベッド状遺構は、住居の内側の北、東、西辺を巡る。床面からの高さ0.05m前後、幅は東側が約0.9m、西側が約1.0m、北側が約0.9mを測り、地山の削り出しによって高く仕上げている。

住居床面は、東西長約3.05m、南北長0.9m以上を測る。

住居床面上の2隅から、柱穴を2本検出した。主柱穴は、検出した柱穴の位置関係から4本と推定される。径0.4m前後、深さ0.5m前後を測る。土層断面観察により0.15m前後を測る柱痕（図版9-2・3）が確認できた。

住居西北のベッド状遺構の上面（図版8-5）から、図化は出来なかったが、土師器甕片などの遺物が出土している。

828土坑（図版8-4）は、住居の北西側、X=-129,239、Y=-29,240付近のベッド状遺構の上面で検出した。平面形では楕円形に近い形を呈し、長径約1.1m、短径約0.6m、深さ約0.1mを測る。

828土坑から出土した土師器甕（第40-52図、図版17-52）は、全体の約3分の1が残存する。体部の界から外反気味に延び、端部はやや丸味を帯びる。体部は丸く、底部は長く平らに近い。調整は、底部から体部下半までは斜め方向のタタキ。その地点に約1cmの帶状のナデが認められる。そこから上部は横ないしは斜め方向のタタキであることから、二分割整形を行っているものと推察される。口縁内外面および体部内面はヨコナデによって仕上げる。

810排水溝は住居5に伴うと推定され、828土坑の北西端から北側に延び、住居の北西角を突き切り北方向へと延びる。途中、住居5に伴う870外周土坑を切り、X=-129,220、Y=-29,243.5付近で収束する。溝は、幅0.4mから0.8m、深さ約0.15mから0.25mを測る。断面の形状は「U」字形に近い。溝の用途としては、溝底の深さが住居内から北に向かって下って行くことから、住居の排水溝として機能していたものと推定されるが、828土坑を起点としていることなど疑問な点が残る。

住居5に伴う外周土坑・溝は、東へ約0.3m付近で819外周溝、住居から西へ約3.0m付近で811外周土坑を検出した。

819外周溝は、幅0.9m前後、深さ0.05m前後を測るものと推定され、溝南西側、X=-129,225、Y=-29,233付近で、住居4の外周溝である818外周溝と溝を共有し、南の調査区外に延びる。遺物は出土しなかった。

811外周土坑は、X = -129,230、Y = -29,244.5付近を頂点とし、平面形では歪な山状の頂点が3箇所存在しているような形を呈し、遺構のほとんどが南の調査区外に延びる。土層断面観察の結果、断面の形状が溝状を呈する箇所が3箇所認められ、溝が切り合っているものと考えている。土層断面観察に認められる溝状の痕跡は、東から幅約0.8m、約0.8m、約1.2mを測る。遺構と815住居との位置関係から、外周溝ないしは外周土坑である可能性が高いものと推察されるが、遺構の大半が調査区外に存在するため不明な点が多い。遺構全体の規模は、長さ3.0m以上、最大幅約4.0m、深さ0.2mを測る。遺構内から出土した遺物（第42図）は、土師器壺、土師器甕、土師器高坏などである。

53から64は土師器甕である。53は体底部が欠失している。口縁部は体部の界から外反し外上方に延び、端部はやや角張る。体部の上半は丸く仕上げている。調整は、体部上半外面が斜め方向のタタキ、口縁内外面はヨコナデ。体部内面はヘラケズリを行っている。54は全体の約3分の2が残存する。口縁部は体部の界からやや外反気味に斜め延び、端部はやや丸味を帯びる。体部は丸く、底部は長く平らに近い。調整は、底部から体部下半までは斜め方向のタタキ。口縁内外面および体部内面はヨコナデによって仕上げる。56は口縁部から体上部のみ残存している。口縁部は体部の界からやや外反し外上方に延び、端部はやや角張る。調整は、体部上半外面が斜め方向のタタキ、口縁内外面はヨコナデを行っている。62は小型の甕で口縁部が欠損している。体部は丸味を持ち、底部は平らに近い。調整は、体部外面がタタキであるが、一部摩滅のため不明。内面はヘラケズリを行っている。63は小型の甕で体部下が残存している。体部底部は丸味を持ち、底部は平らに近い。調整は、体部外面がタタキ、内面は摩滅のため不明。

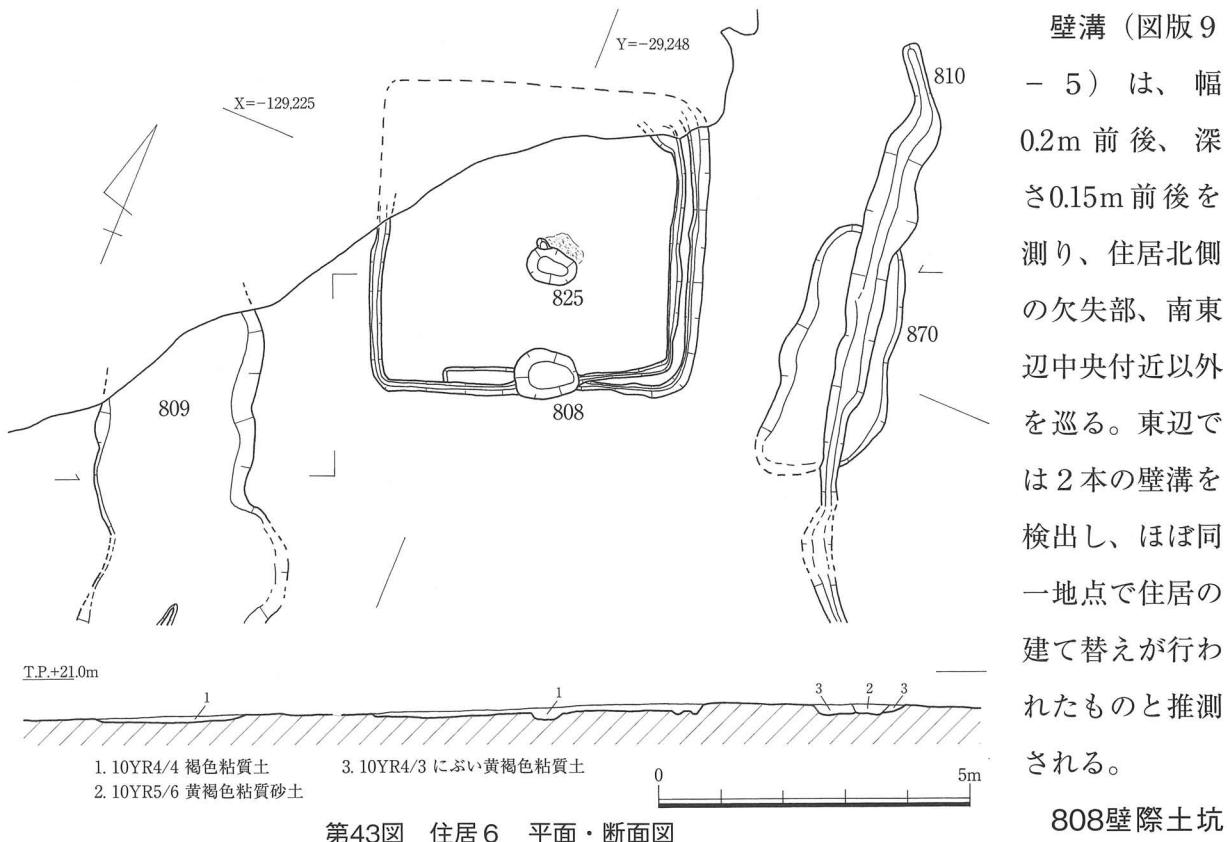
65は口縁外面に円形浮文を施した壺であるが、口縁端部が欠損し、一部のみ残存しているため詳細は不明である。

66から68は高坏である。66は脚柱部の界から斜め上方に大きく開く。そこに緩やかな段を有し、外上方に外反気味に延びる。口縁端部は、丸みを帯びる。脚柱部はやや「ハ」の字に近く、脚柱部端からラッパ状に大きく開く。端部は丸い。透かし孔は脚上部の4箇所に存在するものと推定される。調整のほとんどは表面摩滅のため不明であるが、一部ヘラミガキが認められる。67は口縁部の3分の1が残存している。脚柱部の界から斜め上方に大きく開く。そこに緩やかな凸帶を有し、さらに外上方に外反気味に延びる。口縁端部は、断面三角形に近い。調整は内外面とも剥離のため不明である。

住居6（第43図、図版9-4）

6区南西端、X = -129,225、Y = -29,248付近で検出した住居である。住居6は、住居域、周堤部、外周土坑などによって構成され、東西約12.5m、南北5.5m以上を測る。

住居域である807住居（図版10-1）は、北側が近世の水田造成時に削平を受け欠失しているが、平面形では隅丸方形に近い形を呈し、壁溝、壁際土坑、中央土坑などによって構成される。しかし住居に伴う柱穴は、床面上を綿密に精査したが、検出しなかった。



第43図 住居6 平面・断面図

（図版9-6）は、住居部南東辺中央付近で南東辺を一部切るような状況で巡る。平面形では橢円形に近い形を呈し、長径約1.0m、短径約0.8m、床面からの深さは最深部で約0.15mを測る。

土坑内から土師器鉢（第44図）が出土している。69は体部下から底部にかけて残存し、図化は出来なかったが、同一遺構内より同一器種と推定される把手が出土している。底部は平らに近く、底部から底部上方にかけて外上方に内弯し延びる。調整は摩滅のため不明。

825中央土坑（図版9-7）は、住居部中央付近において検出した。平面形では橢円形に近い形を呈し、長径約0.8m、短径約0.55m、深さ約0.2mを測る。土坑壁面、土坑周囲の床面上面において、地山が焼けて赤褐色を呈していたこと、埋土中に炭化物を多く含んでいたことから、炉として機能していたものと推測される。

870外周土坑は、807住居の東側約3m付近を南北方向に延びる。北端がX = -129,223、Y = -29,243付近、南端は削平され欠失しているが、土坑の形状からX = -129,223、Y = -29,243付近と推定される。長さ3.8m以上、幅約1.4m、深さ0.2m前後を測る。断面の形状は、浅皿状に近い。土坑の南北の中央付近を、住居6から派生する810排水溝が切って北方向へ延びる。

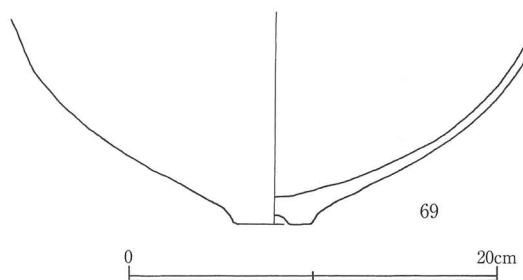
出土遺物は、土師器甕（第47-81図）などである。81は、体部中央から下が欠損している。口縁部は体部との界からやや外反し斜め外上方に延び、端部はやや丸味をおびる。体部の上半は丸く仕上げている。体部最大径は、口縁径よりやや短い。調整は、体部上半外面が横方向のタタキ、口縁内外面はヨコナデ。体部内面はヘラケズリを行っている。

809外周土坑は、807住居の西側を南北方向に延びる。土坑の北端と南端は、削平され欠失している。調査当初は、外周溝と考えていたが、南北両端が欠失しているため不明な点があり、遺

物の出土状況などから、外周土坑である可能性が高いと判断した。長さ4.2m以上、幅約2.6m、深さ0.15m前後を測る。断面の形状は浅皿状に近い。

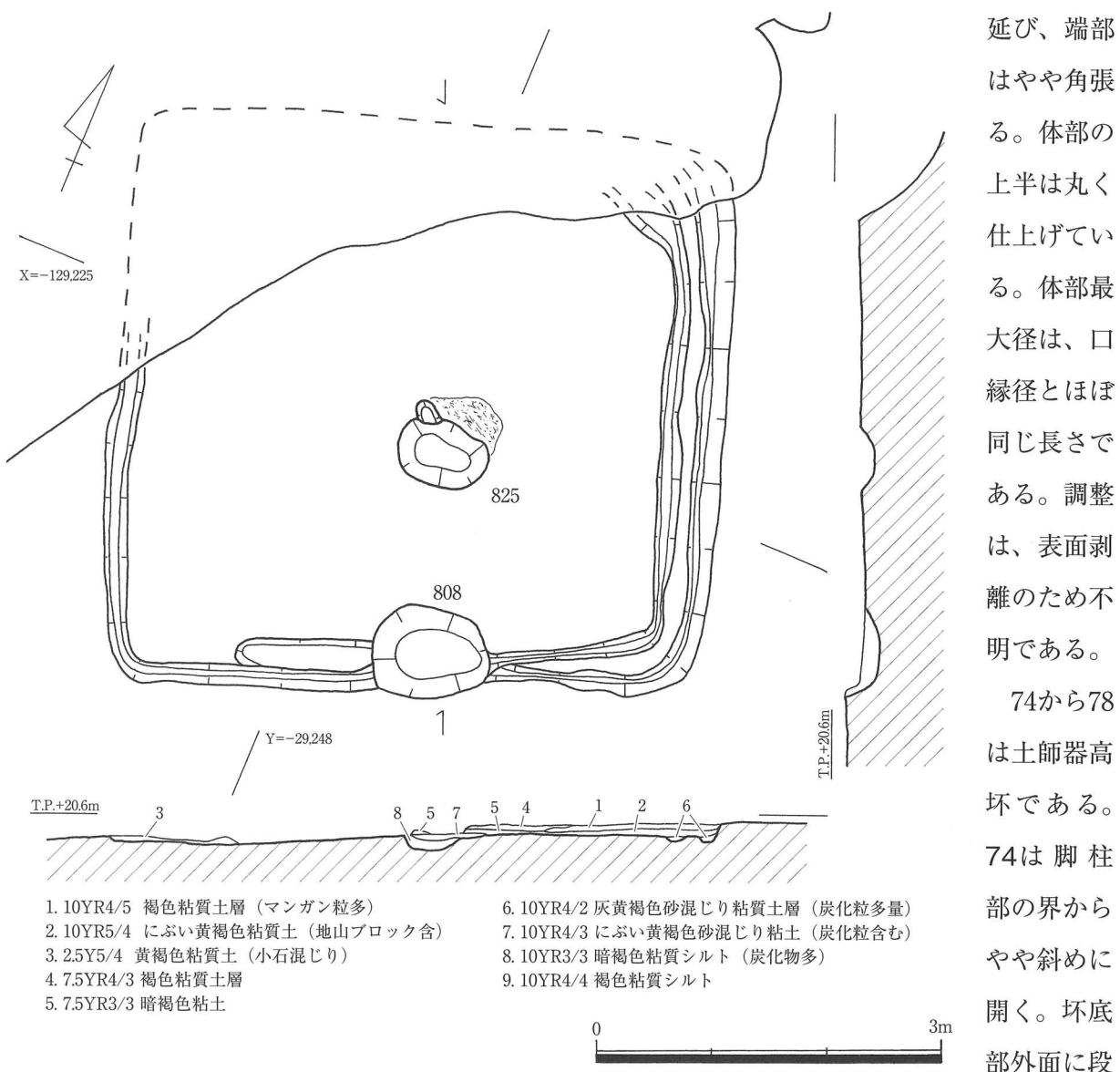
遺構内からは、大きく分けて2箇所で土器片が集中して出土した。出土した遺物（第47図、図版10-2・3）は、土師器甕、土師器高坏、土師器鉢、脚付鉢などである。

70から73は土師器甕である。70は体部中央から下が欠損している。口縁部は体部との界から外反気味に斜め外上方に延び、端部はやや丸味をおびる。体部の上半はやや内弯し、体部最大径に至る。体部最大径は、口縁径よりやや短い。調整は、内外面とも剥離のため不明である。72は口



第44図 住居6 806住居808壁際土坑出土遺物

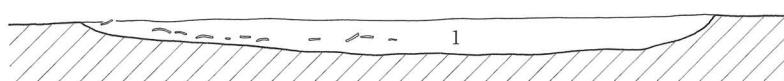
縁部から体部上半が残存している。口縁部は体部との界からやや外反し、斜め外上方に延びる。端部はやや角張る。体部上半部の形状から体部最大径は、口縁径より長い。調整は、表面剥離のため不明である。73は体部中央から下が欠損している。口縁部は体部との界からやや外反し斜め外上方に



第45図 住居6 806住居平面・断面図



T.P.+20.5m



T.P.+20.5m

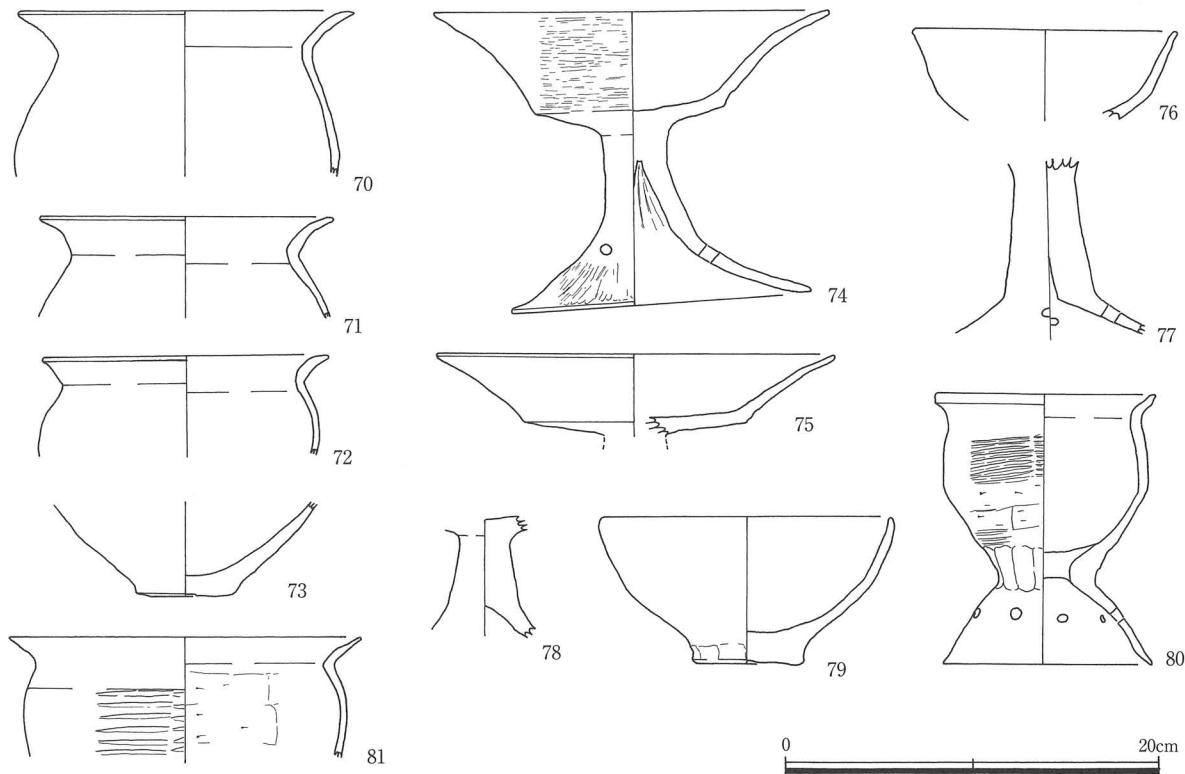


1. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質砂土。地山ブロック含む。



第46図 住居6 809外周土坑遺物出土状況

を有し、外上方に外反気味に延びる。口縁端部は丸みを帯びる。脚柱部はやや「ハ」の字に近く、

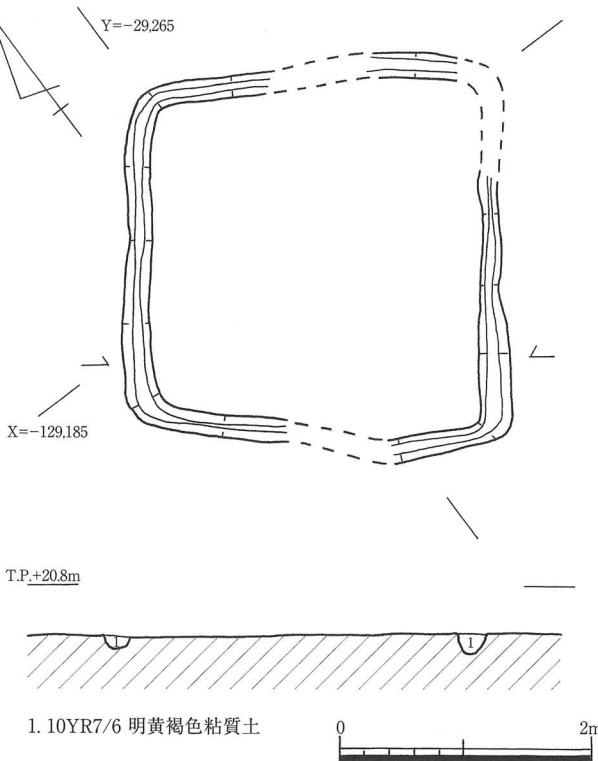


第47図 住居6 外周土坑出土遺物

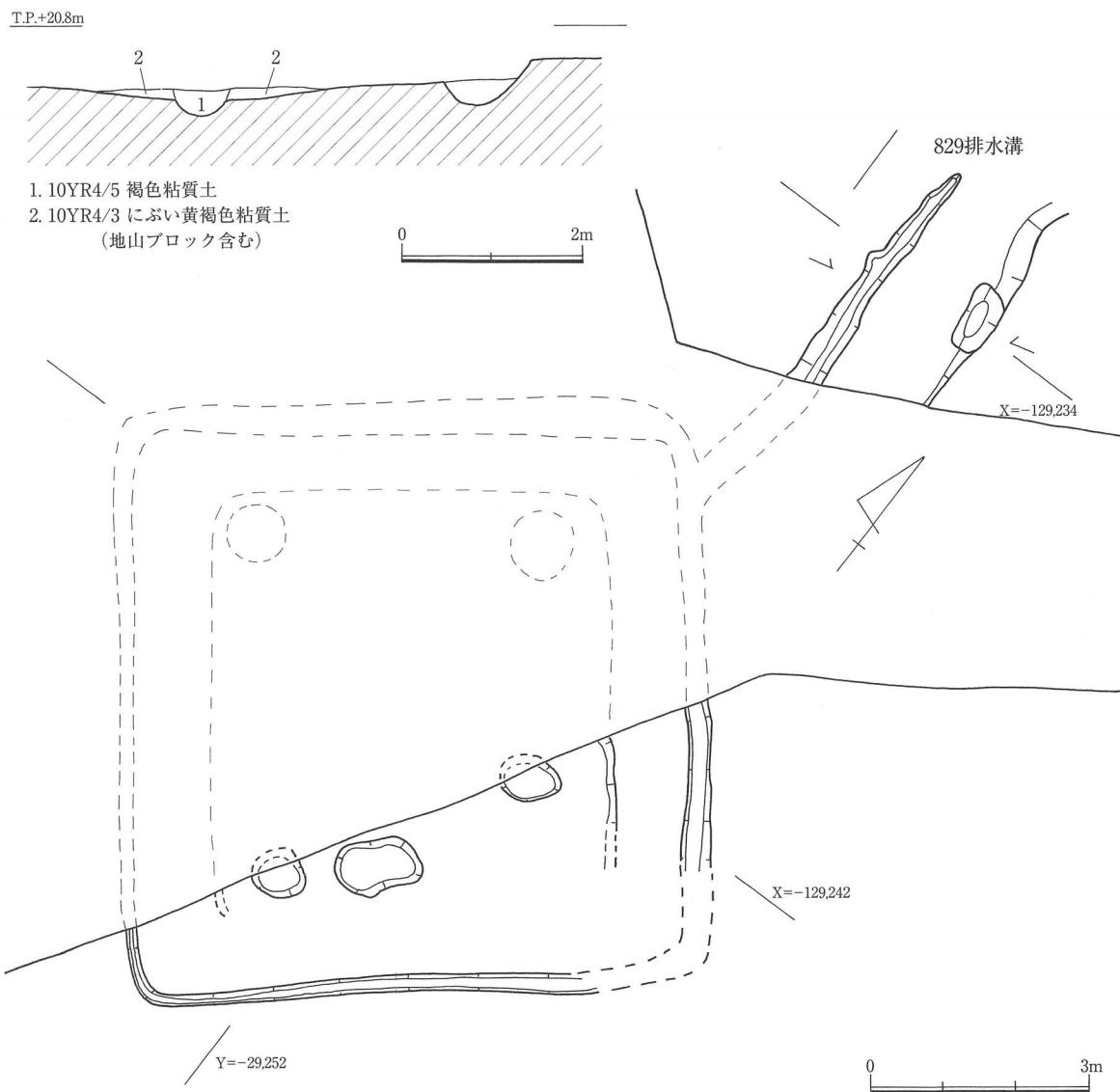
脚柱部端からラッパ状に大きく開く。端部は丸い。透かし孔は脚部の4箇所に存在するものと推定される。調整のほとんどは表面摩滅のため不明であるが、一部ヘラミガキが認められる。75は脚部が欠損し、坏部の一部が残存する。脚柱部の界からやや水平気味に開く。坏底部外面に段を有し、外上方に大きく開き、外反気味に延びる。口縁端部は、丸みを帯びる。調整は表面摩滅のため不明。76は脚部が欠損し、坏部の一部が残存する。坏部は椀状を呈し、口縁部と底部の界には緩やかな段状のものが存在する。調整は、表面摩滅のため不明である。

79は土師器鉢である。椀状を呈し、口縁端部は丸味を帯びる。底部は平底に近い。調整は、表面摩滅のため不明である。

周堤部は、住居域と外周溝で囲まれており、周堤部の幅は、東側が1.4mから2.0m、西側が約1.8mを測る。周堤部の用途としては、住居の壁を作るためにうず高く土砂を積んだ場所であったと考えている。周堤部が住居の壁として大きな役割を果たしていたものと推察される。



第48図 住居7 平面・断面図



第49図 住居I-8 829排水溝平面・断面図

住居7（第48図、図版10-4）

6区南西端、X = -129,185、Y = -29,265付近で検出した小型の竪穴住居跡である。住居域である990住居は、長辺約3.2m、短辺約3.0mを測る。

壁溝は、住居内側を巡り、幅0.2m前後、深さ0.1m前後を測る。断面の形状は「U」字形に近い。住居床面の上面で遺構の検出に努めたが、柱穴などの遺構は検出しなかった。住居の規模が小さく、人が住むには小規模であることから、作業小屋、倉庫などの用途に使われていたものと推測される。遺物は出土しなかった。

住居I-8 829排水溝（第49図）

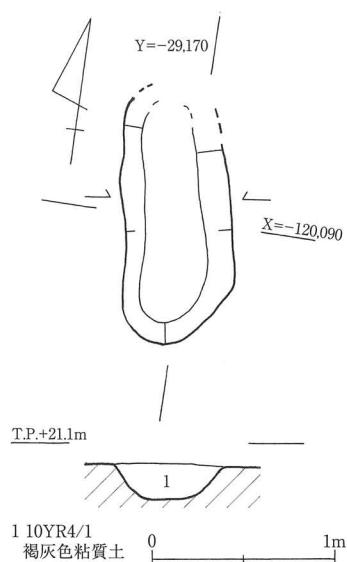
6区南西端、X = -129,233、Y = -29,251付近で収束し、ほぼ南方向に直線的に伸びX = -129,235.5、Y = -29,251付近で南の調査区外へ伸びる。幅約0.3m、深さ約0.15mを測り、断面の形状は、「U」字形に近い。平面・断面の形状が、竪穴住居に伴う排水溝に極めて似ていることから住居に伴う排水溝である可能性が極めて高い。遺構の配置・位置関係から1998・1999年度（第1次調査）に実施したX = -129,242、Y = -29,252付近に存在する住居I-8に伴うものである。

排水溝である可能性が高い。

2. 土坑の調査

4土坑（第50図）

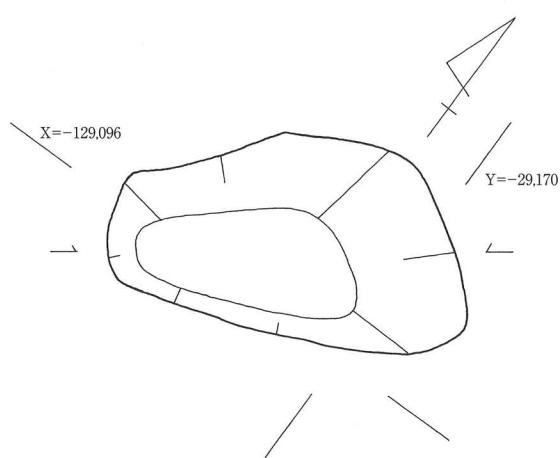
1区北東端、X = -129,090、Y = -29,170.5付近で検出した。土坑の一部は北の調査区外に延びる。平面形では橢円形に近い形を呈しているものと推定され、長径1.35m以上、短径約0.6m、深さ約0.2mを測る。遺構の埋土は褐灰色粘質土が堆積する。遺物は、下層から土師器甕片、土師器鉢（第51図）



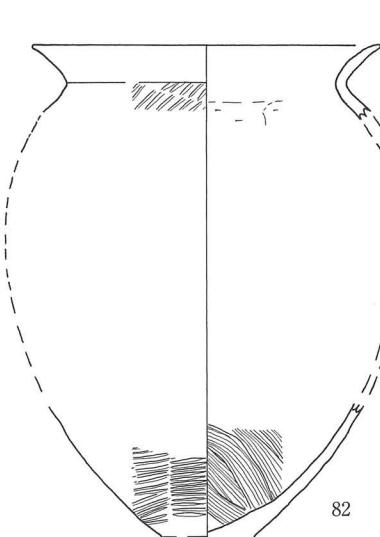
第50図 4土坑平面・断面図

などが出土している。（横田）

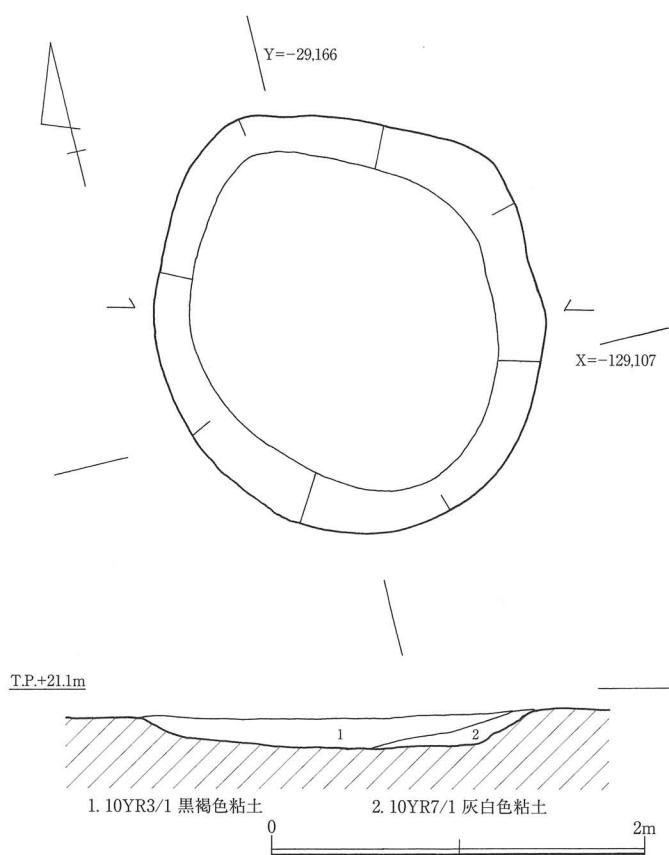
土師器甕（82）は、口縁部と体底部から底部のみ残存している。口縁は外反し大きく開き、端部はやや丸味を持つ。底部は平らに近く、体底部上部に



第52図 8土坑平面・断面図



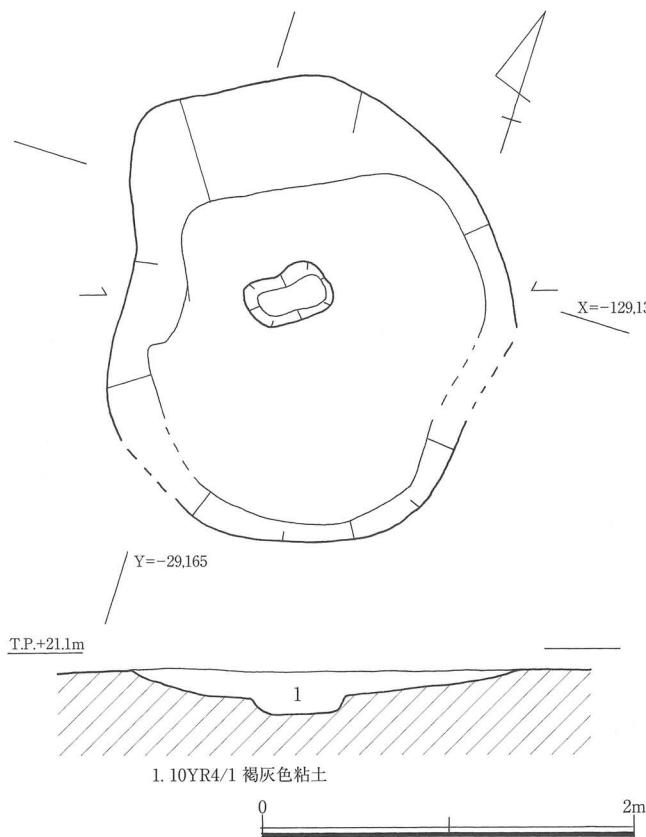
第51図 4土坑出土遺物



第53図 20土坑平面・断面図

向かって内弯し、外側に開く。調整は、口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面が斜め方向のタタキ。体底部外面は横方向のタタキ、体底部と底部の界がナデ。内面はハケ目調整によって仕上げ

ている。(横田)



第54図 34土坑平面・断面図

8土坑（第52図）

1区の中央よりも北よりの部分で、X = -129,096、Y = -29,170付近で検出した。平面形では不定形で東西方向に長く、長径約1.90m、短径約1.1m、深さ約0.6mを測り、断面の形状は鉢形に近い形をしている。遺構の埋土は上層から暗褐色粘土、褐灰色粘質土、灰色粘質土灰褐色粘土の順に堆積する。

20土坑（第53図）

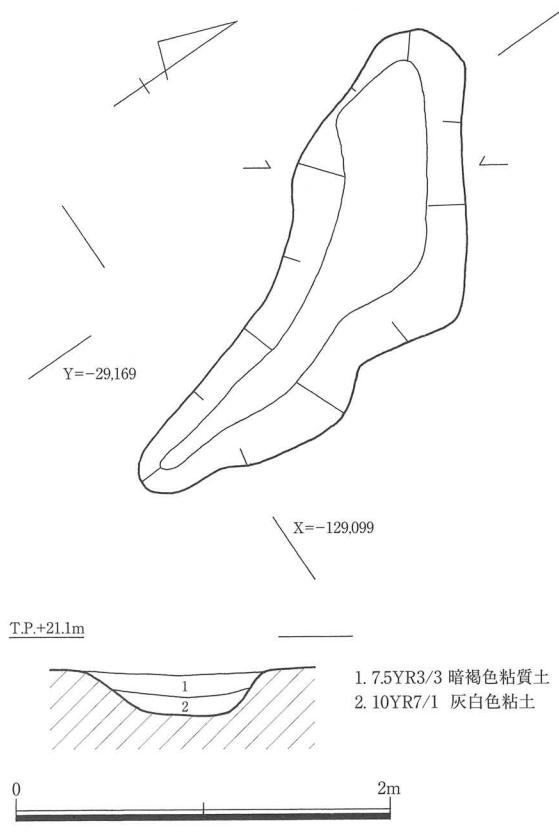
1区中央、X = -129,107、Y = -29,166付近で検出した。平面形では円形に近い形を呈し、長径約1.3m、短径約1.1m、深さ約0.2mを測る。断面の形状は浅鉢形に近い。遺構の埋土は上層から黒褐色粘土、灰白色粘土の順に堆積する。遺物は出土しなかった。(横田)

34土坑（第54図）

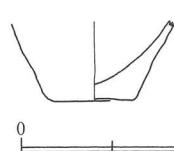
1区中央、X = -129,130、Y = -29,130付近で検出した。深さ0.1mくらいを測る。浅鉢状にひろがる底面の中央にさらに掘りくぼめられた箇所があり、断面の形状は2段掘り状になっている。長径約2.5m、短径約2.2m、深さ約0.25mを測る。遺構の埋土は褐灰色粘土が堆積する。遺物は出土しなかった。(横田)

37土坑（第55図）

1区北部、X = -129,099、Y = -29,169付近で検出した。平面形では不定形で、南北方

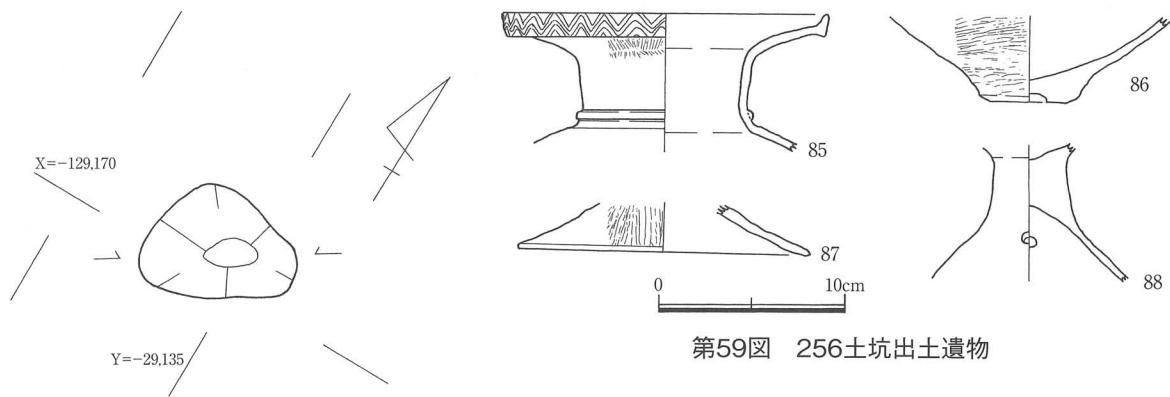


第55図 37土坑平面・断面図

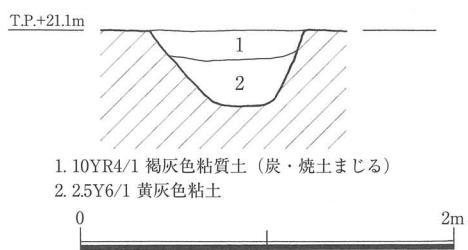


第56図 37土坑出土遺物断面図

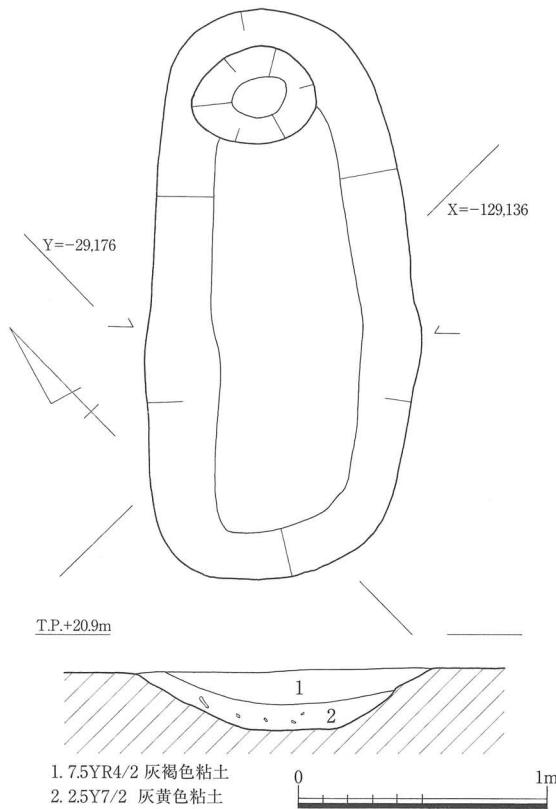
向に長い土坑であり、長径約2.9m、短径約1.0m、深さ約0.2mを



第59図 256土坑出土遺物



第57図 81土坑平面・断面図



第58図 256土坑平面・断面図

256土坑（第58図、図版11-1・2）

1区中央、X = -129,136、Y = -29,175で検出した。

平面形では南北方向に長く、長径約2.2m、短径約1.1m、深さ約0.2mを測る。断面の形状は浅鉢状を呈する。遺構の埋土は灰褐色粘土層、灰黃褐色粘土の2層で、凹レンズ状に堆積する。遺物（第59図）は、土師器壺片、土師器甕片、土師器高杯片などが出土している。（横田）

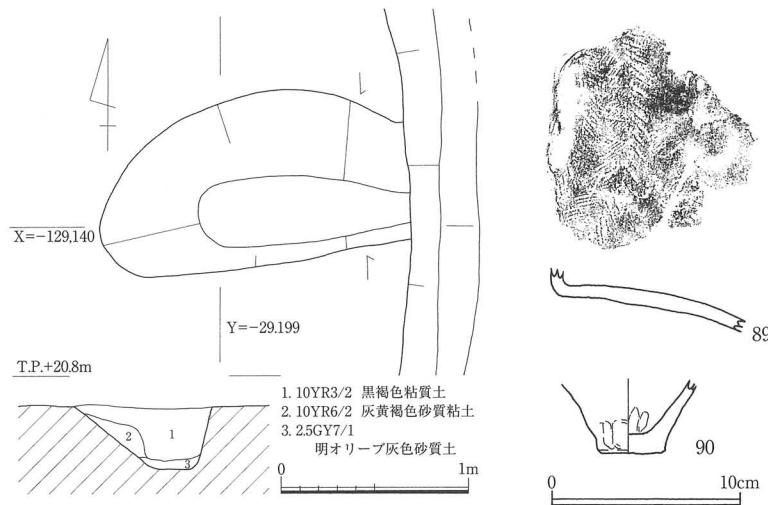
測る。断面の形状は浅鉢状を呈する。遺構の埋土は上層から暗褐色粘質土、灰白色粘土が堆積する。遺物は、土師器甕の底部（第56図）などが出土地してい。（横田）

土師器甕（84）
は、底部付近のみ残存する。底部は平らに近く、そこからほぼ直線的に斜め上方に延びる。

81土坑（第57図）

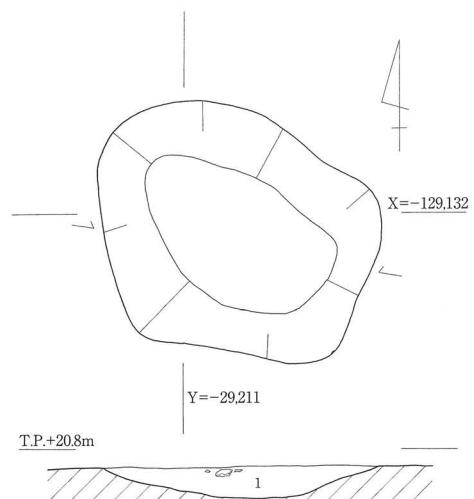
1区南端、X = -129,170、Y = -29,135付近で検出した。平面形ではひしゃげたような形で、長径約0.80m、短径約0.6m、深さ約0.35mを測る。断面の形状は鉢形を呈する。遺構の埋土は上層から褐灰色粘質土、黄灰色粘土が堆積する。遺物は出土しなかった。（横田）

85、86は土師器壺である。85は口縁部から頸部のみ残存している。口縁部は断面三角形に近く、短い。そこから頸部にかけてやや斜めに内側に延び、頸部に至る。頸部はやや内側に体部との界に向かって延びる。頸部と体部の界には凸帯を巡らす。調整は、ほとんどが摩滅のため不明であるが、口縁外面には波状文を施している。



第61図 391土坑平面・断面図

第62図 391土坑出土
遺物



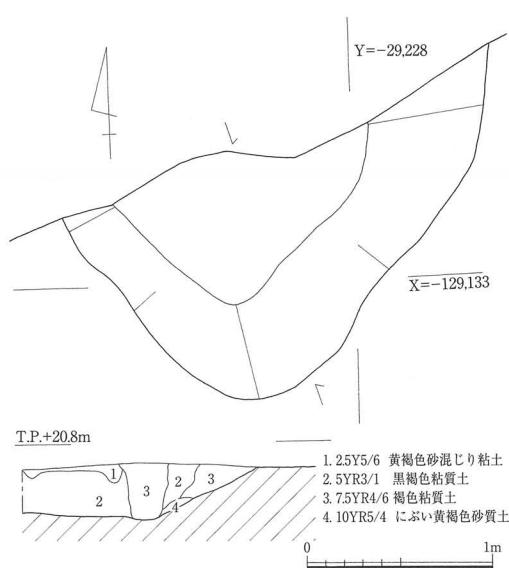
第63図 399土坑平面・断面図

129.130、Y = -29.181付近で検出した。平面形は南北方向に長い不定形であり、長径5.2m以上、短径約2.6m、深さ約0.25mを測る。断面の形状はレンズ状に近い。内部からは遺物は出土しなかった。(横田)

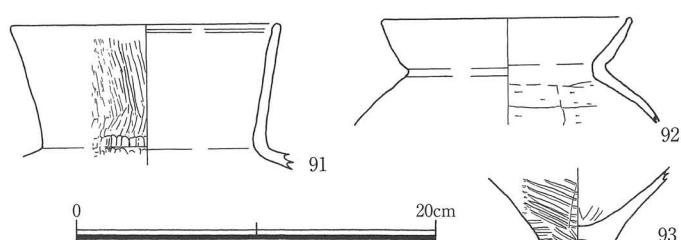
391土坑（第61図、図版11-11）

4区東端中央、住居1の外周溝東側、X = -129.140、Y = -29.119付近で検出した。土坑の東側は、住居1の外周溝である384外周溝によって切られている。平面形では橢円形に近い形を呈し、長径約1.65m以上、短径約0.9m深さ約0.35mを測る。断面の形状は、「U」字形に近い。遺構の埋土は、上層の黒褐色粘質土が「U」字形に落ち込んだ状況を呈し、最下層に明オリーブ灰色砂質土が堆積する。遺物は、土坑東側下層より壺片、甕底部（第62図）が出土している。遺構の切り合い関係から、住居1より若干古い時期と推測される。

壺(89)は体部上部と頸部の一部のみ残存している。



第64図 508土坑平面・断面図



第65図 508土坑出土遺物

体部上部はやや内弯している。外面には、上下二列の刺突文の間に波状文を施している。

甕（90）は底部のみ残存している。底部は平らで、そこから斜め上方に延びる。調整は、底部と体部の界付近の外面は指ナデである。

399土坑（第63図、図版11-3・4）

4区北東、住居1の384外周溝の北側、 $X = -129.132$ 、 $Y = -29.211$ 付近で検出した。平面形では橢円形に近い形を呈し、長径約1.6m、短径約1.2m、深さ約0.15mを測る。断面の形状は、浅鉢状に近い。遺構の埋土は黒褐色粘質土が堆積する。遺物は、上面より土師器壺・土師器甕などが出土したが、小片のため図化が出来なかった。

508土坑（第64図、図版11-5・6）

4区北端中央よりやや東側、 $X = -129.133$ 、 $Y = -29.228$ 付近で検出した。土坑の2分の1以上は北側の調査区外に存在する。東西長2.4m以上、南北長1.4m以上、深さ約0.3mを測る。断面の形状は鉢状に近い形を呈する。遺物は、土師器壺片、土師器甕片（第65図）などが出土した。

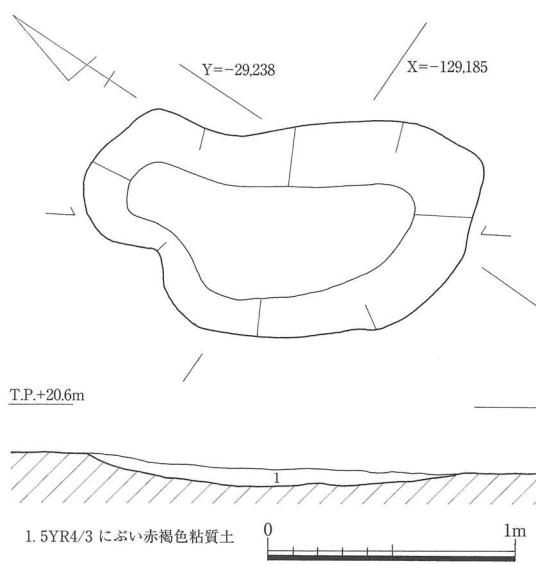
壺（91）は口縁部の一部のみ残存している。口縁部はやや斜め上方に直線的に延び、端部は丸く仕上げる。調整は、外面は縦方向のヘラミガキ、内面は表面剥離のため不明である。92・93は甕である。92の口縁部は内弯気味に斜め上方に延び、端部はやや丸味を持つ。口縁部と体部の界から外側に大きく開く。調整は、口縁部内外面はヨコナデ、体部内面は横方向のヘラケズリを行っている。体部外面は表面剥離のため不明である。

538土坑（第66図、図版11-13）

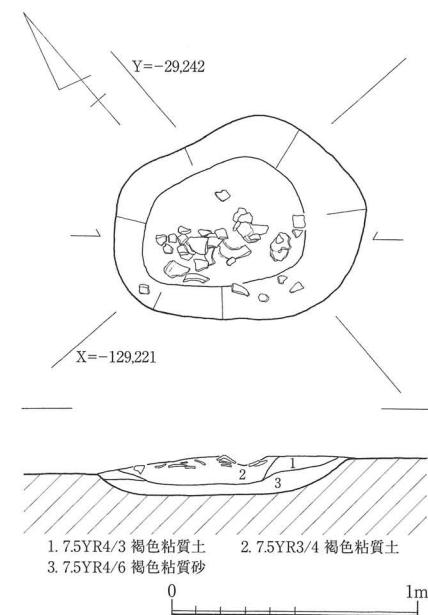
4区南西端、 $X = -129.185$ 、 $Y = -29.238$ 付近で検出した。平面形では橢円形に近い形を呈し、長径約1.6m、短径約8.5m、深さ約0.1mを測る。断面の形状は浅鉢状に近い形を呈する。遺構の埋土は、にぶい赤褐色粘質土が堆積する。遺物は、上面より土師器壺・土師器甕片などが出土したが、図化できなかった。

806土坑（第67図、図版11-8）

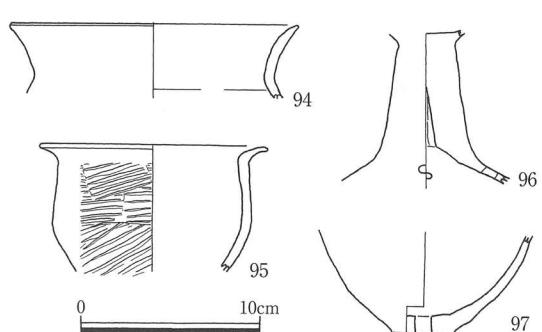
6区南側中央、 $X = -129.221$ 、 $Y = -29.242$ 付近で検出した。平面形では橢円形に近い形を呈し、長径約1.0m、短径約0.8m、



第66図 538土坑平面・断面図



第67図 806土坑遺物出土状況



第68図 806土坑出土遺物

深さ約0.15mを測る。断面の形状は、浅鉢状に近い形を呈する。遺物（第68図、図版11-7）は、上層の褐色粘質土中より集中して、土師器甕・土師器鉢・土師器高坏、土師器甌などが出土した。

94の甕は口縁部の一部のみ残存している。口縁部は外反気味にやや斜め上方に延びる。調整は表面剥離のため不明である。

95の鉢は底部が欠損している。口縁部は短く、外反気味に外上方に大きく開き、端部は丸味を持つ。体部最大径は口縁径よりやや短い。調整は、口縁内外面ともヨコナデ、体部外面はタタキ、内面はヨコナデを施す。

96は高坏で脚柱部のみ残存している。脚柱部はやや開き気味に下り、裾部で大きく開く。調整は内外面とも表面剥離のため不明である。

97は甌で体底部から底部にかけて残存している。底部は平底に近く、ほぼ中央に焼成前に穿孔している。底部から内弯し、外上方に延びる。調整は、内外面とも表面剥離のため不明である。

824土坑（第69図、図版11-9・10）

6区南西端、X = -129,239、Y = -29,245.5付近で検出した。平面形では橢円形に近い形を呈し、長径約0.92m、短径約0.45m、深さ約0.25mを測る。

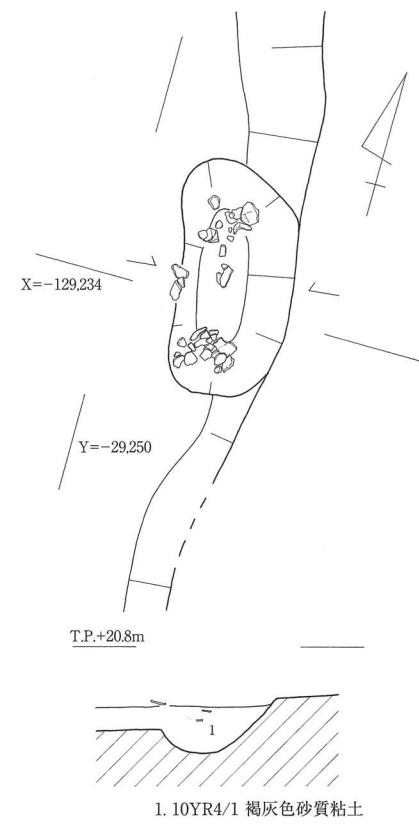
断面の形状は鉢状に近い。遺構の埋土は、褐灰色砂質粘土が堆積する。遺物（図版13-9）は、上層からのみ出土し下層からはなく、土師器甕（第70図）などが出でた。

98、99、100は土師器甕である。98は底部が欠損している。口縁部は大きく外反し、外側に開く。端部は角張る。体部は丸い。調整は、口縁部内外面がヨコナデ、体部外面はタタキ、内面はヘラケズリを施す。99は体部中央から下が欠損している。口縁は体部の界から外反し外側に延びる。端部は断面三角形に近い。調整は、口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面はタタキ。内面は剥離のため不明である。100は体底部から下のみ残存している。底部は平らに近く、そこから内弯気味に外上方に延びる。調整は、外面は体部下まで斜め方向のタタキ、底部内面下にはナデの跡が残る。

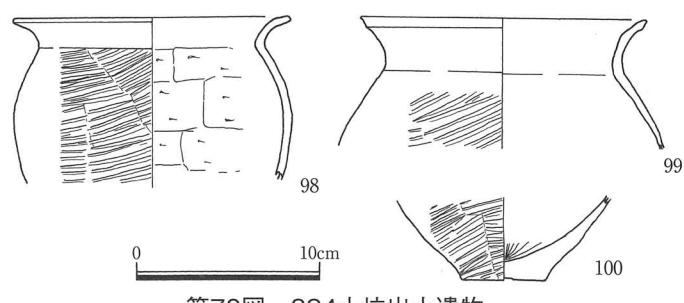
3. 溝の調査

3溝（第71図）

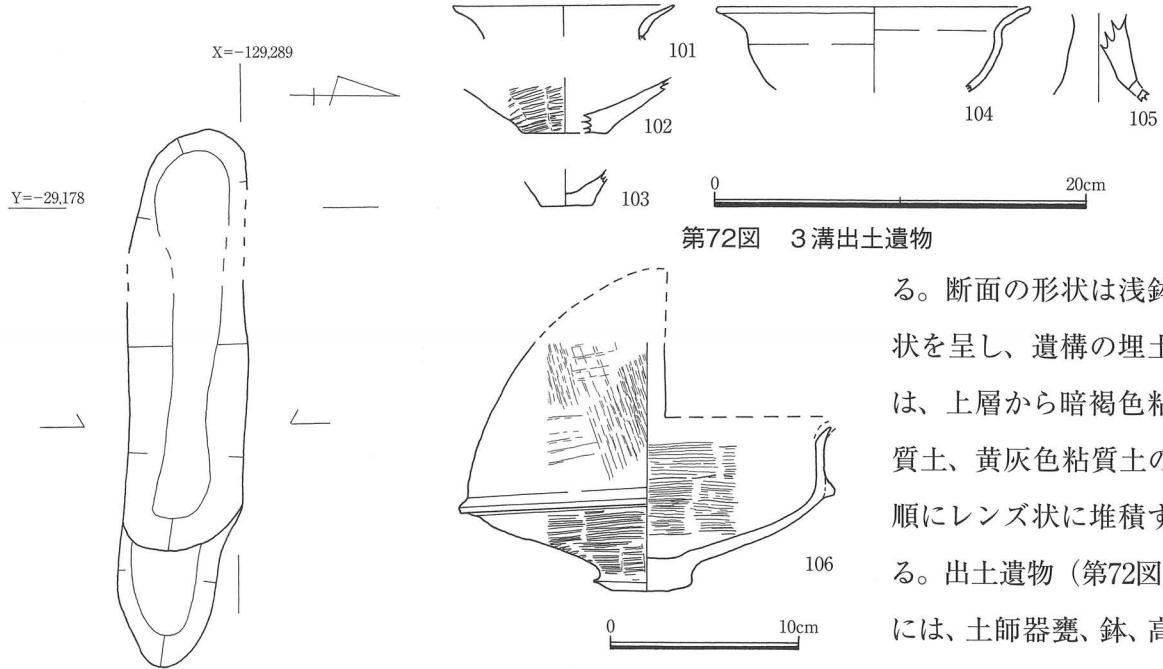
1区北端、X = -129,089、Y = -29,178付近で検出した。西端は別の溝状遺構と重複し、幅約0.6m、深さ約0.15mを測り、延長は約2m分を検出してい



第69図 824土坑遺物出土状況

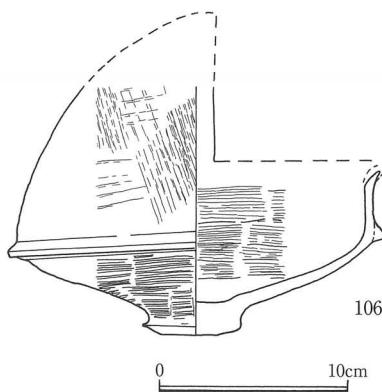


第70図 824土坑出土遺物



第72図 3溝出土遺物

る。断面の形状は浅鉢状を呈し、遺構の埋土は、上層から暗褐色粘質土、黄灰色粘質土の順にレンズ状に堆積する。出土遺物（第72図）には、土師器甕、鉢、高杯などがある。（横田）



第73図 333溝出土遺物

には、土師器甕、鉢、高杯などがある。（横田）

101から103は甕である。101は口縁の一部のみ残存し、体部の界から外反し大きく開く。端部は細く尖る。102は底部の約3分の1が残存している。底部は平らに近く、そこから斜め上方に大きく開く。調整は、外面の底部付近までタタキを施す。

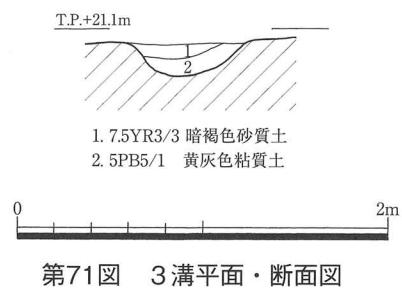
鉢（104）は底部が欠損している。口縁は外反気味に大きく開き、端部はやや角張る。体部と口縁部の界には緩やかな段を有する。体部は丸味を持ち、底部に向かって斜めに下る。

高壺（105）は脚柱部のみ残存している。壺部の付け根から裾部に向かって「ハ」の字形に斜め方向に下る。

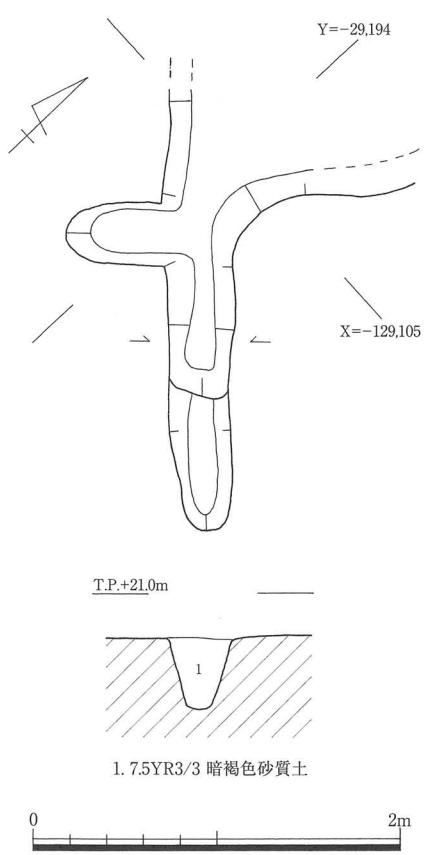
333溝（第73図）

1区北端、X = -129,170、Y = -29,135付近で検出した。南北方向の溝で、南端部で幅約0.2mを測る。北に向かって幅広くなり、北端は別の土坑と重複している。溝底部は一部深くなっている、0.1mから0.25mを測る。遺物は、手焙形土器（第74図）などが出土している。（横田）

手焙形土器（106）は、体部はほぼ完存しているが、覆上部は欠損している。底部はやや丸みを持ちやや高い。体底部は斜め方向に大きく開き、体上部の界には凸帯を巡らす。覆部は、丸みを持つ。調整は、体外面底部はタタキ、内面はハケ目。覆部外面はタタキの後ナデ消している。



第71図 3溝平面・断面図



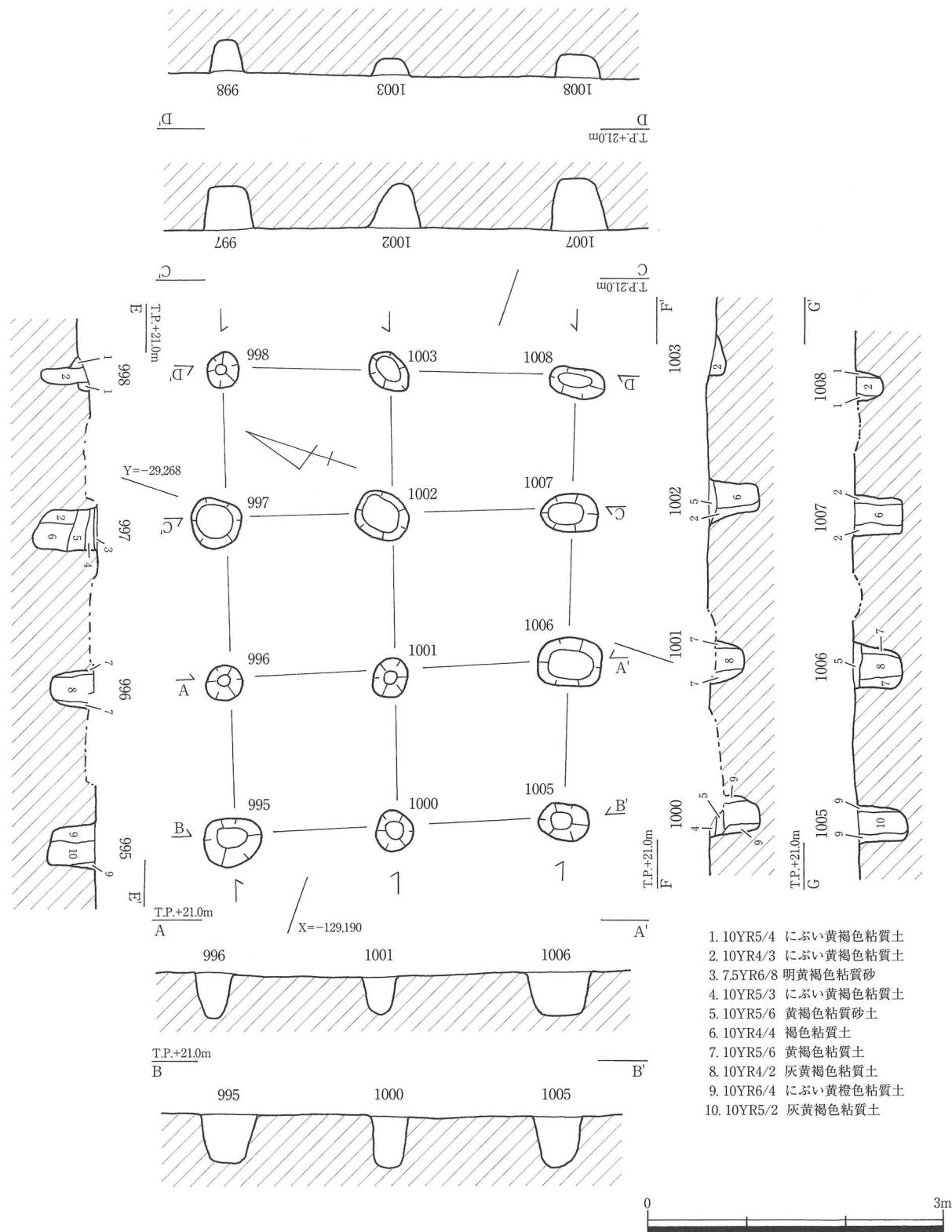
第73図 333溝平面・断面図

第4節 平安時代の遺構と遺物

1. 建物の調査

建物2（第75図、図版12）

6区北西端部、X = -129,190、Y = -29,268付近を中心に検出した、梁間2間、桁行2間の総



第75図 建物2平面・断面図

柱建物であり、東側に庇が付く。建物は、梁間約3.15m、桁行約3.5m、柱間寸法は1.35mから1.9mを測る。主軸の方向はN-71°-Eである。

柱穴は、平面形では隅丸方形ないしは隅丸長方形に近い形を呈する。柱穴の規模は、最も大きい1006柱穴で長辺約0.6m、短辺0.5m、深さ約0.5m、最も小規模な1001柱穴で長辺約0.4m、短辺約0.35m、深さ0.35mを測る。柱痕は、径0.25m前後を測る。

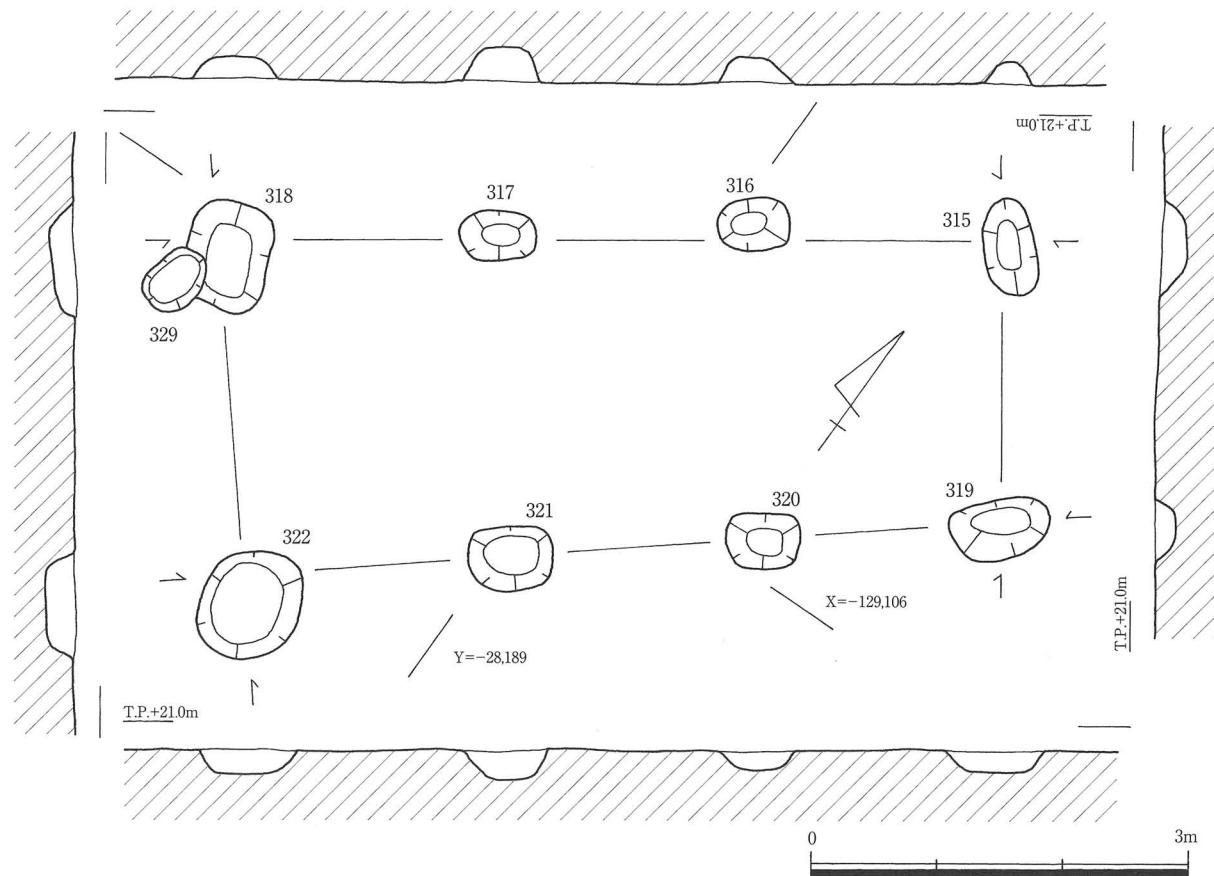
庇は、建物東側で桁行に平行して検出した。桁行と同様2間で、長さ約3.6m、柱間寸法は1.7mから1.85mを測る。柱穴は、平面形では楕円形ないしは隅丸方形に近い形を呈し、大きなもので長辺約0.6m、短辺約0.3mを測る。深さは建物に伴うものよりも浅く、0.1mから0.2mを測る。しかし998柱穴は、柱穴中央付近に柱が沈み込んだものと推定される径約0.2mの柱痕状の穴が、深さ0.5m程度落ち込んでいる。

遺物は、996・1001・1005柱穴の埋土中より土師器片が出土したが、図化できるものはなかった。

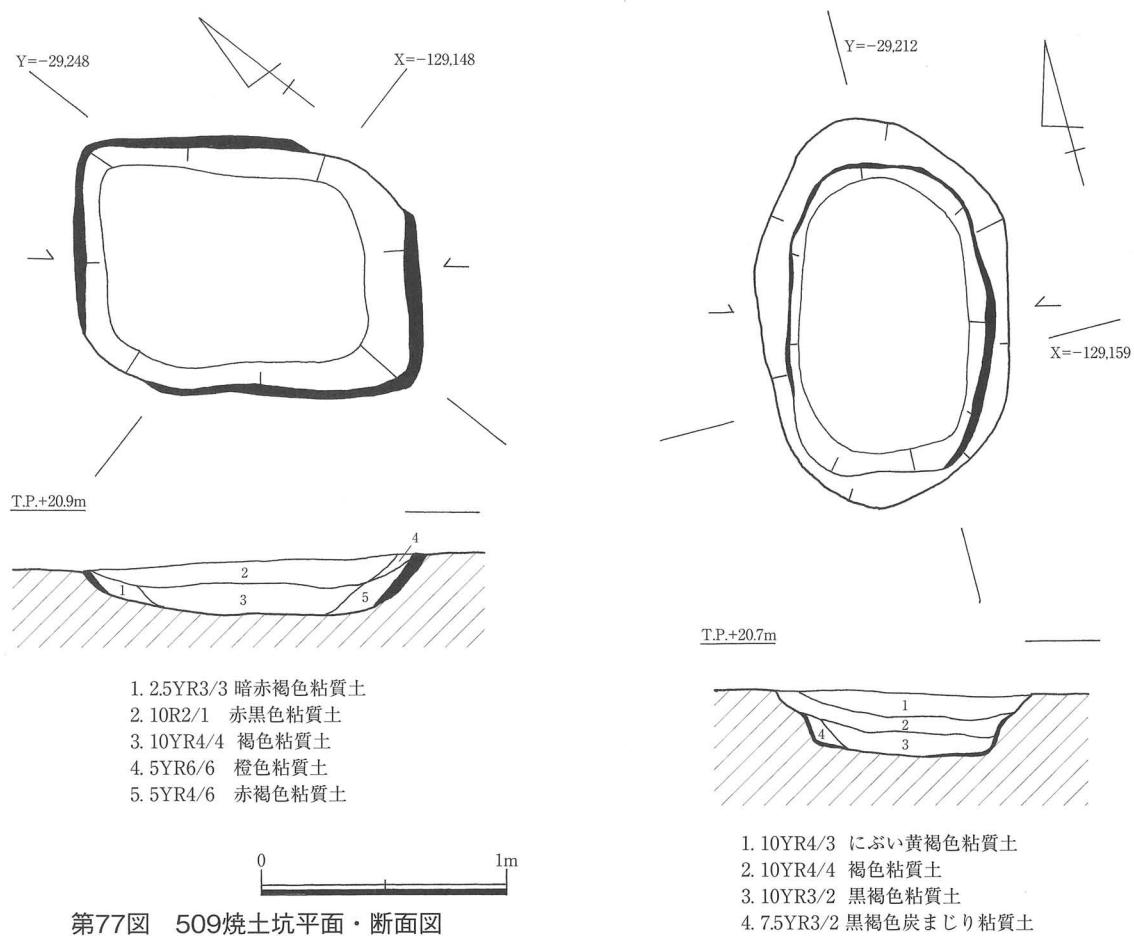
建物4（第76図、図版13-1）

3区北端中央、X=-129,106、Y=-29,189付近を中心検出した、梁間1間、桁行3間の掘立柱建物である。建物は、梁間東側が約2.2m、西側が2.6m、桁行約6.1m、柱間寸法は1.9mから2.7mを測る。

柱穴は、平面形で隅丸方形に近い形を呈し、径約0.4mから0.8mを測る。遺物は出土しなかった。
(横田)



第76図 建物4平面・断面図



2. 焼土坑の調査

509焼土坑（第77図、図版13-2・3）

4区西端、X=-129,148、Y=-29,248付近で検出した。土坑の南東角と南西角は、わずかに近代の削平を受け欠失している。平面形では隅丸長方形を呈し、長辺約1.35m、短辺約0.95m、深さ約0.2mを測る。断面の形状は「U」字形に近く、底面はフラットである。壁面は火を受け、幅0.03m前後の地山が赤褐色に変色している。遺構の埋土は、中央部分に炭・灰を多く含んだ赤黒褐色粘質土、ないしは褐色粘質土が堆積する。遺物は出土しなかった。

633焼土坑（第78図、図版13-4・5）

4区南東部、X=-129,159、Y=-29,212付近で検出した。平面形では検出面上面は橢円形に近い形を呈し、長径約1.55m、短径約1.0m、深さ約0.25mを測る。検出面から深さ約0.1m下がった付近から、隅丸長方形に近い形となり、長辺約1.2m、短辺約1.3mを測る。断面の形状は、上面から緩やかに下るが、下段から角度が急になり底面へ続く。底面はフラットに近い。下段から下の壁面は大半が火を受け、幅0.03m前後の地山が赤褐色に変色している。遺構の埋土は上層から、にぶい黄褐色粘質土、黒褐色粘質土、黒褐色炭まじり砂質土が、凹レンズ状に堆積する。遺物は出土しなかった。

889焼土坑（第79図、図版13-6・7）

6区南端中央、X=-129,222、Y=-29,233付近で検出した。土坑南側の約3分の2が、近代

の削平を受け欠失しているため不明な点が多いが、平面形では隅丸長方形に近い形を呈していると推定される。残存部分で長辺0.3m以上、短辺0.9m以上、深さ約0.2mを測る。壁面から底面の大半は火を受け、幅0.03m前後の地山が赤褐色に変色している。遺構の埋土の大半は、炭・灰を多く含んだ黒褐色粘質土が堆積する。遺物は出土しなかった。

897焼土坑（第80図、図版13-8）

6区北東側、X=-129,188、Y=-29,234付近で検出した。土坑東端は、近世の井戸によって削平を受け欠失している。平面形では円形に近い形を呈し、径約1.1m、深さ約0.3mを測る。壁面の約3分の1は火を受け、幅0.03m前後の地山が赤褐色に変色している。遺構の埋土は、炭・灰を多く含んだ土砂が堆積し、最下層には黒色炭灰層が厚さ0.05m前後堆積する。遺物は出土しなかった。

917焼土坑（第81図）

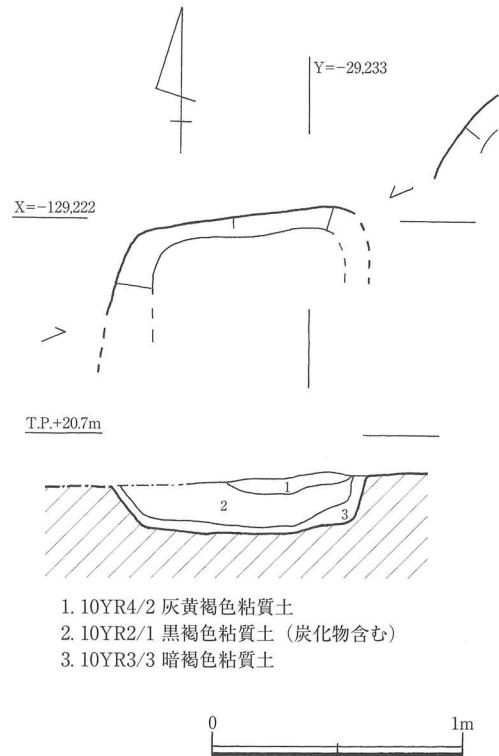
6区北東側、X=-129,180、Y=-29,250付近で検出した。土坑西側が別の土坑によって切られているため不明な点が多いが、平面形では橢円形に近い形を呈していると推定される。長径0.85m以上、短径約0.5m、深さは検出面が削平を受けており、残存部分で約0.01mを測る。遺物（第82図）は、平安時代と推定される平瓦（107）の破片が出土した。

1030焼土坑（第83図、図版13-9）

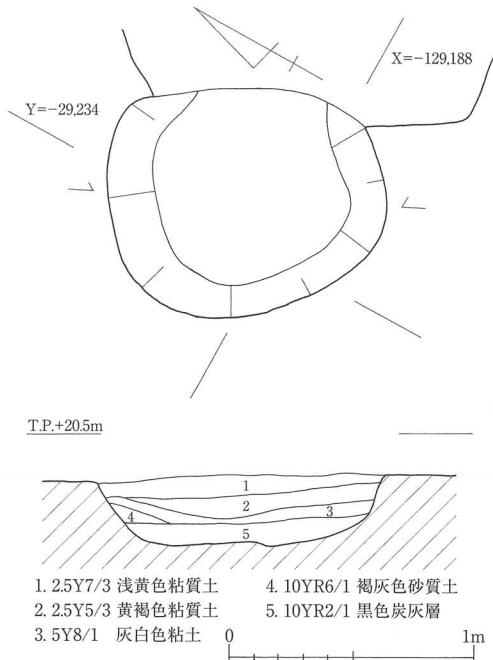
6区南東端の住居3の南西側、X=-129,221、Y=-29,231付近で検出した。土坑西側には、接するよう1031土坑が存在する。土坑南側の3分の2が近代の削平により欠失している。平面形では隅丸長方形に近い形を呈するものと推定され、長さ0.25m以上、幅0.75m、深さ約0.15mを測る。壁面は火を受け、幅0.03m前後の地山が赤褐色に変色している。遺構の埋土は、全体的に炭を多く含んだ褐色の埋土が堆積する。遺物は土師器片が極少量出土した。

1031焼土坑（第83図、図版13-10）

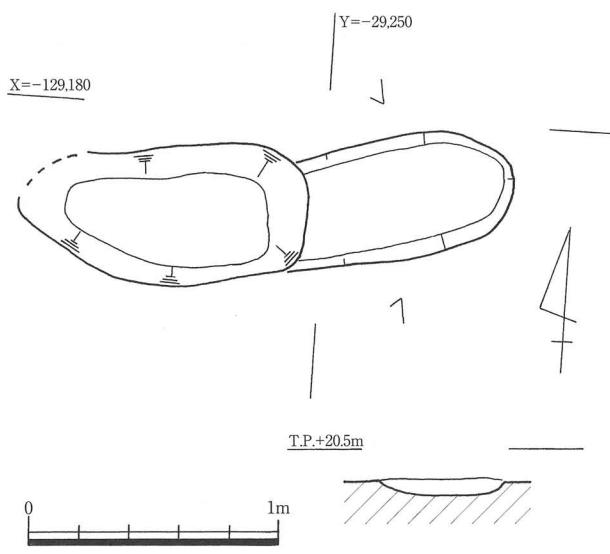
6区南東端住居3の南西側、X=-129,221、Y=-29,231付近で検出した。土坑東側には、接



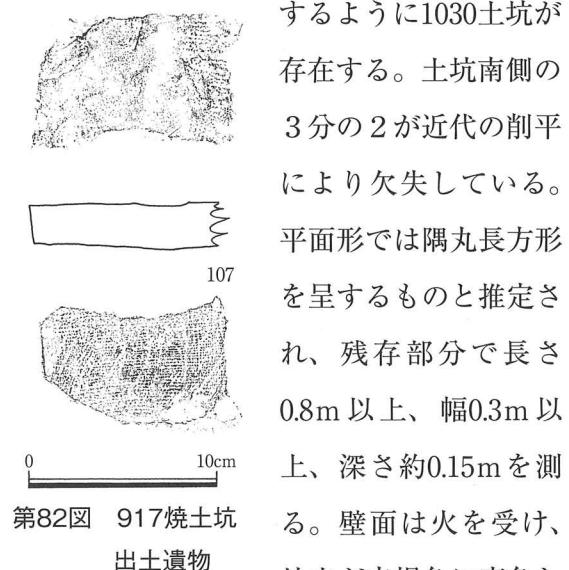
第79図 889焼土坑平面・断面図



第80図 897焼土坑平面・断面図



第81図 917焼土坑平面・断面図

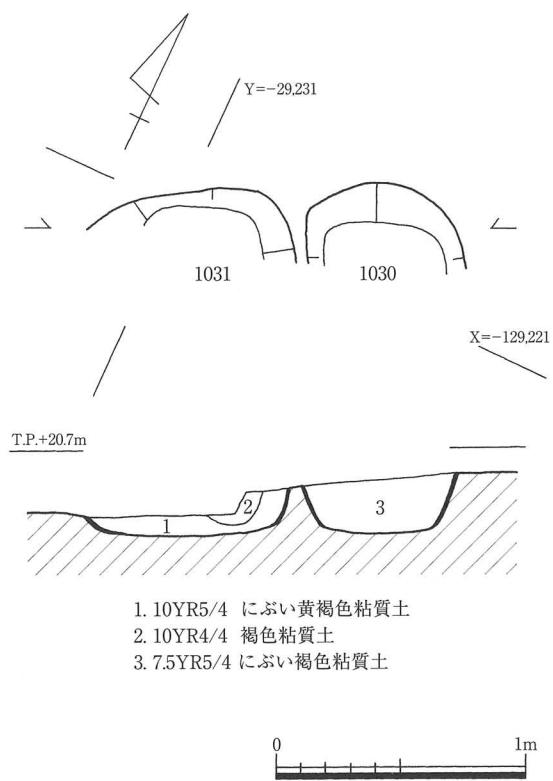


第82図 917焼土坑
出土遺物

するように1030土坑が存在する。土坑南側の3分の2が近代の削平により欠失している。平面形では隅丸長方形を呈するものと推定され、残存部分で長さ0.8m以上、幅0.3m以上、深さ約0.15mを測る。壁面は火を受け、地山が赤褐色に変色している箇所も見受けられる。遺構の埋土は、大半が炭、灰を多く含んだ褐色粘質土が堆積する。遺物は土師器小片が極少量出土した。

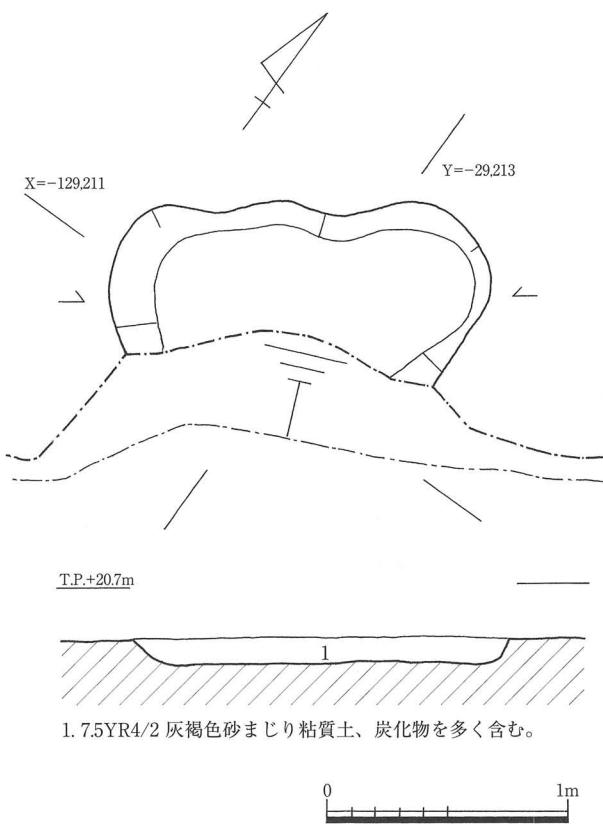
1036焼土坑（第84図）

6区南東端住居3の南東側、X=-129,211、Y=-29,213付近で検出した。土坑南側の3分の1が近代の削平により欠失している。平面形では隅丸長方形に近い形を呈するものと推定



第83図 1030・1031焼土坑平面・断面図

され、残存部分で長辺約1.5m、短辺約0.75m以上、深さ約0.1mを測る。壁面は火を受け、地山が赤褐色に変色している箇所も見受けられる。遺構の埋土は、全体的に炭、灰を多く含んだ灰褐色の埋土が堆積する。遺物は土師器小片が極少量出土した。



第84図 1036焼土坑平面・断面図

第5節 中世の遺構

1. 建物の調査

建物1（第85図、図版14-1～4）

5区北部、X=-129,132、Y=-29,195付近を中心に検出した、梁間1間、桁行3間の建物である。建物は、梁間約4.1m、桁行約4.95m、桁行の柱間は1.5mから1.65mを測る。主軸方向は、N-38°-Wである。

柱穴は、平面形では円形に近い形を呈し、径0.2mから0.3m、深さ0.3m前後を測る。

遺物は、691柱穴より瓦器椀片が極少量出土したが、細片であるため図化はできなかった。

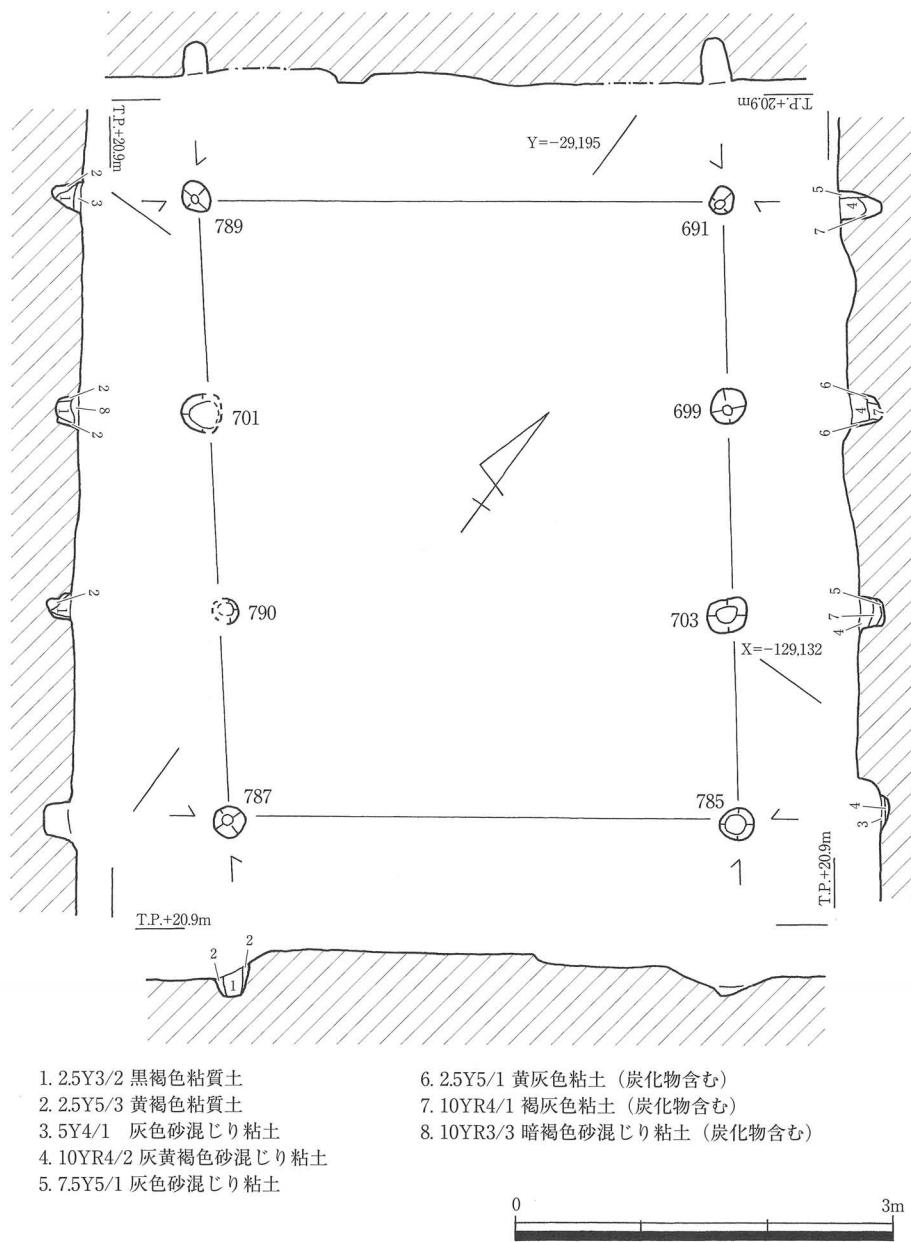
建物3（第86図、図版14-5～8）

6区北西端部、平安時代と推定される建物2の北側、X=-129,181、Y=-29,272付近を中心に検出した、梁間2間、桁行2間と推測される建物である。

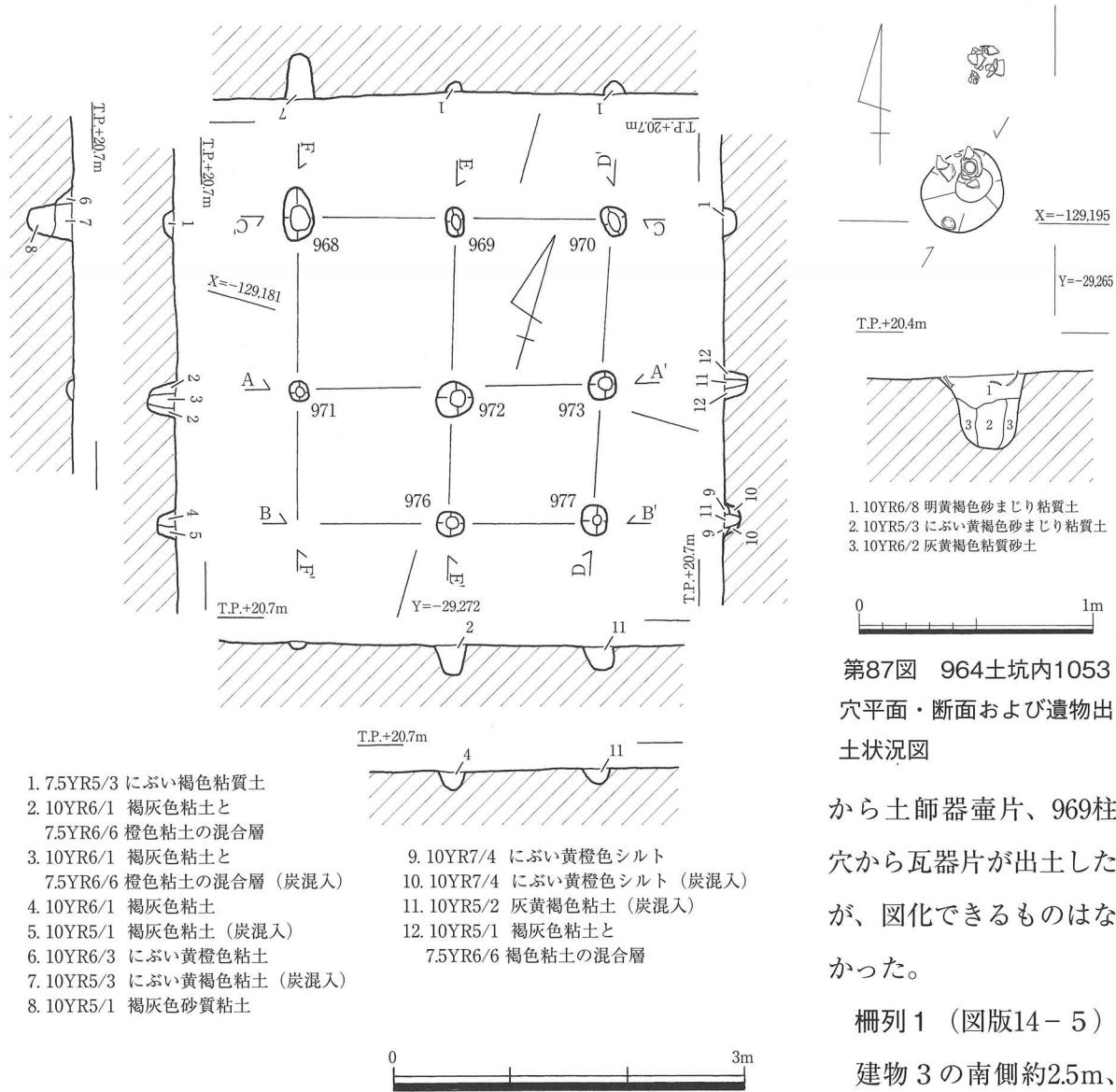
しかし、建物の角である南西端の柱穴は、検出に努めたが存在しなかった。そのため、その箇所は底であった可能性も否定できない。建物は、梁間約2.7m、桁行1.4m以上、柱間寸法は1.05mから1.35mを測る。主軸方向は、N-14°-Wである。

柱穴は、平面形では円形に近い形を呈し、径0.2mから0.3m、深さ0.1mから0.2mを測る。

遺物は、968柱穴



第85図 建物1平面・断面図



29.272付近を中心に、東西に延びる柱穴3本を検出した。長さ約3.2m、柱間は約1.6mを測る。それらの柱列は、建物3にほぼ平行に走るが建物本体と距離が離れているため、建物3に伴う柵列と推測する。

柱穴は、平面形では円形に近い形を呈し、径約0.3m、深さ約1.2mを測る。

2. 土坑の調査

964土坑（第88図、図版14-9）

6区北西側、建物2の南側、X=-129.195、Y=-29.265付近で検出した。平面形では隅丸長方形を呈し、長辺約3.5m、短辺約2.9m、深さ約0.1mを測る。底面はフラットに近く、土坑底部中央やや西側付近に1053穴が存在する。

1053穴は、平面形では円形に近い形を呈し、径約0.4m、深さ約0.3mを測る。径約0.2mの柱痕が、土層観察の結果認められた。しかし、周辺にこの穴と一体をなす柱穴は確認できなかったことから、単独で存在し、土坑に伴う穴と推測する。用途は不明である。

から土師器壺片、969柱穴から瓦器片が出土したが、図化できるものはなかった。

柵列1（図版14-5）

建物3の南側約2.5m、

X=-129.181、Y=-

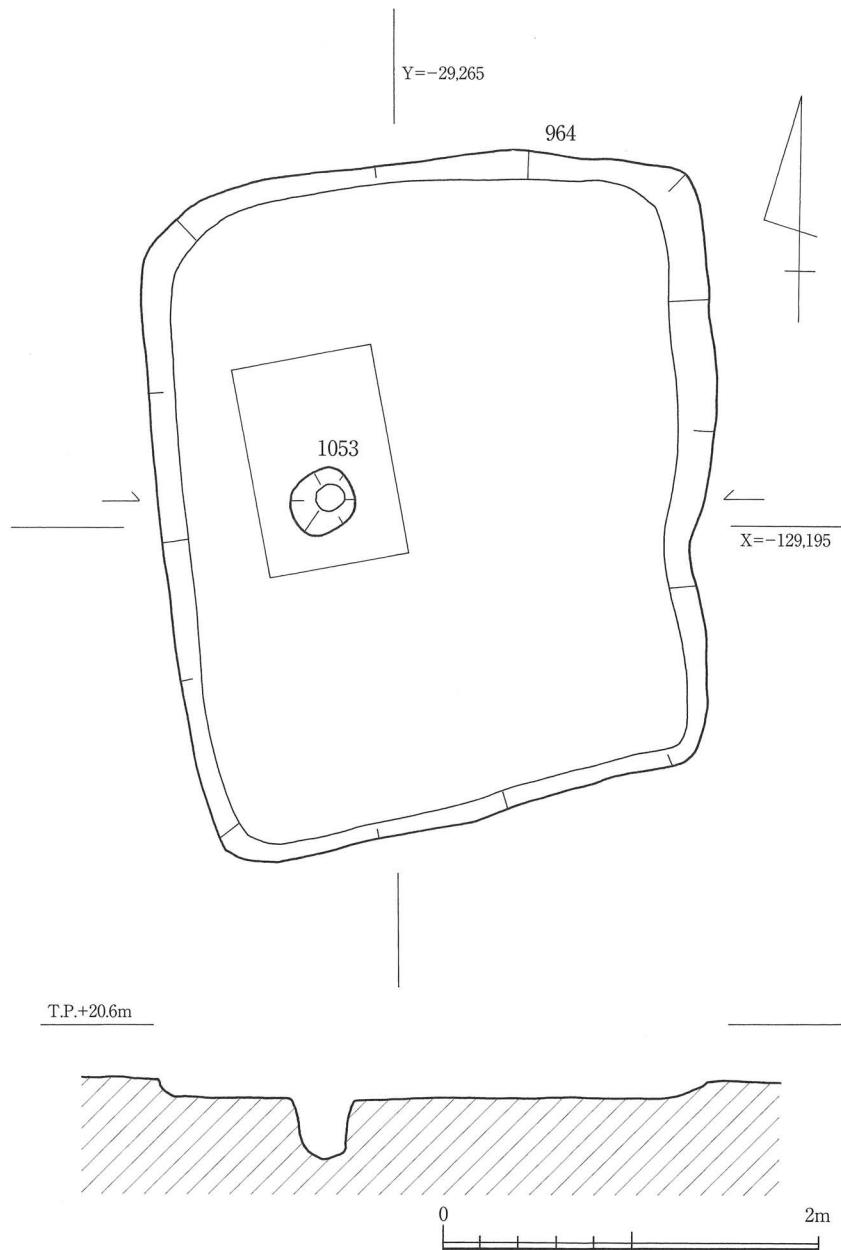
遺物は、1053穴周辺の土坑埋土下層より瓦器椀、土師器皿、土師器小皿などが集中して出土した（第87図、図版14-10）。

108から112は瓦器椀である。108から110は口縁部から体部が残存している。口縁部から体底部にかけて内弯し、斜めに下る。口縁部は丸みを持つ。調整は表面剥離のためほぼ不明であるが、口縁部付近の外面はヨコナデと推定される。111と112は高台部が残存し、高台は断面三角形に近く短い。調整は表面剥離のため不明である。

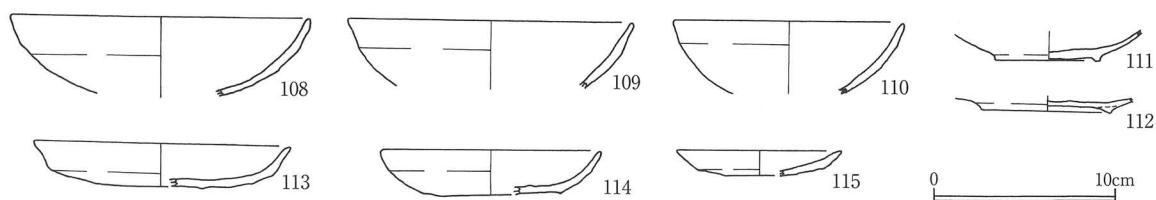
113と114は土師器皿である。113はやや丸みを持つ底部で、口縁部はそこから斜め上方に延び

る。調整は、表面剥離のため不明。114は平らに近い底部を持ち、口縁は内弯気味に斜め上方に延びる。調整は、表面剥離のため不明である。

115は土師器小皿である。底部はやや丸みを持ち、口縁部はそこから斜め上方に延びる。調整は、表面剥離のため不明である。



第88図 964土坑平面・断面図



第89図 964土坑出土遺物

第4章 調査成果の検討

第1節 招提中町遺跡で検出した平安時代の建物について

1・2・3次にわたる招提中町遺跡の調査で検出した建物は総数43棟を数える。出土遺物、柱穴の形状、建物の方向などから時期は、おおまかに奈良時代、平安時代、中世の3時期に分けることが出来る。その中でもっとも数の多い平安時代と推定される建物は47棟であるが、Ⅲ次の調査区は、多数検出された2・3次の調査区より北側に位置しており、その時代の建物は2棟と少ない。これら検出した平安時代の建物について検討を行い若干の考察を加えたい。

建物は、1次調査地区で検出した弥生時代中期の方形周溝墓と重ね合わせると、一部を除き方形周溝墓を避けて造営されていることが伺える。建物の柱穴は、周溝までは達しているものの、I 20建物を除き、墳丘までは達していない。遺物も大半の方形周溝墓の周溝から平安時代のものが上層から出土しており、完全には埋まりきってはいなかったことがわかる。

平安時代と推定される建物は、梁間・桁行の軸方向、柱穴の形状、建物の立地の面などから、下記のように10群に分類できよう。

< A群 > 軸方向が、N - 83° ~ 86° - EないしはN - 1° ~ 7° - Wを測る建物の一群で、I 1・I 2・I 3・I 4・I 6・I 11・I 19・I 20・I 22・II 23・II 24・II 25・II 26・II 27・II 28・II 29・II 37・II 39・II 40の19棟が該当する。検出した建物の中で最も多い一群である。

A群の建物は、I期調査区の北側からII期6区・5区・4区調査区へと続く。方向から言えば、調査地区中央付近の北西方向から南西方向にかけて存在する。これらは、建物の配列状況、同じ軸方向の建物が存在しない空閑地のあり方などから、4グループに分けることが出来る。

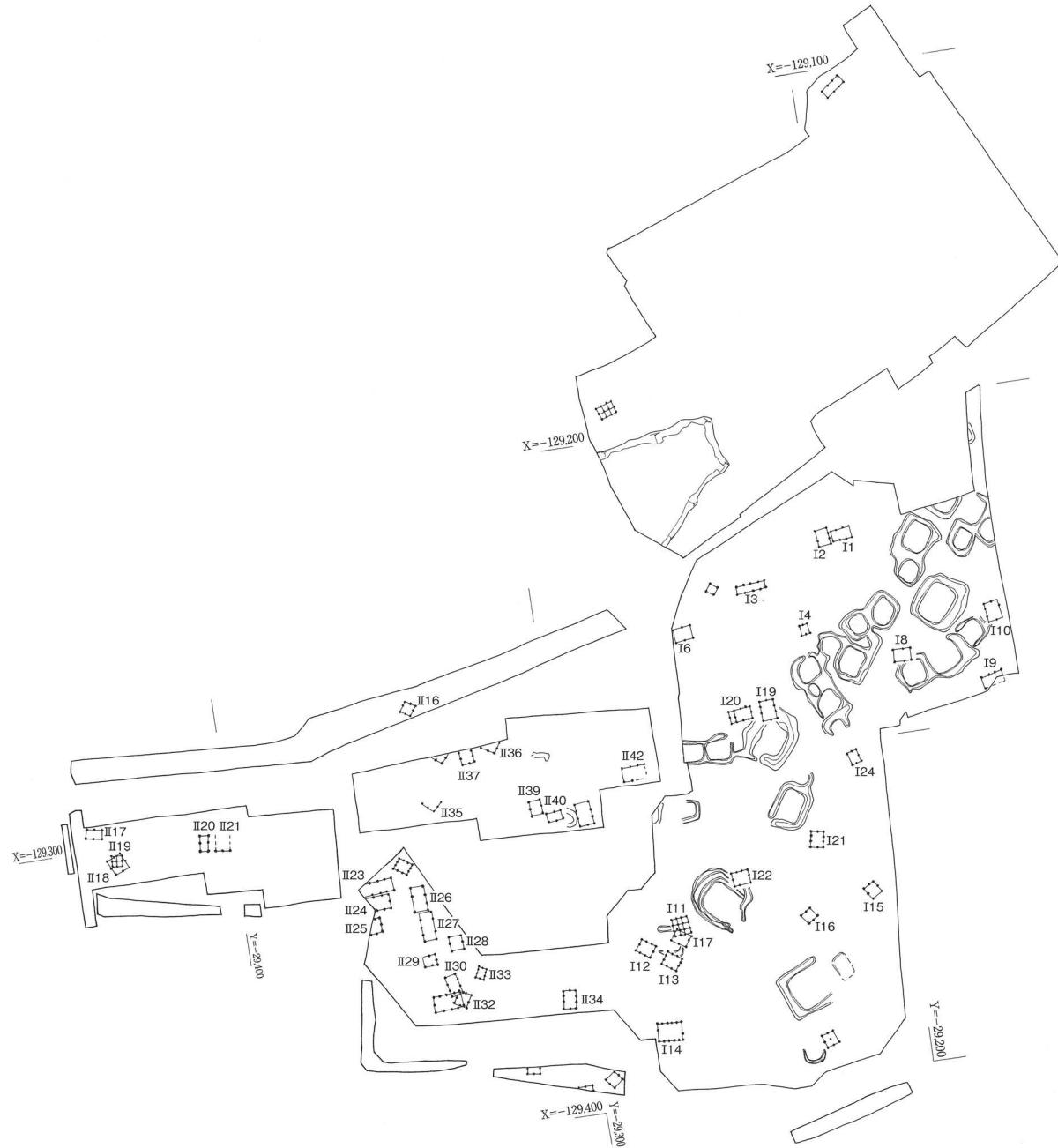
1グループは、I期調査区の北側に存在し、I 1・I 2・I 3・I 4・I 6・I 19・I 20の7棟が該当する。そのうちI 1・I 2 (a) と I 19・I 20 (b) は、近接し、お互いに軸方向が約90°異なることから、2棟でひとつの単位を形成しているものと推察される。

2グループは、II期5区・6区に存在し、1グループの端より空閑地を挟み、南西側に約20m、3グループの端より空閑地を挟み、北東側に約20m離れて存在する。II 37・II 39・II 40の3棟が該当する。そのうちII 39・II 40 (c) は近接し、お互いに軸方向が約90°異なることから、2棟でひとつの単位を形成しているものと推察される。

3グループは、II期4区の北西側、2グループの端より空閑地を挟み、南西側に約20m離れて存在する。II 23・II 24・II 25・II 26・II 27・II 28・II 29の7棟が該当する。

軸方向はほぼ同じであるが、II期4区に存在する一群のうち、II 23、II 24は切り合い、切り合の関係からII 23が古い。II 26、II 27は切りあわないものの、軸方向が同じで接して存在していることから、これらは同時並存でない可能性が高く、若干時期が異なるものと考えている。

建物の配列状況から、II 23・II 25 (d) と II 26・II 28 (e) およびII 27・II 29 (f) がひとつ



第90図 掘立柱建物配置図

の単位を形成しているものと推定される。3グループに属する建物の床面積うち、II 23の約36m²、II 26の約42m²、II 27の32m²を測る。第3グループの建物は、I 14の約38m²を除き、他の建物の床面積が約7m²から28m²であることから、大きな建物の一群であることがいえよう。周辺に区画溝などの屋敷地を区画する遺構は検出されていないが、建物の配列状況から、ひとつの屋敷地を形成していたものと推察される。

4グループは、1グループの南端より南側へ約20m、2グループの南東端より南東側へ約20m付近に存在し、I 11・I 22(1)の2棟からなる。I 11は総柱建物で、方形周溝墓の墳丘を挟み約10m離れているが周辺の状況から、I 22とひとつの単位をなすものと推定される。

<B群> 軸方向がN-35°～36°-EないしはN-53°～57°-Wを指す建物の一群で、I期

調査 時期	建物 番号	規模(間) 梁間×桁行	梁間 (m)	桁行 (m)	床面積 (m ²)	グル ープ	単位	桁行角度	梁間角度	備考
I	1	2×3	3.4・3.9	5.6	20	A	a	N-85°-E	N-6°-W	
I	2	2×3	3.1・3.4	5.3	17	A	a	N-8°-W	N-81°-E	
I	3	1×4	2.1	9.0	19	A		N-84°-E	N-5°-W	
I	4	1×2	3.0	2.3	7	A		N-5°-W	N-81°-E	
I	6	1×2	2.4	2.7	6.5	A		N-83°-E	N-5°-W	
I	8	2×2	3.9	5.0	20.0			N-89°-W	N-1°-E	
I	9	2×3	3.6	6.4	23.0	D		N-74°-E	N-14°-W	
I	10	2×3	4.3	5.6・5.8	24.0			N-10°-W	N-78°-E	
I	11	3×3	4.5	5.1	23.0	A	I	N-7°-W	N-85°-E	総柱
I	12	2×3	3.9	4.5	18.0	B	g	N-53°-W	N-36°-E	
I	13	3×3	3.8・4.1	5.2	21.0	B	g	N-54°-W	N-36°-E	
I	14	3×5	5.4	7.1	38.0	C		N-85°-W	N-4°-E	総柱
I	15	2×2	3.8	4.0	15.0	F	k	N-59°-E	N-31°-W	
I	16	1×2	3.3	3.5	12.0	F	k	N-56°-E	N-35°-W	
I	17	2×2	3.9	4.5	18.0	B	g	N-57°-W	N-35°-E	
I	18	2以上×5以上	3.9以上	8.2以上	32.0以上	F		N-52°-E	N-36°-W	
I	19	2×3	4.4	6.0	26.5	A	b	N-6°-W	N-86°-E	
I	20	2×3	3.6	5.1	26.5	A	b	N-84°-E	N-5°-W	
I	21	2×3	3.9	4.8	19.0	G		N-11°-E	N-79°-W	
I	22	2×3	3.9	5.1	20.0	A	I	N-86°-E	N-4°-W	
I	24					D		N-15°-W	N-76°-E	
I	24	2×2	3.1	3.6	11.0	D		N-12°-W	N-76°-E	
II	17	2×2	3.0	4.7・4.9	14.0	G		N-78°-W	N-12°-E	
II	18	2×2	4.8	4.9	24.0			N-23°-W	N-67°-E	
II	19	2×2	3.2	3.2	10.2	C	h	N-1°-E	N-89°-W	総柱
II	20	1×2	2.2	4.6	10.0	C	h	N-8°-E	N-83°-W	
II	22	3×3	3.3	4.7		B		N-52°-W		棟持柱
II	23	2×3	3.9	9.0	36.0	A	d	N-84°-E	N-3°-W	
II	24	2×3以上	5.0	7.0以上	—	A		N-86°-E	N-2°-W	
II	25	2×2以上	4.5	—	—	A	d	N-83°-E	N-1°-W	
II	26	2×3	4.4	7.6・7.5	42.0	A	e	N-2°-W	N-88°-E	
II	27	2×4	3.9	8.3	32.0	A	f	N-2°-W	N-85°-E	総柱・庇
II	28	2×2	3.9	4.1	16.0	A	e	N-4°-W	N-87°-E	
II	29	2×2	3.0	4.0	12.0	A	f	N-87°-E	N-4°-W	
II	30	2×3	3.2・3.4	6.1	20.0	D		N-14°-W	N-77°-E	
II	32	2×3	3.8	4.0	15.2	E	j	N-28°-E	N-63°-W	
II	33	2×2	3.8	4.0	15.0	E	j	N-23°-E	N-65°-W	
II	34	2×3	3.8	5.3	20.0	C	i	N-8°-E	N-83°-W	
II	35	2×3	3.4	4.4	15.0			N-47°-W	N-43°-E	
II	37	2×2以上	3.2	3.7以上	—	A		N-7°-W	N-83°-E	
II	38	2×3	3.2	4.3	14.0	J	m	N-61°-W	N-31°-E	
II	39	2×2	3.5	4.4	15	A	c	N-5°-W	N-84°-E	
II	40	1×2	2.5・2.6	4.7	12	A	c	N-83°-E	N-7°-W	
II	42	2×3	4.0	7.0	28.0	H		N-88°-E	N-2°-W	
II	43	2×1以上	3.8	1.6以上	—	C	i	N-84°-E	N-4°-W	総柱
II	44	2×1以上	2.3	1.9以上	—	H		N-90°-E	N-1°-W	
II	45	1×2以上	3.4	3.6	12.0	I		N-38°-W	N-52°-E	
III	2	2×2	3.2	3.5	11.0	D		N-71°-E	N-17°-W	総柱・庇
III	4	2×2	2.6	6.1	15.9	I		N-54°-E	N-34°-W	

表1 招提中町遺跡古代建物計測値表

の南西側に I 12・I 13・I 17 (g) の 3 棟が軒を並べて集中して検出されている。これ以外には、今回の調査において同軸方向の建物は存在しない。

<C群> 軸方向が N - 1° ~ 8° - E ないしは N - 83° ~ 89° - W を指す建物の一群で、 I 14・II 19・II 20・II 34・II 43 の 4 棟が該当する。

これらは、建物の配列状況から 2 グループに分けることが出来る。1 グループは I 期の南西側、II 期 4 区の東側、II 期 9 区にかけて存在し、I 14・II 34・II 43 の 3 棟が該当する。特に I 14 は、この一群の中では床面積が 38m² とずば抜けて大きい。また、建物群の中央付近が未調査地となっていることから、この周辺に同軸方向の建物が存在する可能性が高い。

2 グループは II 期 3 区に存在し、II 19・II 20 が該当する。II 19 は総柱建物で、2 棟の距離が約 19m と離れているが、配列状況からひとつの単位をなすものと推察される。

<D群> 軸方向が N - 74° ~ 77° - E ないしは N - 12° ~ 17° - W を指す建物の一群で、I 9・I 24・II 30・III 2 の 4 棟が該当する。I 9 は I 期中央東側、I 24 は I 期中央付近、II 30 は II 期 4 区中央、III 2 は III 期西側と調査区域に点在し、グループないしは単位を構成するものはない。これ以外には、今回の調査において同軸方向の建物は存在しない。

<E群> 軸方向が N - 23° ~ 28° - E ないしは N - 63° ~ 65° - W を指す建物の一群で、II 期 4 区中央付近の II 32・II 33 (j) の 2 棟が該当する。建物は北東から南東方向に軒を並べて検出されている。配列状況から 2 棟がひとつの単位をなすものと推察される。これ以外には、今回の調査において同軸方向の建物は存在しない。

<F群> 軸方向が N - 52° ~ 59° - E ないしは N - 31° ~ 36° - W を指す建物の一群で、I 15・I 16・I 18 が該当する。そのうち I 期南東付近の I 15・I 16 (k) の 2 棟は、配列状況からひとつの単位をなすものと推察される。これ以外には、今回の調査において同軸方向の建物は存在しない。

<G群> 軸方向が N - 11° ~ 12° - E ないしは N - 78° ~ 79° - W を指す建物の一群で、I 21・II 17 の 2 棟が該当する。I 21 は I 期中央よりやや南側、II 17 は 3 区の西端に点在し、グループないしは単位を構成するものはない。これ以外には、今回の調査において同軸方向の建物は存在しない。

<H群> 軸方向が N - 88° ~ 90° - E ないしは N - 1° ~ 2° - W を指す建物の一群で、II 42・II 44 の 2 棟が該当する。II 42 は II 期 6 区の東側、II 44 は II 期 9 区に点在しており、グループないしは単位を構成してはいない。これ以外には、今回の調査において同軸方向の建物は存在しない。

<I群> 軸方向が N - 52° ~ 54° - E ないしは N - 34° ~ 38° - W を指す建物の一群で、II 45・III 4 の 2 棟が該当する。II 45 は II 期 9 区、III 4 は III 期北東側に点在し、グループないしは単位を構成するものはない。これ以外には、今回の調査において同軸方向の建物は存在しない。

<J群> 軸方向が N - 31° ~ 33° - E ないしは N - 59° ~ 61° - W を指す建物の一群で、II 16・II 38 の 2 棟が該当する。II 16 は II 期 2 区の中央付近、II 38 は II 期 6 区の中央北側に存在する。

2棟の距離は約12mとやや離れているが、軸方向がほぼ直線的に並ぶことから、ひとつの単位を構成している可能性が高い。これ以外には、今回の調査において同軸方向の建物は存在していない。

以上のように平安時代と推定される建物の群構成を軸方向によって10群に分類した。これらはいくつかのグループを形成するもの（A群・C群・F群・J群）。2棟ないしは3棟で単位を形成するもの（B群・E群）。散在しているもの（D群・G群・H群・I群）などに大きく分けることができる。

しかし、建物の柱穴からの遺物が少ないため個々の時期を特定するには至らなかった。ただ方形周溝墓の周溝上層から出土した遺物からI19建物を9世紀後半に比定されていることから、仮に同軸方向のものがほぼ同時期であるとすると、A群は9世紀後半代といえる。

当遺跡の西側に位置する九頭神遺跡周辺で検出された建物は、奈良時代のものが大半を占めており、配列状況から官衙的性格を持つものと考えられている。それに対し、招提中町遺跡で検出された奈良時代の建物は2棟であり、極めて少ない。

平安時代になると遺構は、九頭神遺跡では検出さず、それに対し招提中町遺跡では、平安時代に比定される建物群は48棟であり、急激に増加する。このことから『九頭神遺跡と招提中町遺跡はその消長が連動している可能性が高く、おそらく一体をなすものであろう。』ということが指摘されている。この中でもA群は、九頭神遺跡に続く時期の建物群であるといえる。

第2節 招提中町遺跡で検出した古墳時代前期の竪穴住居跡について

はじめに

3次にわたる招提中町遺跡の調査で検出した竪穴住居跡は、総数40棟を数える。出土遺物、竪穴住居跡の形状などから時期は、おおまかに弥生時代中期（5棟）、古墳時代前期（28棟）、古墳時代中期（5棟）、飛鳥時代（3棟）の4時期に分けることが出来る。その中でもっとも数の多く検出した古墳時代前期と推定されるものは27棟を数える。

竪穴住居跡の分布状況は、第1次調査区域で検出した弥生時代中期の方形周溝墓と重ね合わせると、一部を除き方形周溝墓を避けて造営され、周溝内から出土した遺物も古墳時代前期の遺物が含まれていることから、方形周溝墓が削平されず残っていたものと思われる。

これら最も多く検出した古墳時代前期の竪穴住居跡の有り方について検討を行い、若干の考察を加えたい。

平面的特徴について

竪穴住居跡の全般的な特徴は、平面形では全て隅丸方形に近い形を示している、

竪穴住居跡には柱穴を持たないものが総数28棟の内12棟存在する。

Ⅲ2・Ⅲ6・I2・I5・Ⅱ13・I8・I12・I11・I13・I15・I18・I19

内部施設にベッド状遺構を持つものが総数28棟の内7棟検出した。

Ⅲ1・Ⅲ2・Ⅲ5・I1・I7・I8・I12・I11・I13

住居跡のほぼ中央に土坑を持つものを22棟の内14棟確認している。

I1・I2・I3・I5・I6・I7・I11・I12・I13・I14・I15・I18・Ⅱ8・Ⅲ3

Ⅲ6

住居跡の四辺の内一辺の中央付近に土坑を持つもの（壁際土坑）が22棟の内19棟確認している。

これら検出した土坑は、南辺のほぼ中央付近に存在する。

I1・I3・I4・I6・I7・I12・I11・I13・I15・I18・I19・Ⅱ8・Ⅱ11・

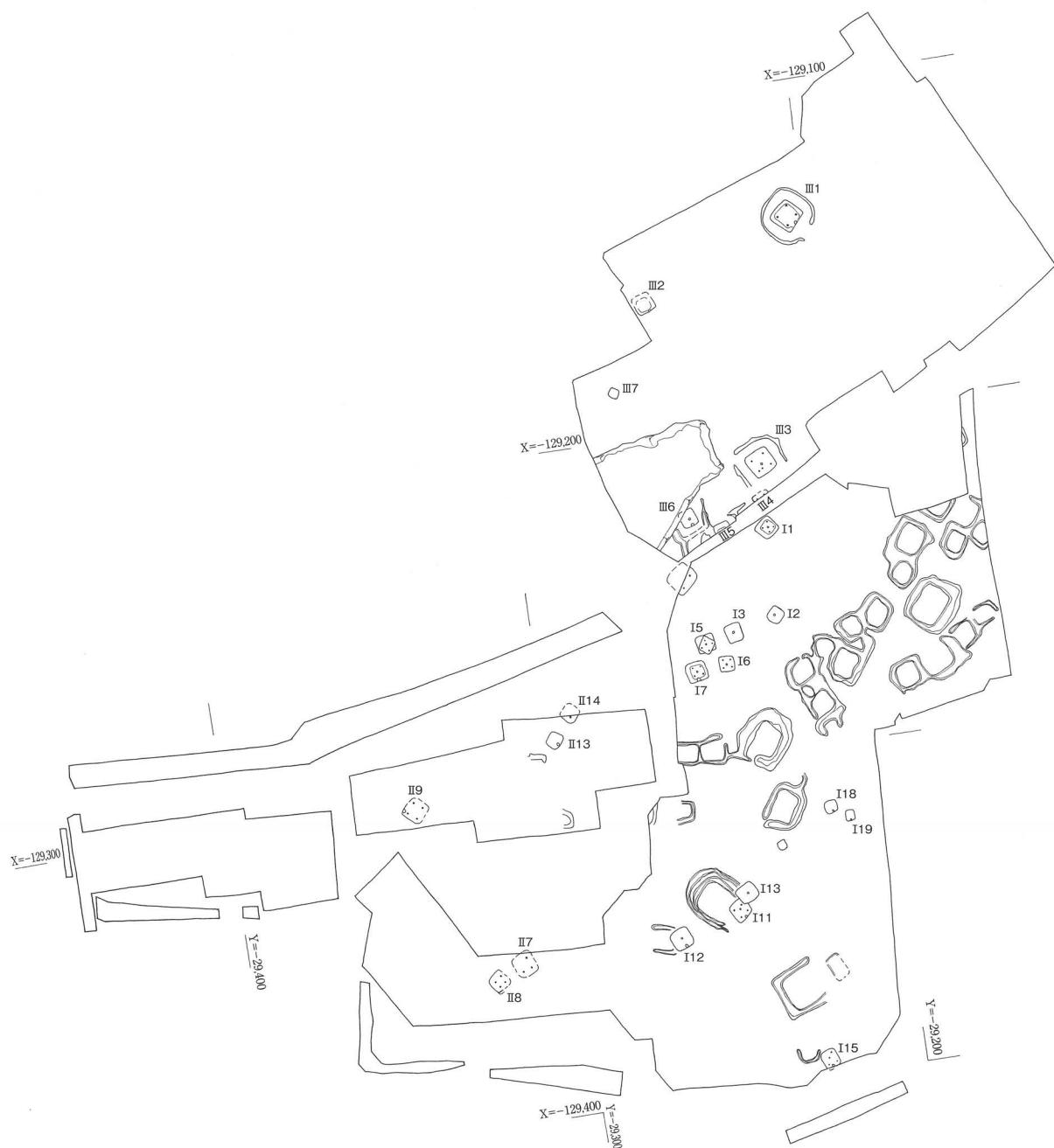
Ⅱ13・Ⅱ14・Ⅲ1・Ⅲ2・Ⅲ3・Ⅲ6

住居跡の外部施設として、外周溝、外周土坑を持つものが存在する。

I8・Ⅲ1・Ⅲ2・Ⅲ3・Ⅲ4・Ⅲ5・Ⅲ6

住居跡の規模について

今回の調査で検出した住居跡は、総数28棟を数えるが、住居跡の規模は様々である。最も床面積が大きいものは、I8住居の約65.6m²、最も床面積が小さいものはI19住居の約8.4m²と大きな差異が認められる。これらを規模別に下記のように大、中1、中2、小1、小2の5種類に分けた。これらから中2としたものが最も多く10棟を数え、次に中1（5棟）、小1と小2がそれぞれ4棟、大の3棟の順となる。



第91図 穂穴住居配置図

大 (60m²前後) III 1 · III 3 · I 8

中₁ (40m²前後) II 7 · I 7 · I 12 · II 9 · II 10

中₂ (30m²前後) III 2 · III 4 · III 5 · III 6 · I 1 · I 3 · I 5 · I 11 · I 13 · I 15

小₁ (20m²前後) II 8 · I 2 · I 4 · I 6

小₂ (15m²以下) III 7 · II 13 · I 18 · I 19

住居跡の軸方向について

出土した遺物から古墳時代前期の個々の住居跡の時期を特定しようと試みたが、出土遺物の量が少なく、土器の形態も極めて似ていたため、遺物から前後関係をつかむには至らなかった。そこで住居跡の東西、南北の各辺の軸方向によって何らかの方向性が掴めるのではないかと推定した。

調査 時期	住居 番号	東西 (m)	南北 (m)	床面積 (m ²)	住居角度 (-E)	住居角度 (-W)	グル ープ	ベッド	柱穴 なし	中央 土坑	壁際 土坑	備考
I	1	5.7	5.4	30.8	46°	44°	A	●		●	●	
I	2	4.7	4.5	21.2	45°	50°	A		●	●		
I	3	5.3	5.3	28.1	74°	16°	B			●	●	
I	4	4.3	4.4	18.9	32°	57°	E				●	
I	5	5.3	5.2	27.6	83°	8°	F			●	●	
I	6	4.4	4.5	19.8	1°	88°	F			●	●	
I	7	6.3	5.8	36.5	84°	4°	F	●		●	●	
I	8	8.1	—	65.6	52°	36°	C	●	●	—		
I	11	5.7	5.6	31.9	54°	33°	C		●	●		
I	12	5.8	6.2	36.0	66°	26°	D	●	●	●	●	
I	13	6.2	5.1	31.6	60°	33°	C		●	●		
I	15	5.2	—	27.0	57°	33°	C		●	●	●	
I	18	3.4	3.8	12.5	71°	19°	B		●	●	●	
I	19	2.9	2.9	8.4	2°	89°	F		●		●	
I	20	2.5	2.5	6.3	73°	19°	B					
II	6	—	—	—	42°	47°	A					
II	7	—	6.5	42.3	63°	27°	D					
II	8	4.5	—	(20.3)	50°	39°	A			●	●	
II	9	6.2	6.0	37.2	37°	54°	E				●	
II	13	4.0	—	(16.0)	31°	56°	E		●		—	
II	14	—	—	—	41°	54°	E			—	—	
II	15	—	—	—	69°	22°	D			—	—	
III	1	8.0	7.6	60.8	46°	44°	A	●			●	
III	2	5.25	5.5	28.9	68°	23°	D	●	●		●	
III	3	8.2	7.2	59.04	64°	27°	D			●	●	
III	4	5.2	—	(27.0)	64°	24°	D			—	—	
III	5	5.3	—	(28.1)	76°	15°	B	●		—	—	
III	6	5.1	—	(26.0)	68°	23°	D		●	●	●	
III	7	3.2	3.4	10.9	38°	54°	E					

表2 招提中町遺跡古墳時代前期住居主軸表

検出した住居跡は、軸方向によって下記のようにおおまかに6群に分類できよう。しかし、一群の一群にも属さないものも5棟存在する。

<A群> 南北軸方向が、N-42°～50°-E、東西軸方向がN-44°～50°-Wを測る一群で、I 1・I 2・II 6・II 8・III 1の5棟が該当する。この中には、3次調査区の北東側に最大規模の住居跡（III 1）が存在する。

<B群> 南北軸方向が、N-71°～76°-E、東西軸方向が、N-15°～19°-Wを測る住居跡の一群で、I 3・I 18・I 20・III 5の4棟が該当する。大規模な住居は検出されず、I 3・III 5（中2）、I 18・I 20（小2）の4棟が、1次調査区南端から3次調査区にかけて散在する。

<C群> 南北軸方向が、N-52°～60°-E、東西軸方向が、N-33°～36°-Wを測る住居跡の一群で、I 8・I 11・I 13・I 15・II 14の4棟が該当する。この中には、1次調査区の北東西側に調査区域最大の住居跡（II 8）が存在する。最大の住居跡（II 8）が1次調査区西北端、

他は弥生時代方形周溝墓群を挟み南側に存在する。この中で I 11・I 13は、ほぼ同一地点で切りあって存在することから建て替えられたものであろう。

＜D群＞ 南北軸方向が、N-64°～68°-E、東西軸方向が、N-22°～27°-Wを測る住居跡の一群で、I 12・II 7・II 15・III 2・III 3・III 4・III 6の7棟が該当する。この中には、3次調査区の南西側に最大規模の住居跡（III 1）が存在する。これらは、3次調査区西側と1次調査区、2次調査区の南側に分布している

＜E群＞ 南北軸方向が、N-31°～41°-E、東西軸方向が、N-54°～56°-Wを測る住居跡の一群で、I 4・II 9・II 13・II 14・III 7の5棟が該当する。これらは、1次調査区の北西側に1棟、2次調査区の0区に3棟分布しており、離れて3次調査区の西側に1棟存在する。

＜F群＞ 南北軸方向が、N-83°～2°-E、東西軸方向が、N-4°～89°-Wを測る住居跡の一群で、I 5・I 6・I 7・I 19の4棟が該当する。3棟が1次調査区の北西側に集中し、後の1棟が弥生時代中期の方形周溝墓群を挟んで南東側にある。

ほぼ同時期の集落跡の全域を調査したわけではないが、これら6群中のA・C・Dの3群に、床面積が60m²前後を測る大型住居が存在する。群の中での位置関係は、遠く離れて存在するもの（III 1・I 8）。群内の他の住居と近接しているが、群の端に位置している（III 3）。など群中心から離れて存在している。また、住居跡3棟の内2棟が、住居を巡る外周溝を持っている。これらのことからグループ内で特殊な機能をもった住居であったものと考えている。やや規模は小さくなるが、DグループにはII 7（約42.3m²）があり、これも離れて存在する。

しかし、住居内および外周溝から出土した遺物は、住居の用途に関する特殊なものは出土せず、一般の住居からのものとほとんど変わらない。また、住居内の構造についても規模の大小はあるもののほとんど変わらなかった。

現在の所、これら大型住居の機能として、首長の住居、祭祀を司る場所などを想定している。しかし、規模が大きいこと、位置関係のみで、大型住居の用途を考えるのは困難である。今後の調査によってこのような類例が増え、用途に伴う遺構・遺物が出土することによって、今後の調査、研究が進むことを期待したい。その中で官衙的性格を持つと考えられる建物群は、建物の配置、規模などからA群3グループとした一群である。官衙的性格を持つと考えられる建物群は、全域が調査されているわけではないが、九頭神遺跡が東西約80m、南北約70mであるのに対し、A群3グループは東西約30m、南北約30mと狭い。周辺の調査区の遺構の検出状況から規模は、あまり大きくはならないと推定され、規模が縮小する傾向が認められる。これ以外に考えられるのは、C群1グループであるが、I 14建物の床面積が約38m²と大きいが、中央付近が未調査地区であることから不明な点が多い。

A群以外は9世紀後半以降である可能性が高く、48棟もの建物を検出しているものの、建物の軸方向によって時期が異なるとすれば、A群以降C群を除き、招提中町遺跡周辺の平安時代は、散村といった状況を醸し出しているものではないかと推察される。

第5章　まとめ

1. 概要

大阪府営住宅牧野東住宅建て替えに伴う招提中町遺跡の発掘調査は、平成10年度から調査期間約6年をかけ、3次にわたって続けられ平成16年度に終了した。調査総面積は、約33,986m²におよぶ。今回の調査は3次調査あたり、調査面積は11,056m²を数える。

今回の3次調査で検出した遺構は、古墳時代前期では竪穴住居跡7棟、それに伴う外周溝、外周土坑、土坑など、平安時代では、掘立柱建物2棟、焼土坑8基など、中世では、掘立柱建物2棟、土坑1基などである。

牧野東住宅建て替えに伴う招提中町遺跡の調査で検出した遺構の密度は、1次調査区、2次調査区、3次調査区の順となり、特に3次調査区の東側に行くに従い遺構・遺物とも少なくなる傾向を示している。

これらの3次にわたる調査で検出された遺構・遺物は次の通りである。

旧石器・縄文時代では、遺構は検出されなかったが石器、縄文土器が後世の包含層から出土している。

弥生時代前期では土坑3基、土壙墓と考えられる土坑3基、溝など。

弥生時代中期では方形周溝墓30基、土器棺墓2基、竪穴住居跡4基、柱穴など。

古墳時代前期では竪穴住居跡0基、土坑など。

古墳時代中期から後期では竪穴住居跡3基、土坑など。

飛鳥時代では、竪穴住居跡4棟、柱穴、土坑など。

奈良時代では、掘立柱建物2棟など。

平安時代では43棟の掘立柱建物、焼土坑15基など。

中世では掘立柱建物では6棟、土坑などが検出されている。

以上のように時期幅の広い数多くの遺構・遺物を検出している。

出土遺物や検出した遺構から招提中町遺跡の状況をみると旧石器時代、弥生時代前期、弥生時代中期前葉の遺構・遺物は確認できるが、弥生時代中期後半から弥生時代後期を含め、その間を埋める遺構・遺物がほとんど検出されていない。このことから遺跡が連綿と続いているのではなく、弥生時代後期までは、定住、廃絶を繰り返していたものと推定される。

時代によって遺構の濃淡はあるものの、安定して住み始めたのは古墳時代前期からで、中世まで連綿と続き、それ以降は、水田化している。

弥生時代中期以降、古墳時代前期から平安時代の遺構の配置状況から、弥生時代中期の方形周溝墓を避けているように竪穴住居跡・掘立柱建物が存在している。また、方形周溝墓の周溝上層からは、平安時代と推定される遺物が出土していることから、一部は削平されるものの、その頃まで方形周溝墓の墳丘が残っている可能性があるものが多く認められ、墓として認識されていた

と推測される。これらは、これ以降時代が下るにつれ、方形周溝墓の墳丘が削平され、水田化ないしは建物が造られるようになったのではないかと推定している。

これら3次にわたって実施した調査の中で、今回の調査で検出した主な遺構である古墳時代前期、平安時代の遺構について調査成果に基いた所見を記述する。

2. 古墳時代前期

まず、古墳時代前期においては、集落の全域を調査したわけではないので確証が得られてはいないが、出土遺物から個々の竪穴住居跡の時期を決めるることは、困難をきわめた。そこで、竪穴住居跡の配列状況から、方向によって群ないしは時期差があるのではないかと考え、検討を加えた結果、6群に分類できる可能性が考えられる。それらの中で3群中には、床面積が60m²前後を測る大型住居が存在する。それらの群中の位置関係は、遠く離れて存在するもの。群内の他の住居とは近接しているが、群の端に位置するもの。群から離れて存在しているものもある。また、大型住居跡3棟の内2棟が、住居を巡る外周溝を持つ。これらからグループ内において特殊な機能をもった住居であったものと考えている。また、これ以外にやや規模は小さくなるが、それを勾わす竪穴住居跡があり、これも離れて存在する。

しかし、住居内および外周溝から出土した遺物は、住居の用途に関する特殊なものは出土せず、一般の住居からのものとほとんど変わらない。また、住居内の構造についても規模の大小はあるものの、他の竪穴住居跡とほとんど変わらない。大型住居の機能としては、首長の住居、祭祀を司る場所などを想定しているが、規模が大きいこと、出土遺物、位置関係のみで、現在の所、大型住居の用途を考えるのは困難である。

3. 平安時代

次に、平安時代については、建物を43棟検出している。しかし、建物の柱穴からの遺物が少ないので個々の時期を特定するには至らなかった。そのため、群構成によって時期を決める試みた。これら建物の群構成は、軸方向によって分類できるものと推定され、考察の項に記述したように、10群に分類した。これらは、いくつかのグループを形成するもの。2棟ないしは3棟で単位を形成するもの。散在しているものなどに大きく分けることができた。

建物の時期は、方形周溝墓の周溝上層から出土した遺物からA群とされるI19建物が9世紀後半に比定されていることから、仮に同軸方向のものがほぼ同時期であるとすると、A群は9世紀後半といえる。

当遺跡の西側に位置する九頭神遺跡周辺で検出された建物は、奈良時代のものが大半を占めており、配列状況から官衙的性格を持つものと考えられている。それに対し、招提中町遺跡で検出された奈良時代の建物は2棟であり、極めて少ない。

平安時代になると遺構は、九頭神遺跡では検出されず、それに対し招提中町遺跡では、平安時代に比定される建物は43棟であり、急激に増加する傾向をみせている。このことから『九頭神遺跡と招提中町遺跡はその消長が連動している可能性が高く、おそらく一体をなすものであろう。』

(註) ということが指摘されている。この中でも A 群は、九頭神遺跡に続く時期の建物群であるといえる。

その中で官衙的性格を持つと考えられる建物群は、建物の配置、規模などから A 群 3 グループとした一群である。官衙的性格を持つと考えられる建物群は、全域が調査されているわけではないが、九頭神遺跡が東西約 80m、南北約 70m であるのに対し、招提中町遺跡では該当する建物群は、A 群 3 グループと推定され、東西約 30m、南北約 30m と狭い。周辺の調査区の遺構の検出状況から規模は、あまり大きくはならないと推定され、縮小する傾向が認められる。これ以外に考えられるのは、C 群 1 グループであるが、I 14 建物の床面積が約 38m² と大きいが、中央付近が未調査地区であることから不明な点が多い。

A 群以外の建物群は、9 世紀後半以降である可能性が高く、43 棟もの建物を検出している。しかし、建物の軸方向によって時期が異なると仮定すれば、A 群以降 C 群を除き、招提中町遺跡周辺の平安時代の集落は、散村といった状況を醸し出しているものではないかと推察される。

これ以外に、焼土坑が 15 基検出されているが、土坑は平面形では隅丸長方形ないしは隅丸方形をなし、壁面は焼けて赤変している。底面はフラットで焼けていない。これらからは、用途に関する遺物は出土していないことから不明な点が多い。

4. 中世

中世とされる掘立柱建物は、6 棟検出されているがいずれも時期は、12 世紀後半から 13 世紀前半に比定される。建物と建物の間は 100 以上離れており、散村といった状況を醸し出し、平安時代後半の状況と極めて似ている。

5. 小結

以上のように、3 次にわたる調査成果を簡略にまとめたが、検出した古墳時代前期の大型住居跡と一般的な竪穴住居跡との関係や、奈良時代と平安時代における招提中町遺跡と九頭神遺跡との関係など不明な点が多い。今後のさらなる調査・研究に期待したい。

<註>

財団法人枚方市文化財研究調査会 『九頭神遺跡 II』 枚方市埋蔵文化財報告第 44 集

<引用・参考文献>

大阪府教育委員会 『招提中町遺跡』 大阪府埋蔵文化財調査報告 2001-1 2002

大阪府教育委員会 『招提中町遺跡・II』 大阪府埋蔵文化財調査報告 2004-1 2005

財団法人枚方市文化財研究調査会 『九頭神遺跡 II』 枚方市埋蔵文化財報告第 32 集 1997

財団法人枚方市文化財研究調査会 『九頭神遺跡』 枚方市埋蔵文化財報告第 44 集 2004

報 告 書 抄 錄

ふりがな	しょうだいなかまちいせき・Ⅲ						
書名	招提中町遺跡・Ⅲ						
副書名							
卷次							
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	2009-11						
編著者名	奥和之 横田明 富田卓見						
編集機関	大阪府教育委員会						
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351（代）						
発行年月日	2010年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	。〃〃	。〃〃		調査原因
しょうだいなかまちいせき 招提中町遺跡	ひらかたし 枚方市 ひがしまきのちょう 東牧野町	27210	29	34 50 53	135 40 49	平成17年5月16日 ～ 平成19年1月31日	11,056 府営牧野 東住宅 建替
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
しょうだいなかまちいせき 招提中町遺跡	集落跡	古墳時代前期	住居跡 7棟	土師器			
	集落跡	古代	建物 2棟	黒色土器			
要約	古墳時代前期、古代、中世時期にわたる複合的な集落遺跡である。古墳時代前期には竪穴住居7棟を中心に土坑や溝などの関連遺構、古代には掘立柱建物や焼土坑などが発見されている。						

図 版



調査地区周辺（北上空より）

図版 1



調査区全景

図版 2

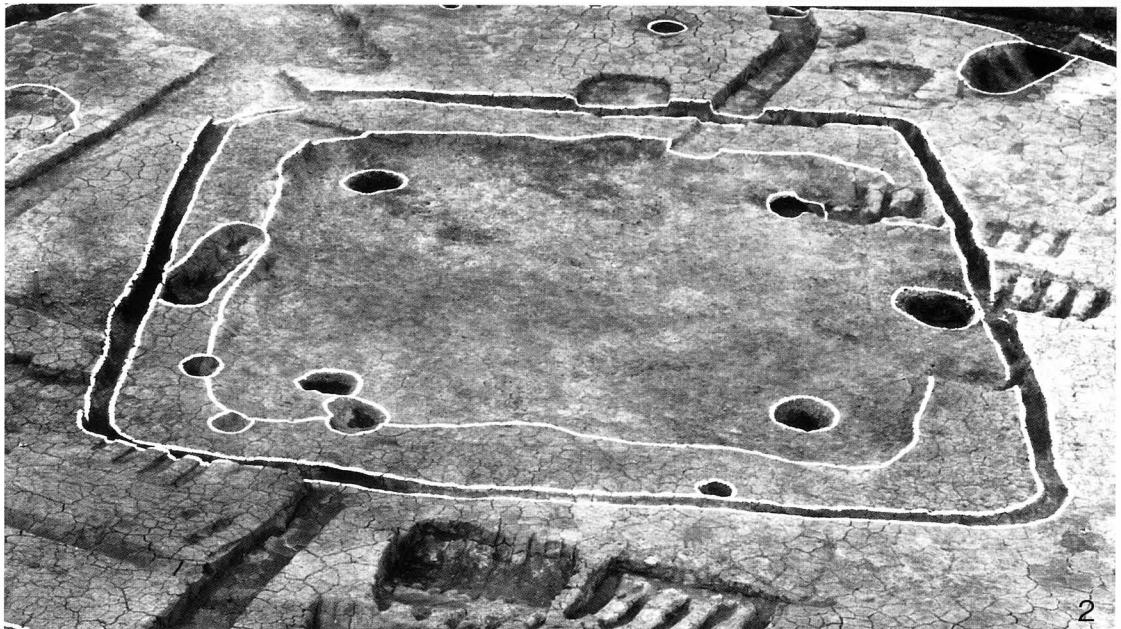
住居 1

1. 全景（空中写真）



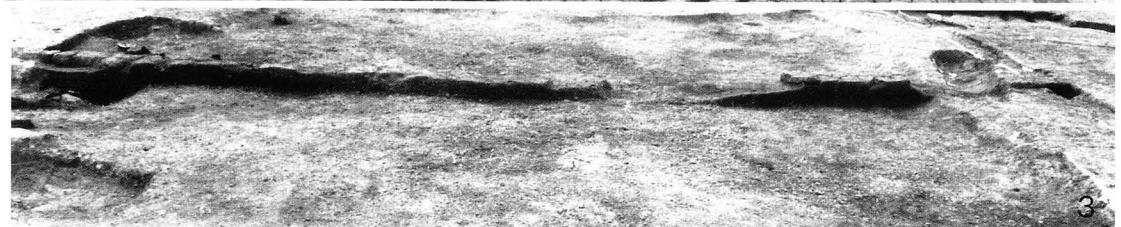
2. 383住居全景

(西より)



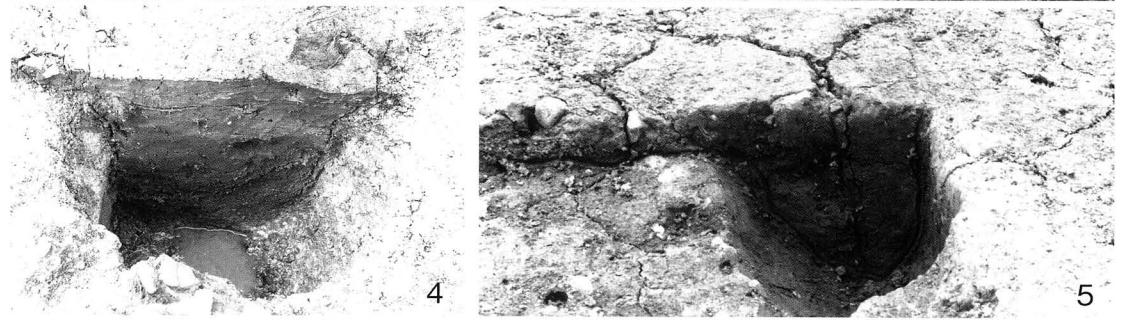
3. 383住居土層断面

(東より)



4. 387壁際土坑土層断面

(東より)



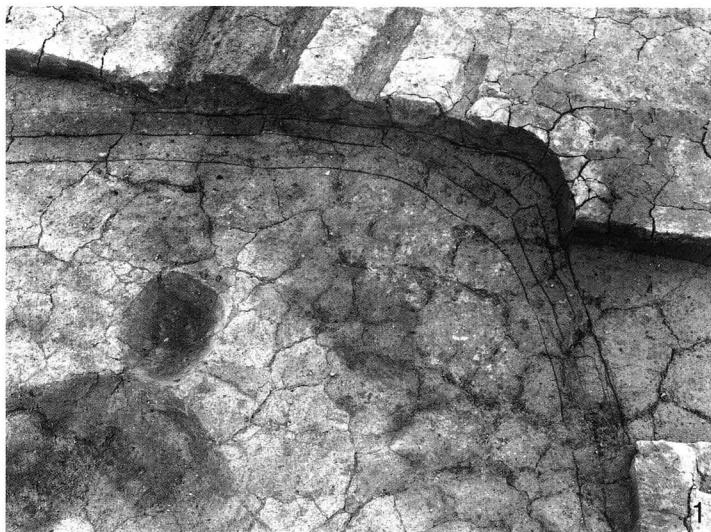
5. 383住居壁溝土層断面

(東より)

図版3

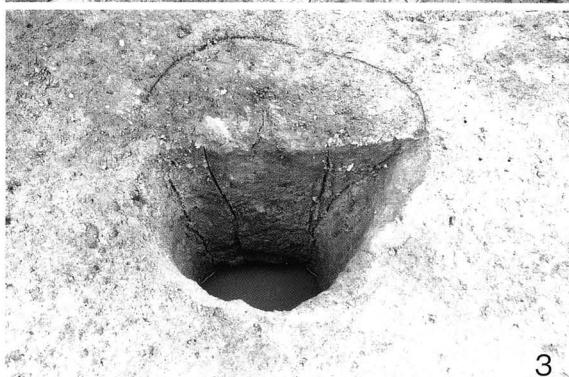
住居1

1. 383住居壁溝板材痕跡
状況（東より）



2. 383住居ベッド状遺構
土層断面（東より）

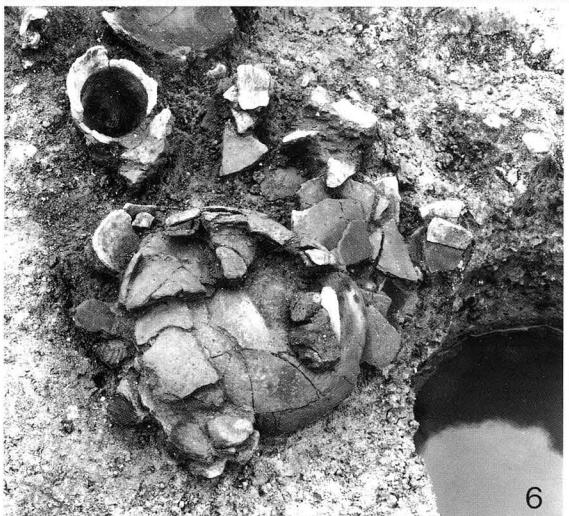
3. 670柱穴土層断面
(北より)



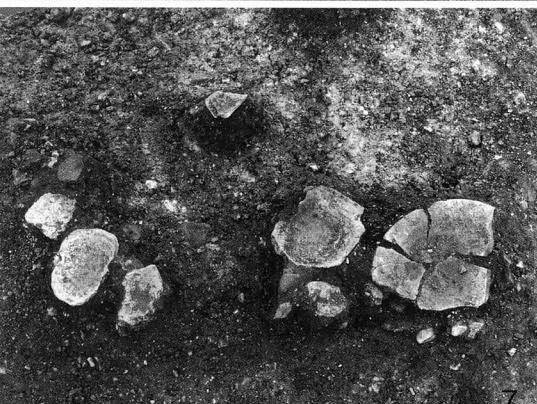
4. 670柱穴遺物出土状況
(北より)



5. 387壁際土坑周辺遺物
出土状況（北より）



6. 387壁際土坑周辺東側
遺物出土状況
(北より)



7. 387壁際土坑周辺西側
遺物出土状況

図版4

住居1・住居2

住居1

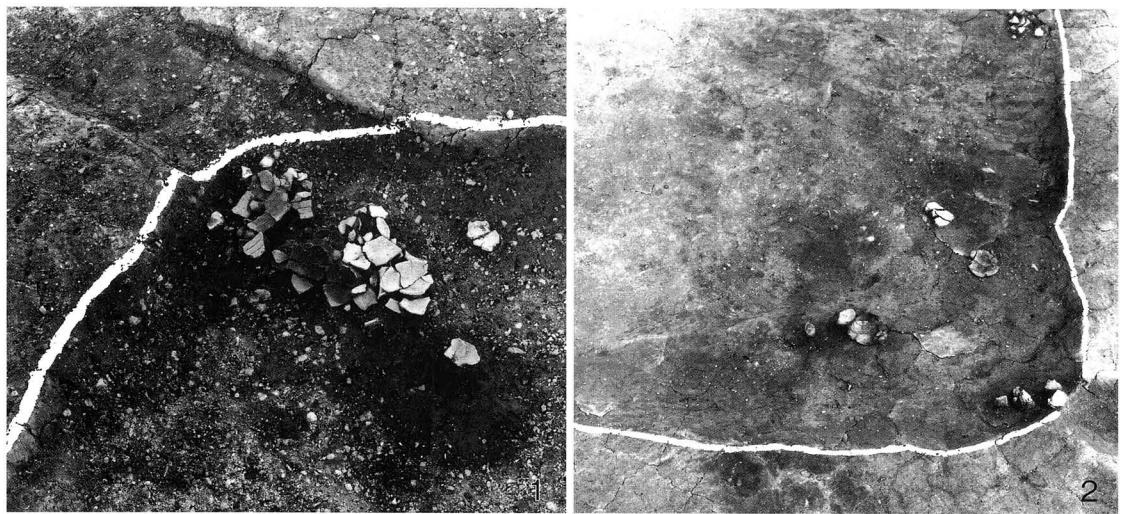
1. 383住居北東角付近
遺物出土状況
(西より)

2. 383住居北西角付近
遺物出土状況
(北より)

3. 384外周溝遺物出土
状況(東より)

4. 384外周溝土層断面
(東より)

5. 386排水溝土層断面
(南より)



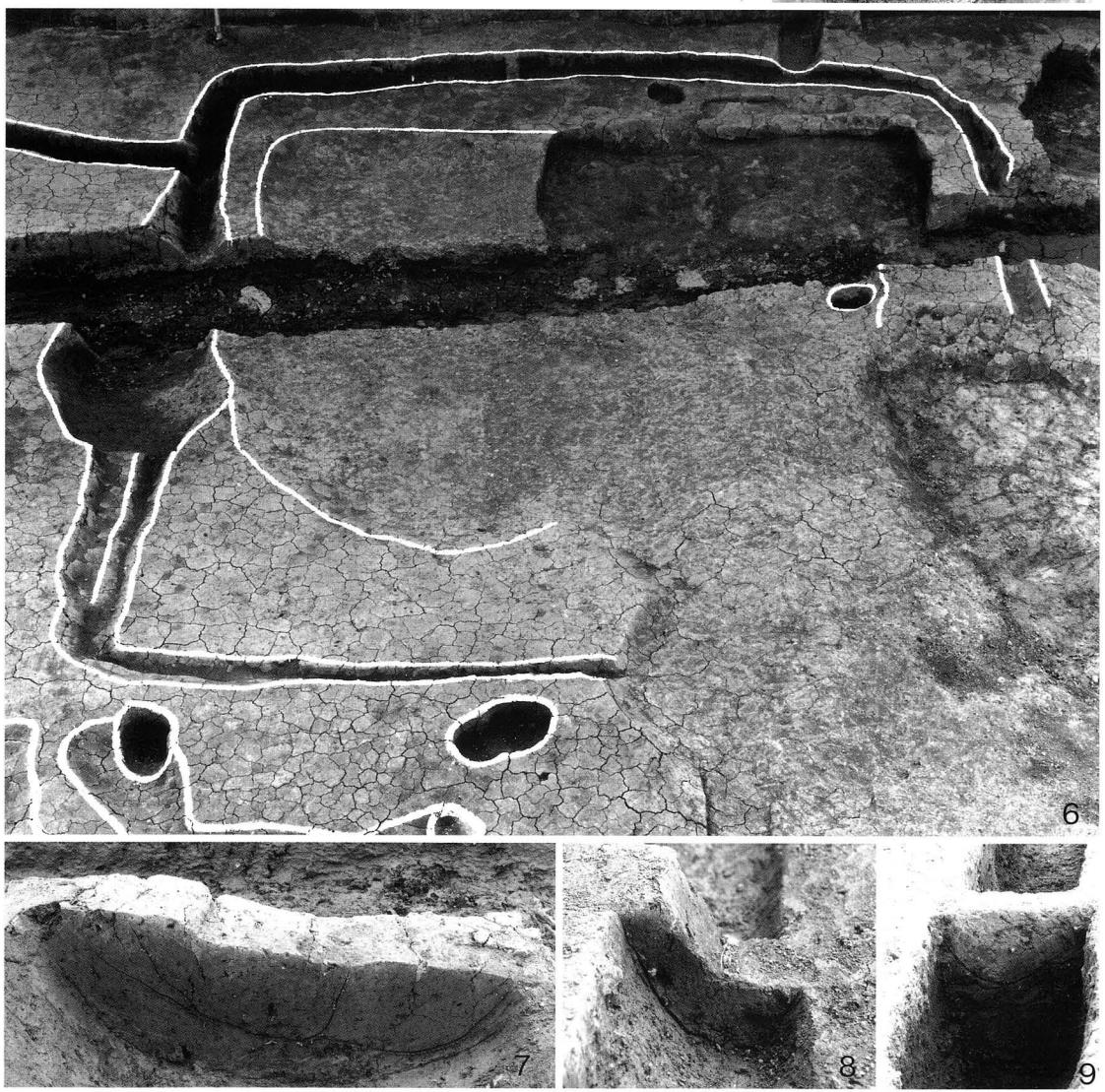
住居2

6. 542住居全景
(東より)

7. 518土坑土層断面
(東より)

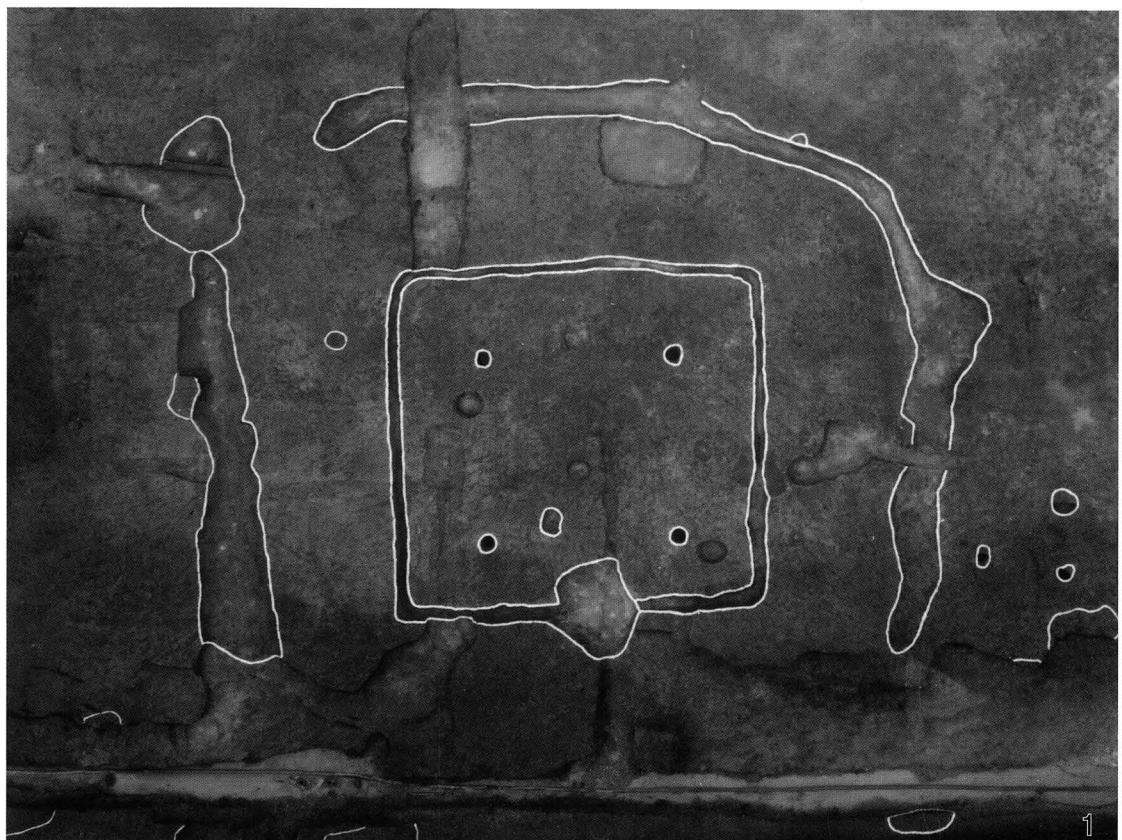
8. 542住居壁際土坑断面
(東より)

9. 545排水土層断面
(南より)



図版 5

住居 3



1. 全景（空中写真）



2. 820住居全景
(北より)



3. 820住居西辺壁溝

土層断面（南より）



4. 820住居東辺壁溝

土層断面（南より）



5. 833壁際土坑土層断面

図版6

住居3

1. 834柱穴土層断面
(東より)

2. 835柱穴土層断面
(東より)

3. 836柱穴土層断面
(西より)

4. 837柱穴土層断面
(西より)

5. 838中央土坑遺物
出土状況 (北より)

6. 838中央土坑土層
断面 (北より)

7. 820住居南角遺物
出土状況 (南より)

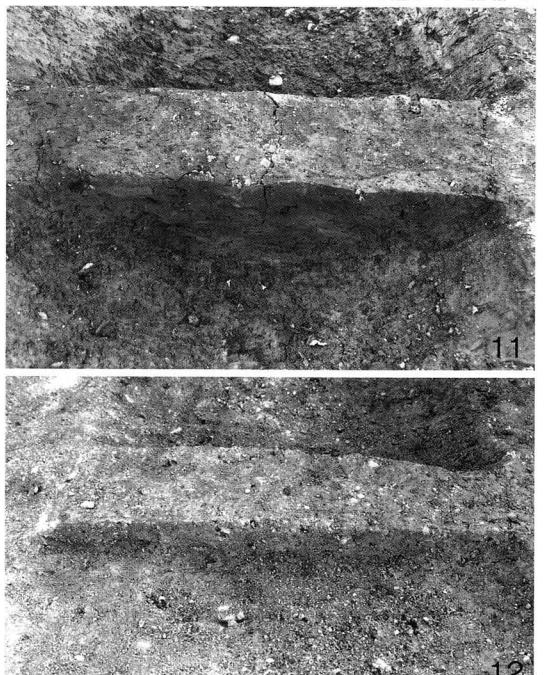
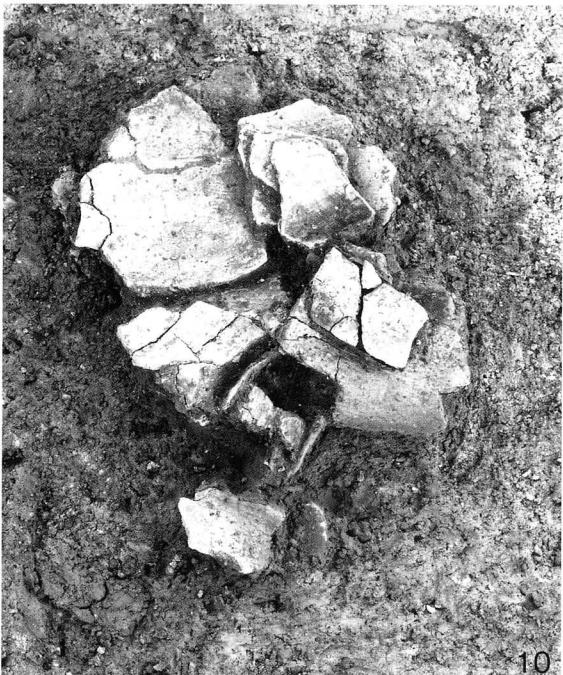
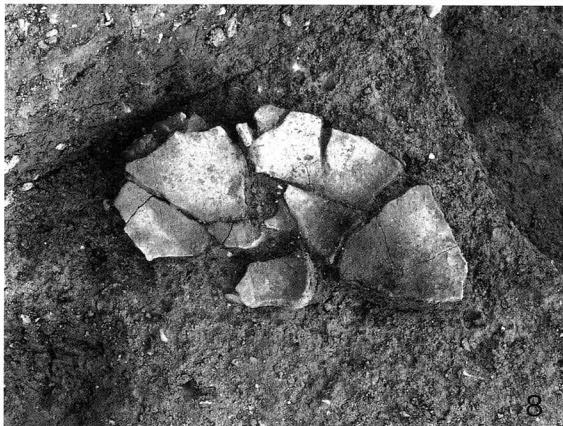
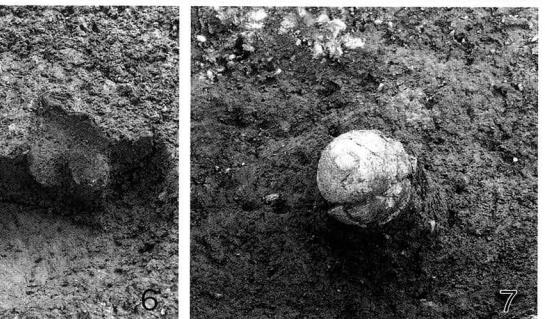
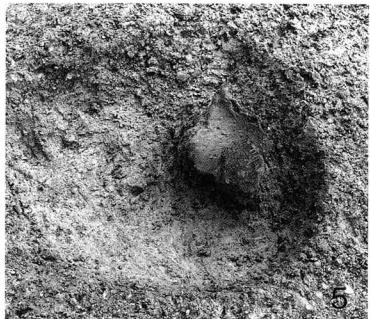
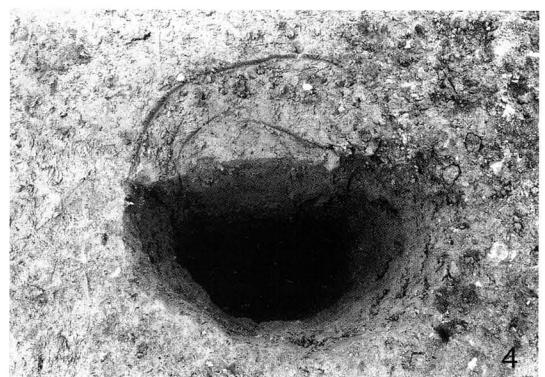
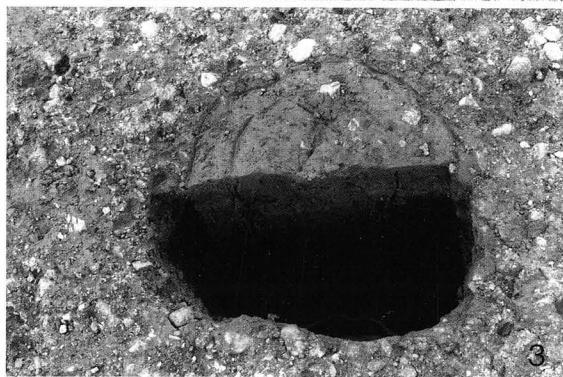
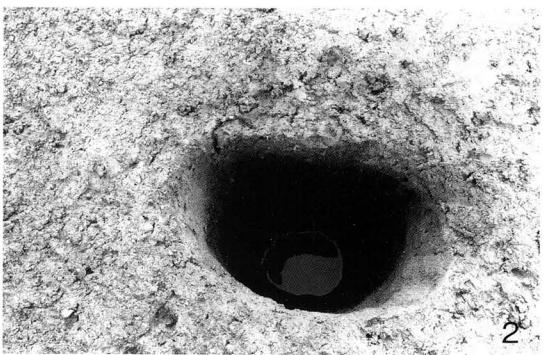
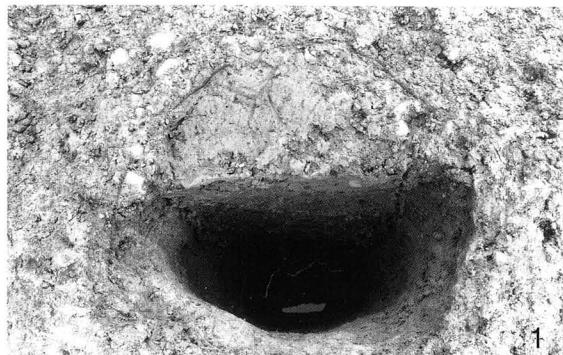
8. 820住居東角遺物
出土状況 (南より)

9. 820住居西角遺物
出土状況 (東より)

10. 822溝遺物出土状況
(東より)

11. 822溝北側土層断面
(東より)

12. 822溝東側土層断面
(南より)

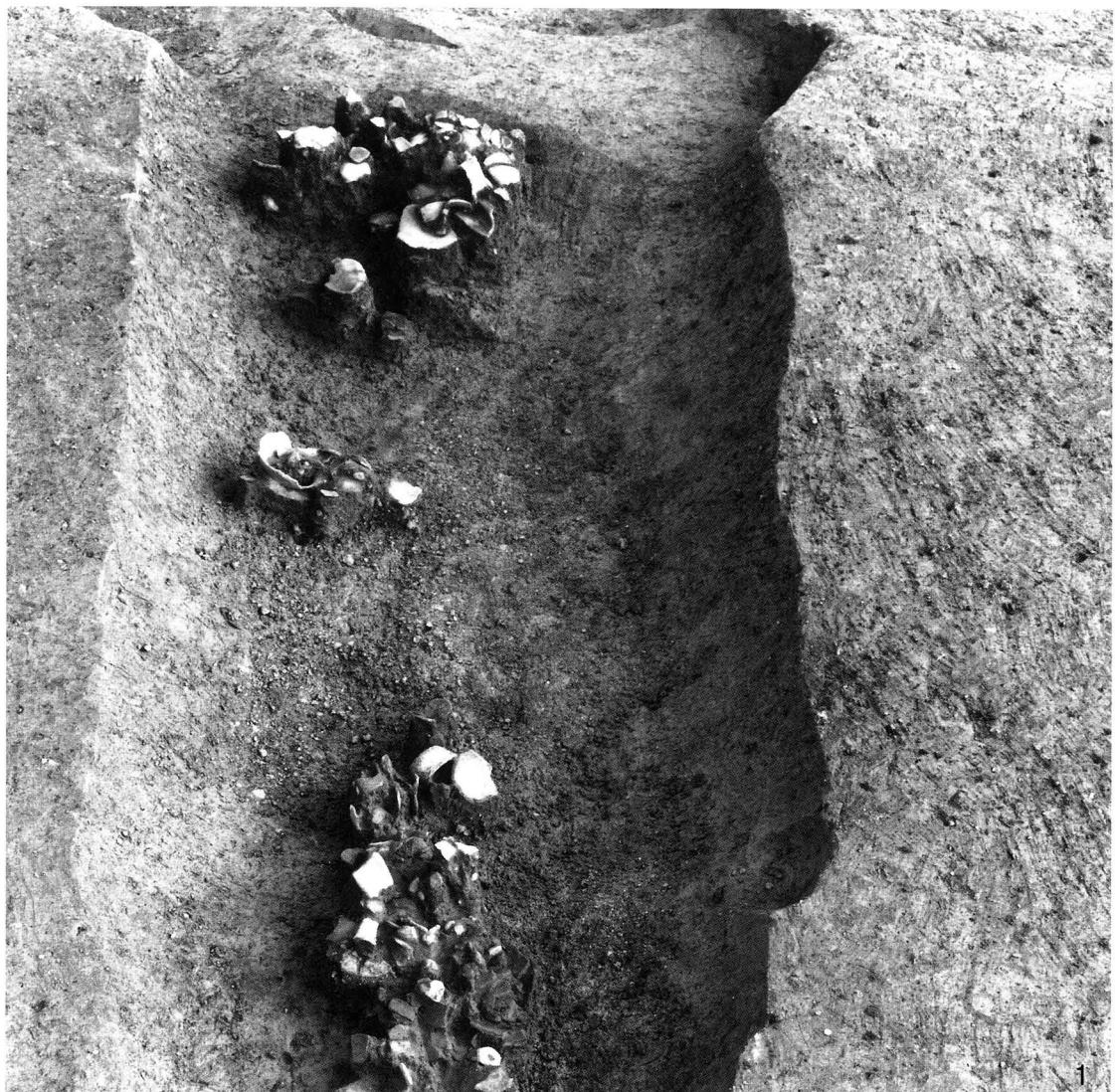


図版 7

住居 3

1. 823溝遺物出土状況

(北より)



2. 823溝南側遺物出土

状況 (西より)



3. 823溝土層断面

(南より)

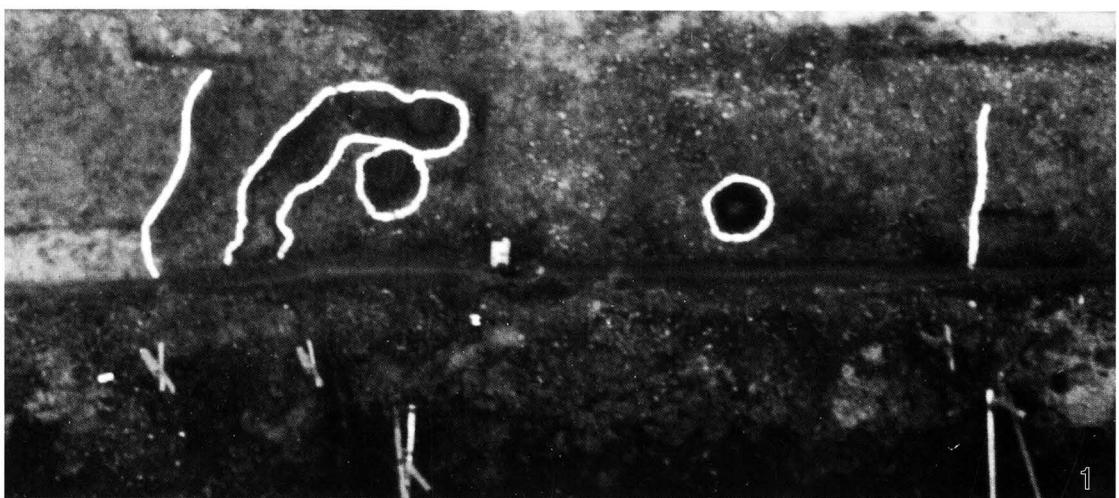


図版8

住居4・住居5

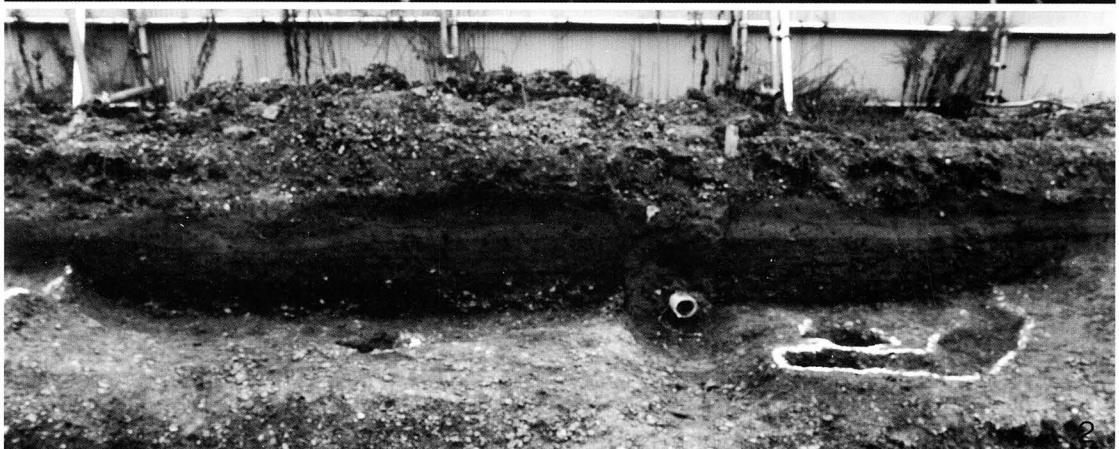
住居4

1. 全景（空中写真）



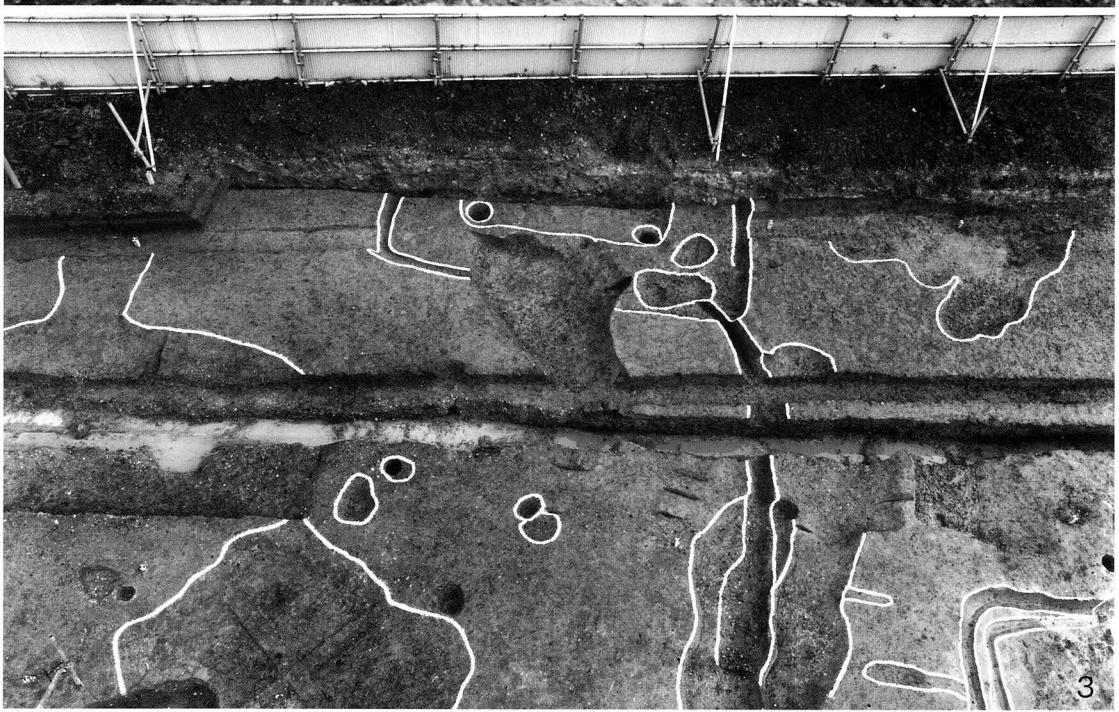
2. 1063住居土層断面

(北より)



住居5

3. 全景（北より）



4. 829落ち込み遺物

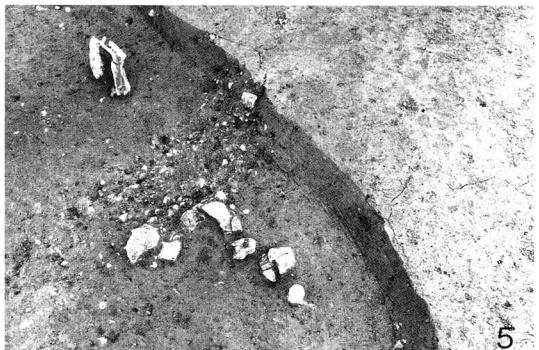
出土状況（東より）



4

5. 815住居北西角遺物

出土状況（北東より）



5

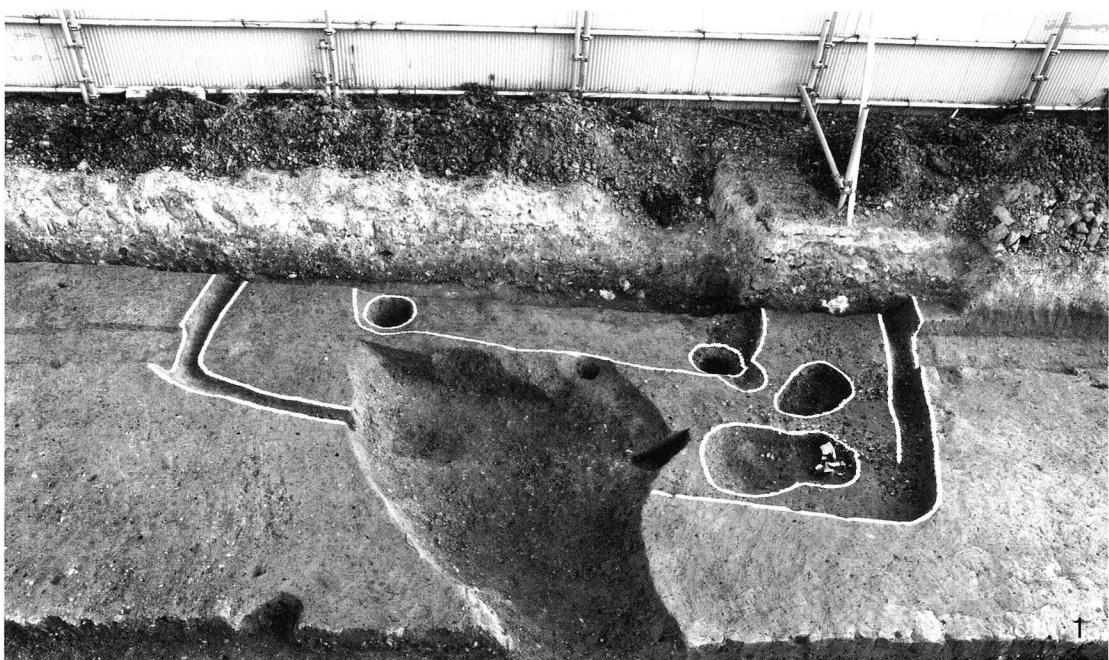
図版 9

住居 5・住居 6

住居 5

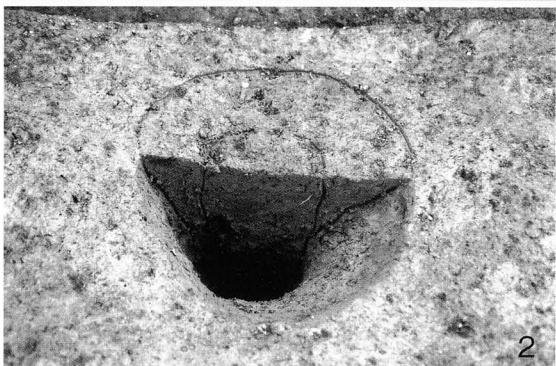
1. 815住居全景

(北より)



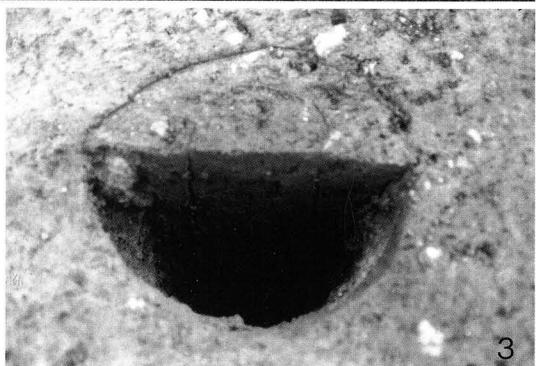
2. 826柱穴土層断面

(北より)



3. 827柱穴土層断面

(北より)



住居 6

4. 全景（空中写真）



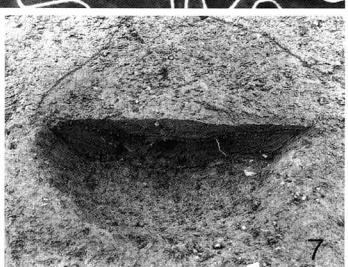
5. 807住居東辺壁溝土層
断面（南より）



6. 808壁際土坑土層断面
(西より)



7. 825中央土坑土層断面
(南より)



5

6

7

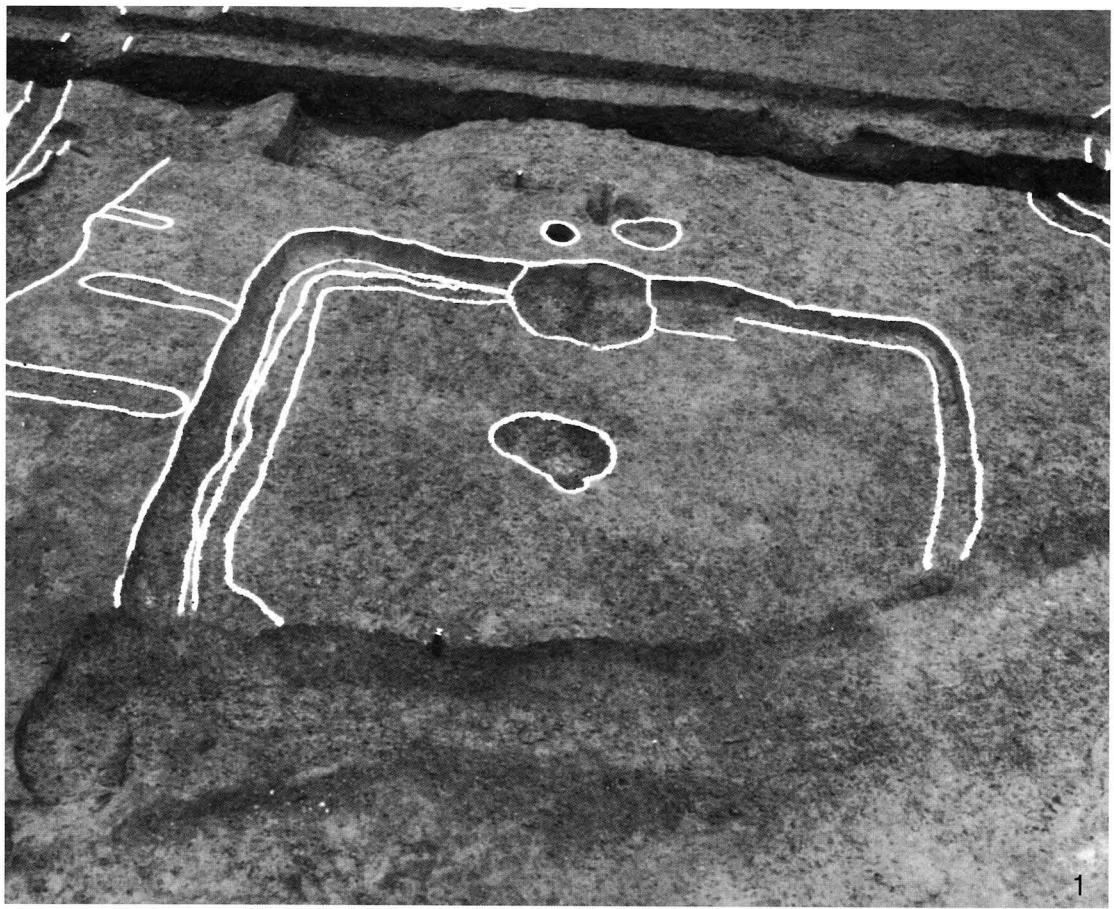
図版 10

住居 6・住居 7

住居 6

1. 807住居全景

(北より)



1

2. 809溝遺物出土状況

(東より)



2

3. 809溝内高坏出土状況

(南西より)



3

住居 7

4. 990住居全景

(南西より)

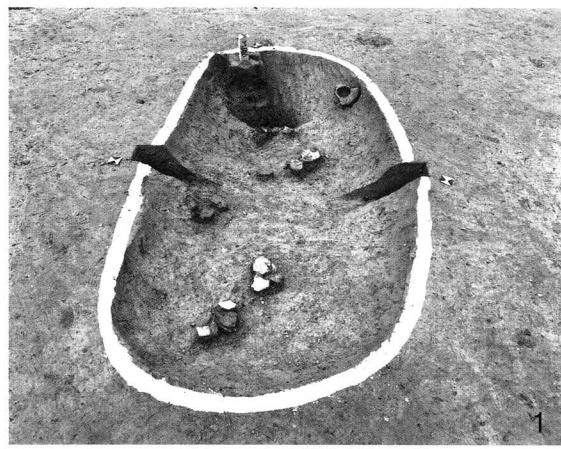


4

図版 11

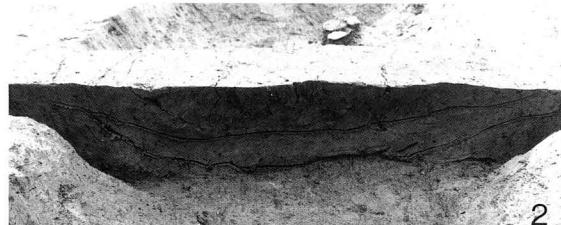
古墳時代前期の土坑

1. 256土坑遺物出土状況
(西より)



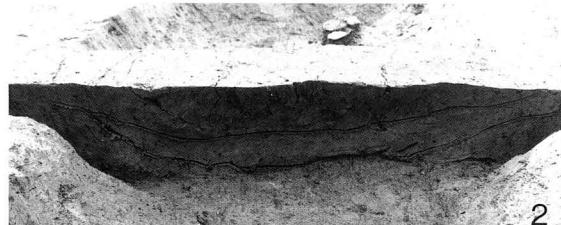
1

2. 256土坑土層断面
(東より)



2

3. 399土坑遺物出土状況
(東より)

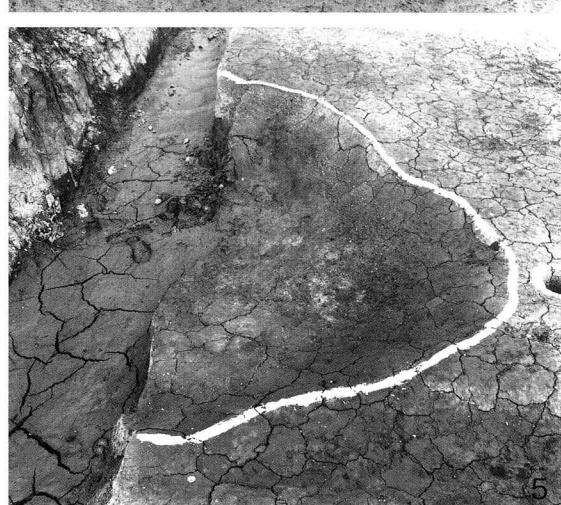


3

4. 399土坑土層断面
(東より)

4

5. 508土坑 (西より)



5

6. 508土坑土層断面
(西より)



6

7. 806土坑遺物出土状況
(南西より)

7

8. 806土坑土層断面
(西より)

8

9. 824土坑遺物出土状況
(西より)



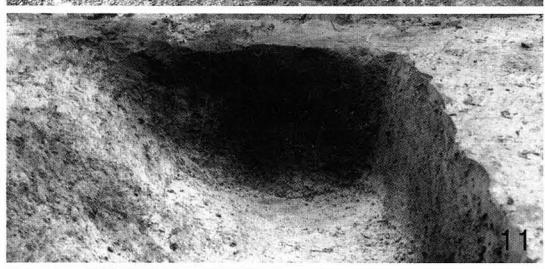
9

10. 824土坑土層断面
(南より)



10

11. 391土坑土層断面
(空中写真)



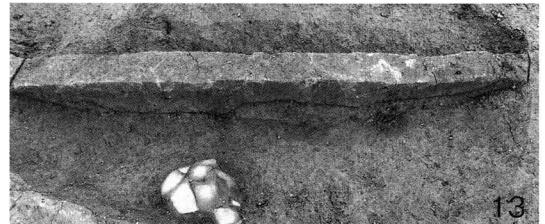
11

12. 住居 2 512外周
坑土層断面 (東より)



12

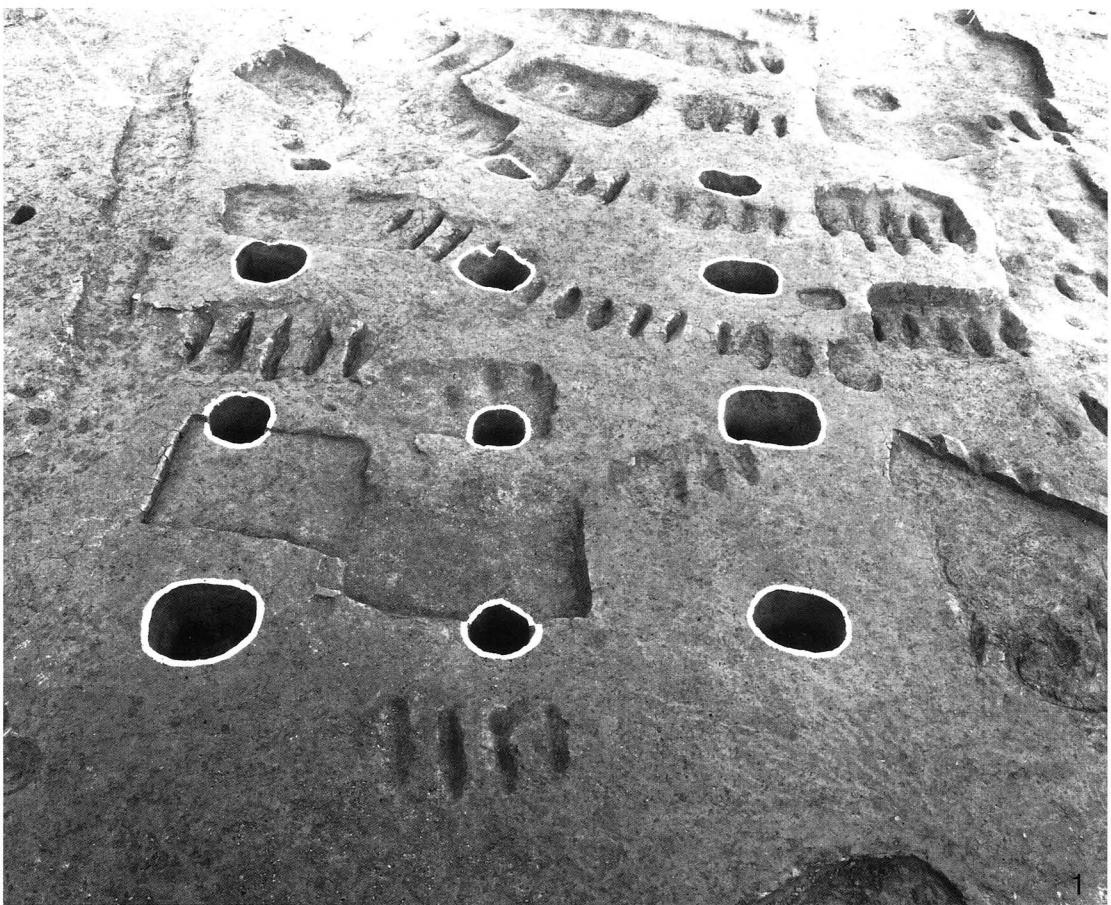
13. 538土坑断面
(南西より)



13

図版 12

建物 2



1. 全景（西より）



2. 995柱穴土層断面
(南より)

3. 1000柱穴土層断面
(東より)

4. 1005柱穴土層断面
(東より)

5. 996柱穴土層断面
(北より)

6. 1001柱穴土層断面
(南より)

7. 1006柱穴土層断面
(北より)

8. 997柱穴土層断面
(北より)

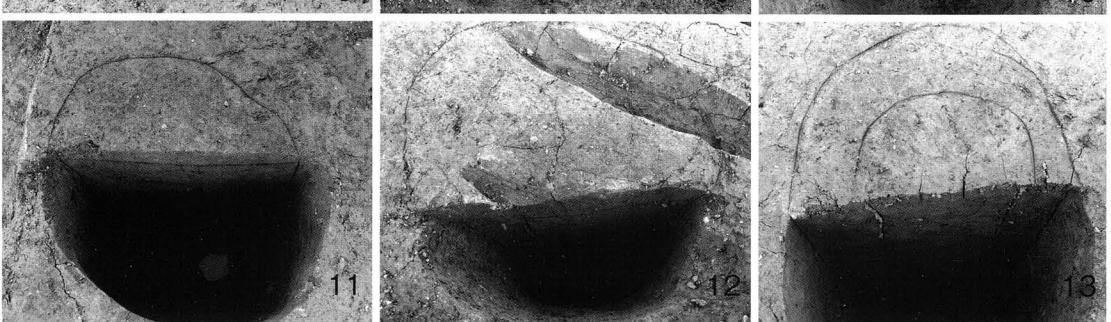
9. 1002柱穴土層断面
(南より)

10. 1007柱穴土層断面
(東より)

11. 998柱穴土層断面
(北より)

12. 1003柱穴土層断面
(南より)

13. 1008柱穴土層断面

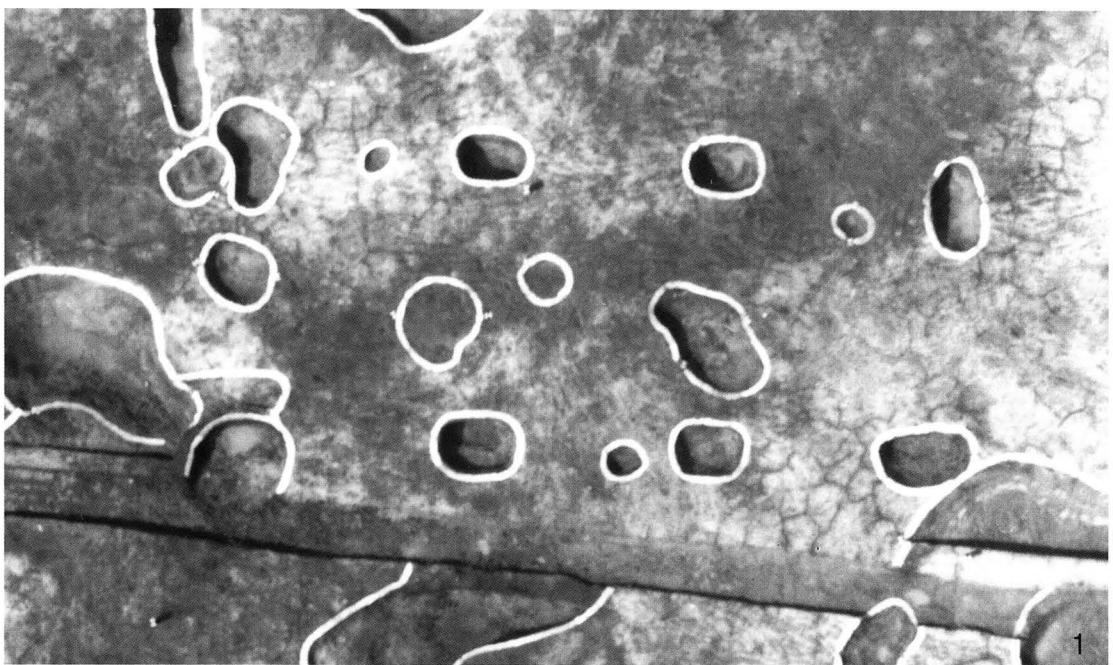


図版13

建物4・焼土坑

建物4

1. 建物4全景
(空中写真)

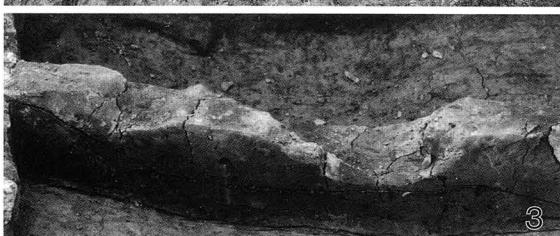


焼土坑

2. 509焼土坑
(南より)



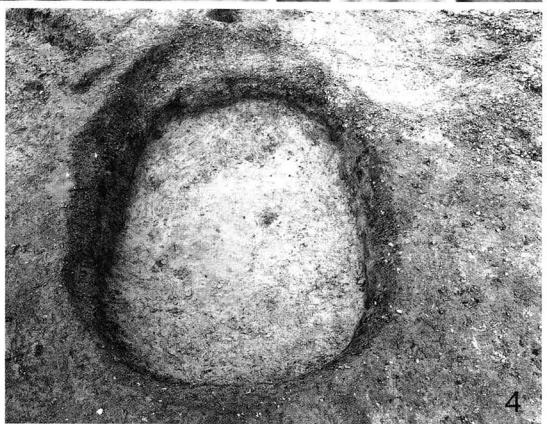
3. 509焼土坑土層断面
(東より)



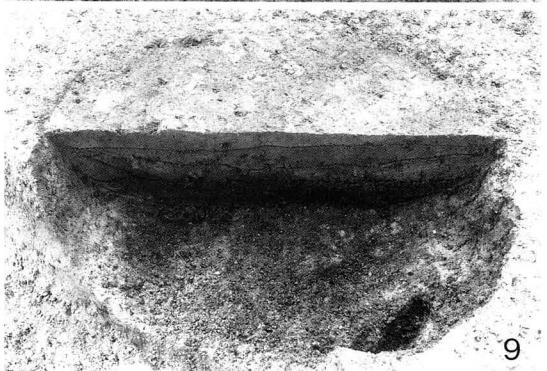
4. 633焼土坑
(南より)



5. 633焼土坑土層断面
(南西より)



6. 889焼土坑
(南西より)



7. 889焼土坑土層断面
(南より)



8. 897焼土坑土層断面
(東より)



9. 1030焼土坑土層断面
(北より)



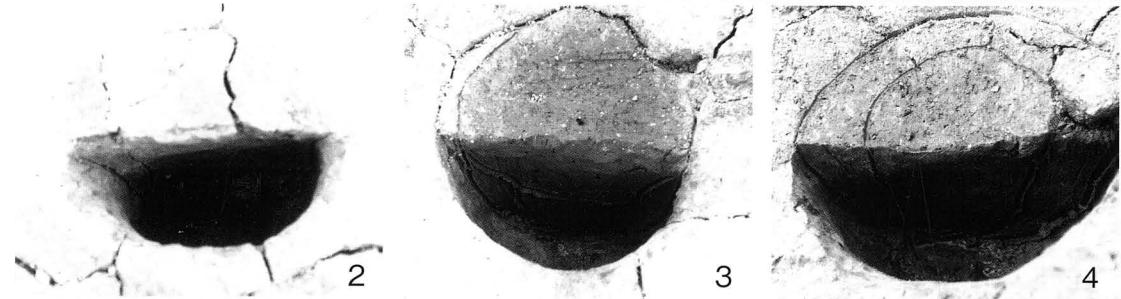
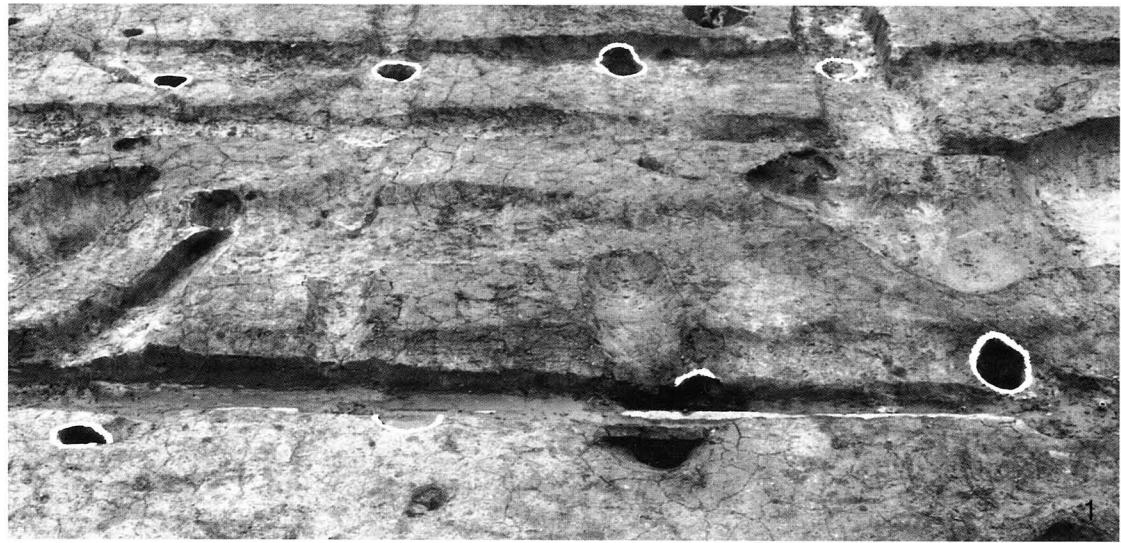
10. 1031焼土坑土層断面
(北より)

図版14

建物1・建物3・
中世の遺構

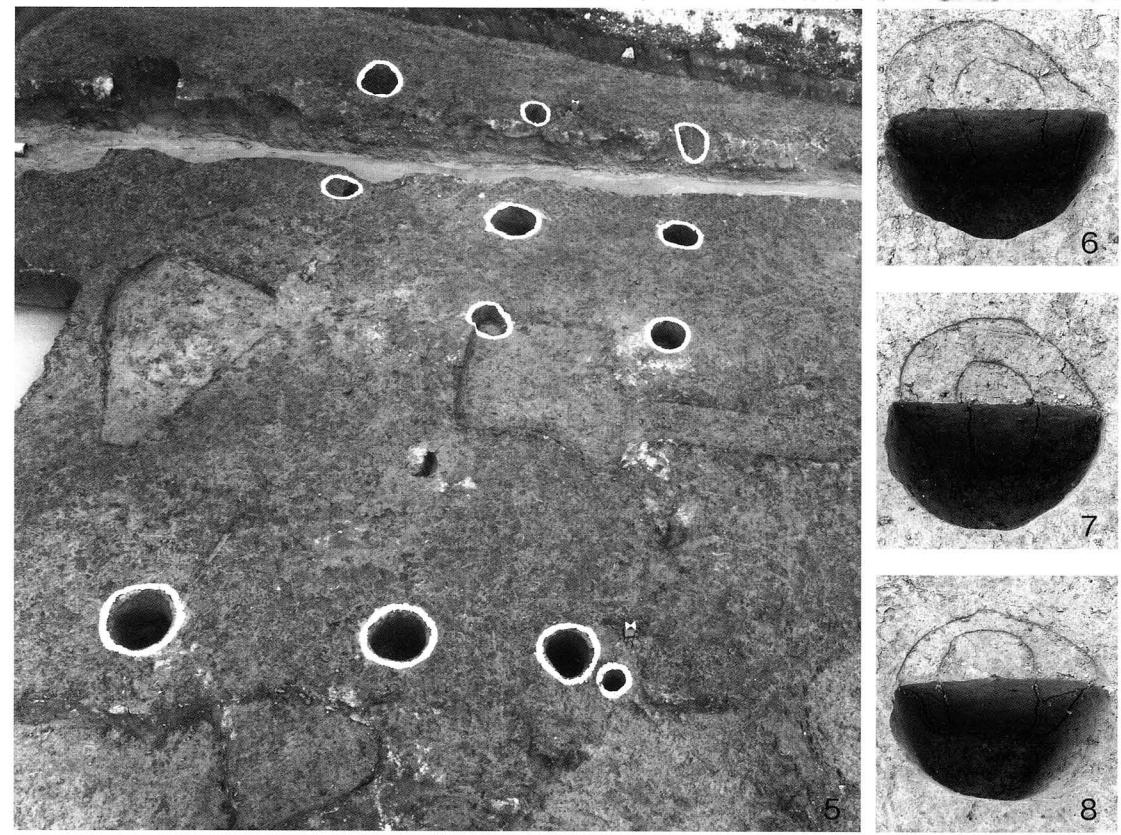
建物1

1. 建物1全景
(西より)
2. 691柱穴土層断面
(西より)
3. 699柱穴土層断面
(北より)
4. 1031柱穴土層断面
(北より)



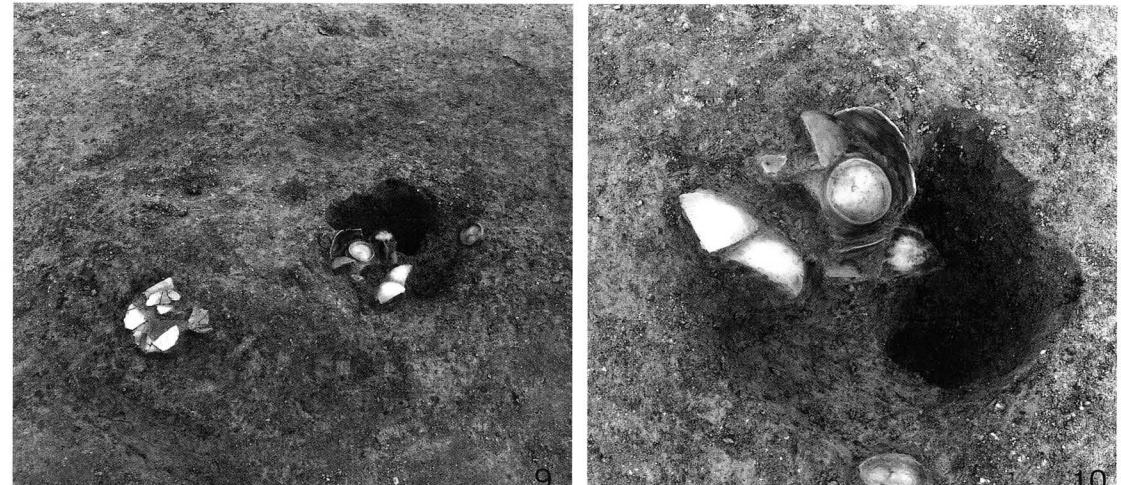
建物3・柵列1

5. 建物3・柵列1
全景(南より)
6. 972柱穴土層断面
(東より)
7. 973柱穴土層断面
(東より)
8. 977柱穴土層断面
(東より)



964土坑・1053穴

9. 964土坑・1053穴
遺物出土状況
(北より)
10. 1053穴遺物出土



図版15 遺物(1)



6 (388)



7 (388)



6 (388)



8 (388)



9 (388)



11 (388)



10 (388)



12 (383)

図版16 遺物(2)



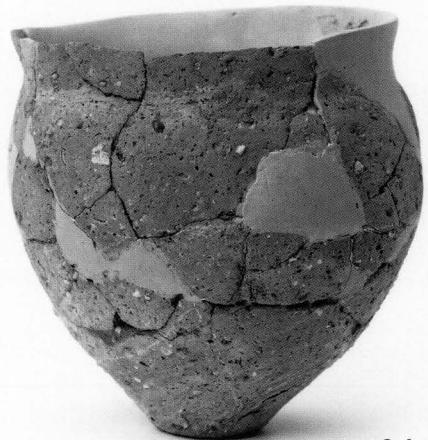
13 (383)



15 (383)



20 (384)



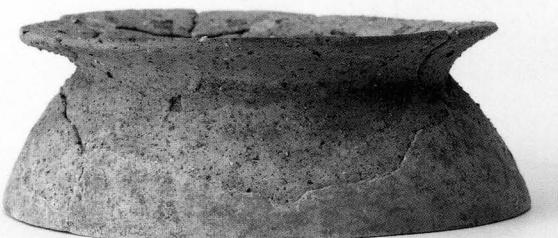
34 (820)



31 (545)

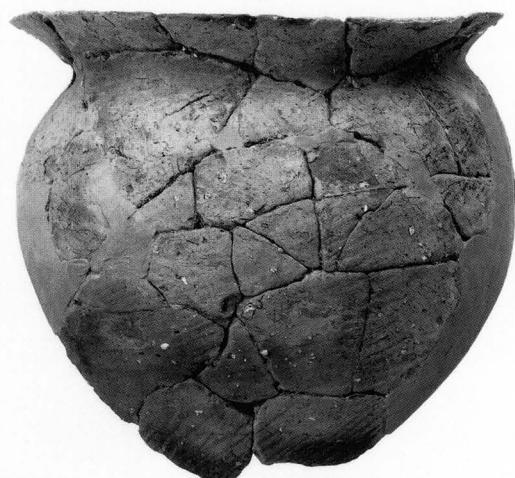


36 (823)



44 (823)

図版17 遺物(3)



50 (823)



42 (823)



41 (823)



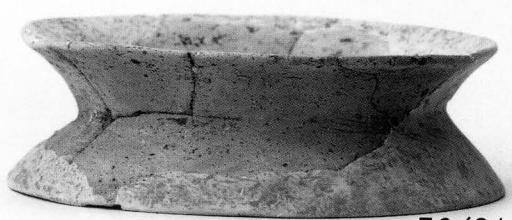
52 (828)



54 (811)



66 (811)



56 (811)

図版18 遺物(4)



79 (809)



74 (809)



80 (809)



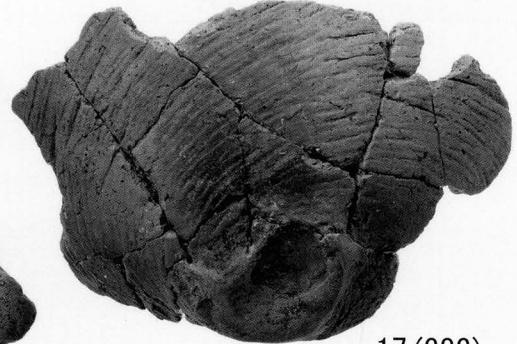
106 (333)



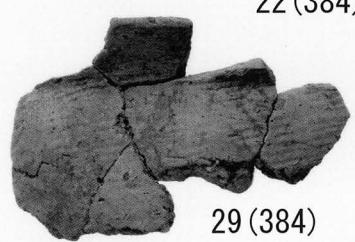
22 (384)



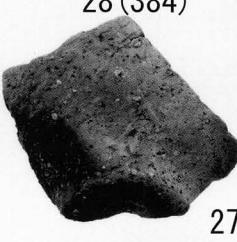
28 (384)



17 (383)



29 (384)



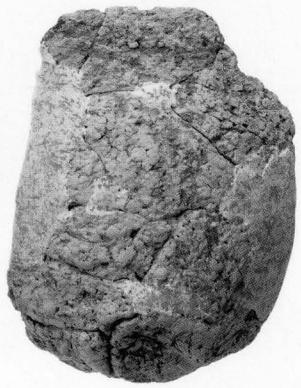
27 (384)



19 (383)



18 (383)



14 (383)

図版19 遺物(5)



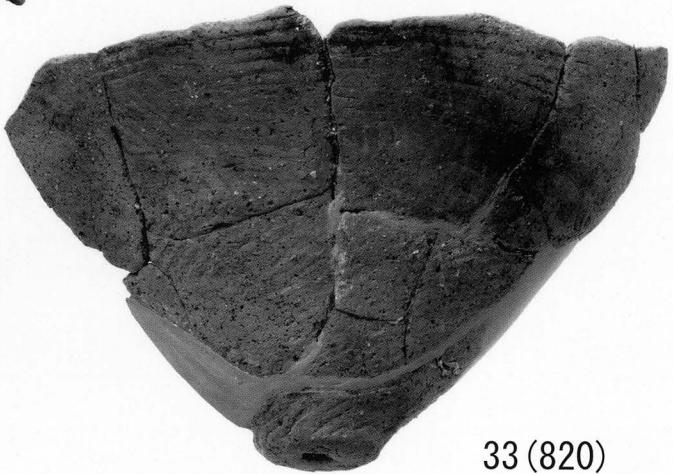
37 (823)



43 (823)



32 (838)



33 (820)

67 (811)



65 (811)



38 (823)



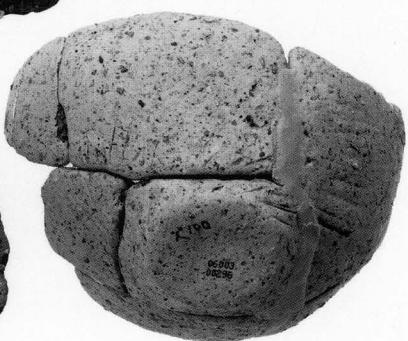
62 (811)



47 (823)

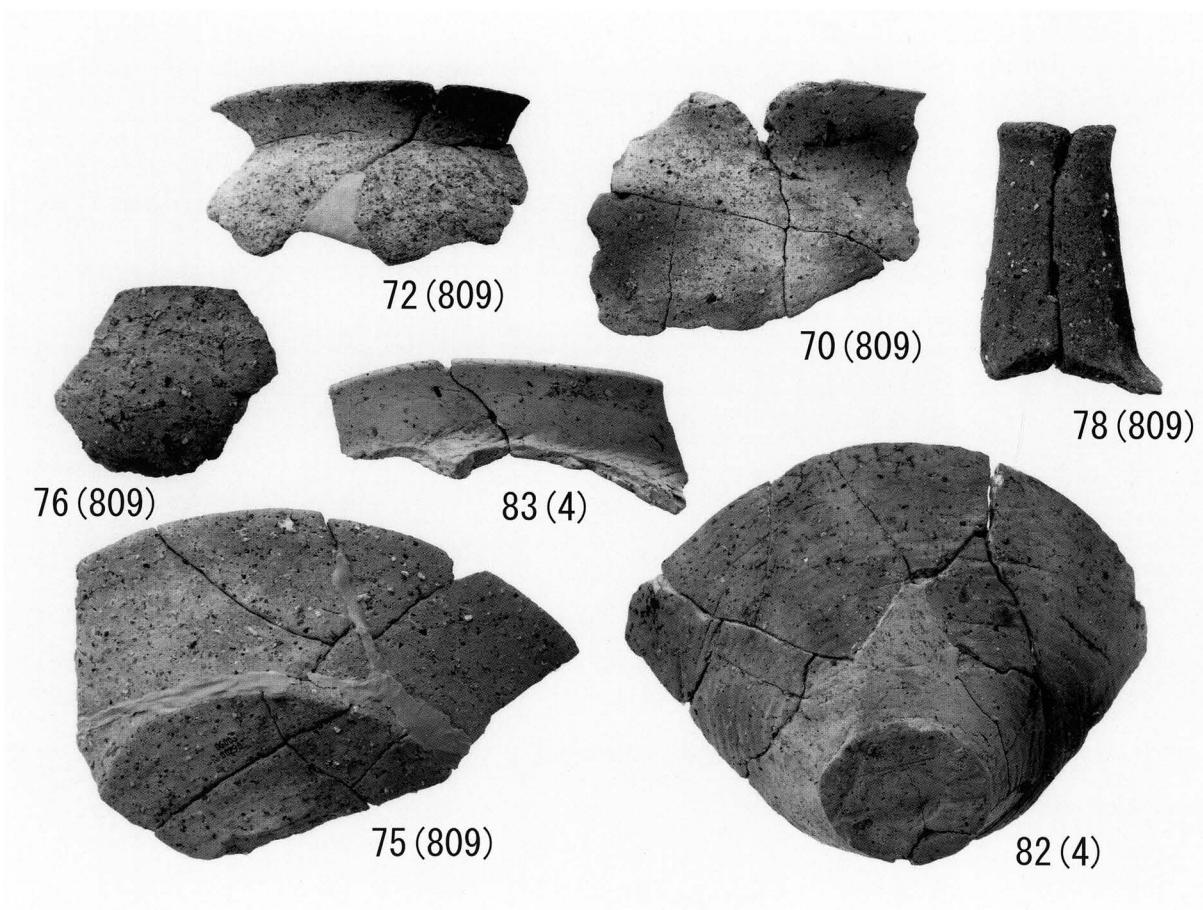
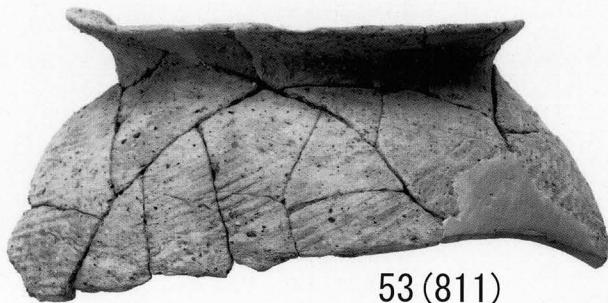


51 (823)



63 (811)

図版20 遺物(6)



大阪府埋蔵文化財調査報告2009-11

招 提 中 町 遺 跡・Ⅲ

-府営牧野東住宅建て替え工事に伴う発掘調査-

発 行 大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目

TEL 06 (6941) 0351 (代表)

発行日 平成22年3月31日

印 刷 石川特殊特急製本株式会社

〒540-0014 大阪府大阪市中央区竜造寺町7番38号

